

# オーティオドラマ「カーティスト」

深水深月 ふかみ みづき  
三ツサ

浅倉仁 あせくら しのぶ  
浅倉枢 あせくら かなめ

如月七海 きづきななみ  
黒辺真夜 くろべ まや

田中

【一】 「海に浮かぶ月を見上げて」

「一」

ムホへ、と海に沈む二人

M深月「海を見上げる。――底から、空色に煙めく水面を。きらきらと、舞い降りてくるのは光の粒……淡く、空の中く泡と共に消えて行く幾ばくかの想い」

M深月「子供の頃からたまに、不思議な夢を見る。眩しいほどに青白い海の大井と、私を呼ぶ、優しい声」

仁「深月――、むめんね、深月っ……むめんっ……」深月に覆いかぶさるようにして

深月「しのぶ――……、」抵抗できなう

M深月「ひんやりとして、――けれど温かな指先が絡まり、涙が海に落けていく」

仁「っ……」

深月「んっ――、」キスされて

仁「――っ……、はぁ……」見つめて、泣きそっ

M深月「『私は』、すぐそばにある親友の顔を見て、そんな事を、思い出していた」

深月「しのぶ……――、」

仁「深月……、」※徐々に後悔が込み上げてくる

深月「っ……、」※こんなこととして欲しくなかった

M深月「私たちは、落ちていく。溺れるはずのない海の底へ。飲み込まれてゆく――。――遥か遠くに映る輝きに眠りめられて……。……親友の泣顔が、夢の少女に重なった」

深月「オーティオドラマ・カラーテキスト 第一話 海に浮かぶ月を見上げて」

「二」

深月「では、失礼いたします」

扉を閉める深月。波の音

深月「……よしっ」

M深月「久しぶりに帰ってきた町は思ったよりも変わってはいなくて、強いて言うなら昔より潮の香りが濃くなっただけ……ような気がする。でもきつとそれは思い出補正つてやつで、結局あんまり変わってないんだろなって気持ちないでもない」

深月「懐かしいなぁ……」

M深月「海に沈んだ町、耳をすませば聞こえてくるうみそ口の囁き声――。……今日、私は――、帰って来たんだ」

海の音に耳をすませ、鮮明な波の音

深月「……………」※ふっと微笑む

M深月「とは言っても、あんまり覚えてなかったりもするんだけど――、」※少し和む

仁 「おーっすー！」驚かせもっす  
 深月 「……？ えっと……仁……？ (そんなに驚いてない。自然体で) わーっ、変わってないねえっ」暖簾に腕押し  
 仁 「え、ええ変わってませんよけど……？ あれえ……？」  
 深月 「ん？」  
 仁 「違っつ……私の求めていたのはあーっ……なんかこっつ……カチンー！」  
 深月 「デコピンですかー」  
 仁 「ウエエエー？」  
 深月 「威力は申し分ないですよー！」  
 仁 「先生から禁止令出るぐらいだもんなっ……？ー！ 身を以て知ってますよー！」  
 深月 「あの頃の私だと思わないでねッ……」  
 仁 「私とてあの頃のように吹き飛ばすことはないがッ、しかしっ……！ー！ んらっ……！ー！？」  
 深月 「ぷっ……あははっ、変わってないねー」  
 仁 「そーいつ深月も。っん、なんだかまー見違えちゃったけど、深月だよな？ 深水深月」  
 深月 「そーいつあなたは浅倉仁ちゃんでもよろしうですかな？」  
 仁 「浅倉仁様ですよ？」ニヤニヤ  
 深月 「久しぶり」  
 仁 「っん、久しぶり。ー〇年ぶり？」  
 深月 「そうなるな。おはさんに聞いた？」  
 仁 「まーね。今日深月んちが戻ってくるのは聞いてたからせ、お待ちしておりました」※ははーっ  
 深月 「お待たせしまして、ごーも」※ぐぐぐ  
 仁 「つうといでっ、案内してあげる」  
 深月 「お願いしますっー！、にしてあげな一」  
 仁 「……広いっても、去年中等部ができて事実上の収縮だけだねー。なんなら小学校も組み込めっかって話が出てるぐらう」  
 深月 「どこも少子化かー」  
 仁 「仕方ないよ、このご時世。みんな街に出てっちやっし」  
 深月 「田舎には田舎のいらところがあるのに」  
 仁 「都会かなれかなにをいう」  
 深月 「だってほら、ー海が近いし」

海の音、一度巨とはまた違った柔らかい響き

深月 「……んーっ……、良い匂い」  
 仁 「何処だっって回っじやない？」  
 深月 「わかってないなあ、仁は」  
 仁 「んうー、深月が変わったんじゃないかなー」※苦笑まじりに  
 深月 「ん？ どゆこと？」  
 仁 「何か何処ぞのお嬢様って感じだよ？ 垢抜けちゃってまー、真事に（都会に）染まったねー」※冗談交じり  
 深月 「ええーっ……？ おかしー……？」※真剣に  
 仁 「っっん？ 変な話だけとしっくりきてる。深月っぽくなりけー深月だなーって」苦笑して  
 深月 「なにそれ」※苦笑  
 仁 「昔、深月イジメた奴らが見たら驚くだろーな一」  
 深月 「そんなに？」  
 仁 「言葉も出ないかもね。っって言っても、あいつらもう覚えてないかも知んないけど。なんなら返っかないかもよ？ 深月だって」  
 深月 「んー……、そこかなあ…？ 私は未だに根に持ってたりするんですけど」  
 仁 「いやいやいやっ、あんだけデコピンでやり返っしておいてまだ足りませんかー」  
 深月 「流石にもつやらないけどな」※笑って流す  
 仁 「忘れてやんなよっ？ 女の子に泣かされて見てるこっちが可哀想になるぐらうだっただんだけ。鬼の深月だって」  
 深月 「それはっーもすみませんねー」  
 仁 「（苦笑）だからこそ、深月がさ・女の子って感じになっってて私は驚いたのですー」  
 深月 「はーはー？」※あしらっ

仁 「神社、どうするって？ 復興させる気あるの？」  
深月 「んー……そのつもりはもうないみたい。もう壊れそつだし成すがまま、成されるがまま任せようって。……お父さんも役所の仕事で忙しいみたいだし」  
仁 「深月の巫女姿は着めないのかー？」  
深月 「残念でしたー」※笑って  
仁 「絶対似合っのにー」  
深月 「やめてよもー……、……あれっ……？」※ふと目が止まる  
仁 「ん？」※足が止まる  
深月 「あれって……柩？ ほら、あっちの校舎」  
仁 「んうー……？ ああ、柩、柩。んで隣歩いてるのは生徒会長」  
深月 「へー……背、伸びたね。びっくりした」  
仁 「双子なのになんてこんな差が出るたーねえ……？ 私も驚きだよ……」  
深月 「えー？ 仁があんなだったら私はやけどなあー」  
仁 「個人的にはもうちょっと色々成長して欲しいっていつか……んうー……」※ぐにもぐにも  
深月 「（くすりと受け替えて）生徒会入ってるんだ？」  
仁 「ううん？ なんてゆーか……彼女？」  
深月 「柩にー？」  
仁 「まーね。もう取っ替え引っ替え。ちょーっと正着るからって調子乗りすぎなのよねえ……そのうち刺されんじやないかしら」ギヤグの方向  
深月 「またまたあ」わかってて笑う  
仁 「むしろ刺されるって感じだけ。ーちで、ついたよ？」  
深月 「……？ 行き止まり……っていつか、出口？」  
仁 「考えただけと。校舎案内するより先にオスススポット教えとかなきやかって？ ーせこれから時間はタンアリあるんだし」※嬉しい  
深月 「一理ある」※クスクス  
仁 「でしょ？ といつこと、ごかいちよー？」

ちよーっと扉を開ける

深月 「―――、わーっ……」

波の音

深月 「すごいっ……！ー なにこれー」※眼前に広がる一面の海  
仁 「二、三年前の地震変動で完全に沈んじゃったからさ、こっち側の校舎裏って一面海なのよ。一応補強してあって崩れることはないから安心。ー特別棟だから普段は誰もこないんだけど……いかがかな？」  
深月 「凄いなこれ。崖の上に立ってるみたい」  
仁 「ここを境に向こうの方までずっと続いてて……、ほら、川群あつたの覚えてる？ ちよこんって頭だけでた奴。あれもすっぽり沈んじゃったんだよね」  
深月 「ほんと？」お目々キラキラ  
仁 「行ってみる？」  
深月 「行こっつ」  
仁 「そーつくると思ってた」※ニヤニヤ

カバンを校舎に放り出して飛び込む二人。ぷくぷくと泡が上がり、二人の体は沈んでいく。

M深月 「西暦二千何百年。今から数百年前に地球は海に沈んで、それから人類は少しずつ、進化を遂げるような形でその世界に適応して行った……らしい。今はもう廃業した我が神社ではそれを海神様のご加護と呼んでいて――、」

ぷくぷく泡をあげながら泳ぐ二人。

仁 「（笑みを浮かべる）」  
深月 「（微笑み返す）」

M深月「煙めく水面、差し込む太陽。私たちは、空こそ飛べやしななければ、海を泳ぐことはできる——。透き通った、空色の海の中を……まるで、鳥のように」

深月「寒い景色だね」

仁「どう？ 街の方じゃビルを見下ろすなんて出来なかつたでしょ？」

深月「そうだね。あっちの方は結構陸地残ってるし、こんな景色……何より水がすごく綺麗かも……お魚も……、……あんなに沢山、いないよ？」

仁「あーっ、あっちの海って潜りたくないかも……」※目瞞げ

深月「……ビル群がこちら辺りてことは……もしかして小島も沈んじゃったの？」

仁「うん。正しくは山だっただけだよ」

深月「へえ……あそこはすこし残ってるもんだと思ってたのに。変わるもんだすな——……」

仁「——ねえ、深月。私さ、やっぱり嬉しいんだよね。深月がここにいてること」

深月「ん……？」

仁「曲がりなりにも深月がここにいて、私がここにいて——。……こうやってまた話せることがなんだか嬉しいの」※苦笑

深月「なにそれ、なんか照れ臭いんだけど」※照れ照れ

仁「うん、私も恥ずかしくてやばいや」苦笑

深月「自業自得ですねー」

仁「えへへ」

深月「(クスクス笑い)」

M深月「緩やかに、しかし確実に私の知っている景色は変わっていて。記憶の中の景色と、それらは随分と様変わりしていて——……だけど変わらないものもここにはある」

深月「(控えめに笑う)」※うふふ？クスクスへ

仁「なによー」※自分のことを笑われていると思った

深月「なんでもないですよー」

M深月「何だかそのことが、嬉しかった」

「3」 自宅

深月「ただいまーっ……で、……お母さんは挨拶回りか……。……はーっ、疲れたーっ……。ー」

M深月「不安と好奇心、どっちの方が優ってたなんて一概には言えない。だけどホッとしたのは否定ない。また、この街で暮らしたいとは思ってた。だけど、やっぱり心配だったから」

廊下を歩いて自宅へ。カバンを置いてベッドに座る

深月「ふっ……」

M深月「もう一人の、——本物の“///ツキ”のことか」

深月「なんだか戸凝こちゃったよ、///ツキー」

///ツキ「うん、一日お疲れ様」

深月「はーっ……、部屋の片付けは任せてーらーらへ」

///ツキ「任せてどーっを？ 代わるよ」

深月「んー」※入れ替わり

///ツキ「ダンボール適宜に開けるけど、機が片付けちゃっていらんだよね？」

深月「リヤアウトに関しては///ツキの方が適任でしょー。……私そーいうの苦手だし」

///ツキ「だったねー……。わ、なにこれ、……ははわ？」

深月「クジラ猫。可愛くない？ 向こう出るときに見つけて買って来たの」

三ツキ 「また変な物を……」  
深月 「だって止めなかったし」  
三ツキ 「やれやれ……」  
深月 「仁、覚えてくれててよかったね」  
三ツキ 「まーね、忘れられてるかと思ってたんだけど」  
深月 「年賀状ぐらゐ毎年出せばよかったのに」  
三ツキ 「ええー？」 ※苦笑気味に流す  
深月 「はー……。……枢、彼女いたねえ」  
三ツキ 「いたねえ……。昔からカッコよかったし、驚きはしないけど」  
深月 「……羨ましい？」  
三ツキ 「なんで？」  
深月 「ぐっつにー？」 ※はー。ふてくされる  
三ツキ 「変な深月」 ※クスクス  
深月 「けどまー、私は仁と話せて楽しかったな……。街の友達とはやっぱ違う感じだったし」  
三ツキ 「なら安心した。心配だったんだ。深月は街に残りたいんじゃないかって」  
深月 「へ？ なんでそうなるの？」  
三ツキ 「楽しそうにしてたじゃん。街での生活」  
深月 「そりゃそーだけど、私は別に――、……あつー。ちよこと待ってそれは私がやるー」  
三ツキ 「え？ いいよ、休んでて。疲れてるんじゃない？」  
深月 「そうじゃなくてそれ入ってるの下着だから……！」  
三ツキ 「あー、変なところどころでちゃんと女の子なんだよねえ、深月って」  
深月 「氣にするでしょふつー。ほら、変わって変わって。変わったらしばらく田をつぶってて」  
三ツキ 「はいはい」  
深月 「はあ……」

#### ダンボール片付け始める

深月 「鈍感なんだから……。」 ちよこと拗ねてる

M深月 「10年前、深水深月という『女の子の体』に生まれたもつー人の『女の子としての人格』、それが私だった。私が生まれてからはずっと『元々いた三ツキ』は自分の部屋以外では表に出てこなくなつて、……いつか、出たくなつて言い始めた。だからこそ、この『深水深月』という『少年』は私を生み出したんだと思つてそれを否定するとはできなくて。ずるずるとそのまま、私は『深水深月』を引き受けている、もつづつと、10年啦」

深月 「はあつ……。」 ※でもそれは嫌ではない、世話が焼けるなあ？ っで感の溜め息

M深月 「私は、引きこもりの三ツキを守っている偽物の深月。だけど、それも悪くないと思つている。思つてしまつー、だって私は」

深月 「(苦笑)」 ※照れ気味。世話が焼けるのは自分もだ。

M深月 「私は、そんな彼が好きだから。……一人の男の子として、いつの間にか、好きになってしまつていたから。……だから私は、」

深月 「馬鹿だなあ」 ※一種の充実感

M深月 「叶わない恋だと知りながらも、彼を守り、傍に居続けたい。――彼が私を必要としてくれるかぎりには」

三ツキ 「仁は……。いつなんたる」

深月 「へっ……。？ ー。なにが……。？」

三ツキ 「ああ、だめん。独り言」

深月 「氣になるじゃんー」

三ツキ 「んうー……。……ほら。枢に彼女できたんなら、仁にも彼氏いるのかなーとか……。……双子なんだしって

もおかしくないかなって……」

深月 「双子は関係ないと思うけど……そっちなあ……。あの感じだとしらないんじゃない？ 枢のこと悪くするのは昔からだけど、若干ヤキモチ入ってる感あったし」

ミヅキ 「そこか」※隠しきれてるかな、ぐらいにホッとする

深月 「えっと……。あー……。」※ちよつと影が差す

ミヅキ 「なに？」

深月 「んんっ？ なんでもないっ」※ギリギリ持ち直す

ミヅキ 「変な深月」※勘付かない

深月 「疲れてるんだよねっ、ほらー。終わったから交代交代ー。私は寝ますー」

ミヅキ 「ハイハイ？」

M深月 「スキリと、鋭く走った痛みのワケは。考えないことにした」

深月・ミヅキ 「続く」

「4」次回予告

真夜・ヨウ 「次回予告ー」

真夜 「やーっ、始めましたねカラーテイスト」

ヨウ 「始めましたね、カラーテイストー」

真夜 「私が僕で、僕が私でー。君は一体誰なのかー」

ヨウ 「巡る巡るは我の想いー。流れ流され何処へゆくー」

真夜 「うずまく海流ー。煌めく想いー」

ヨウ 「遥か彼方に見える星は、かつての面影ー」

真夜 「次回ー。カラーテイスト 第2話ー。深淵の御子ー」

ヨウ 「こんな感じでよかったんですか？」

真夜 「さあ？」

「5」次回予告

真夜・ヨウ 「次回予告ー。テーツイクつーー」

ヨウ 「やっぱりダメだったじゃないですかー」

真夜 「いや、君の責任でしょ」

ヨウ 「ええー！？」

真夜 「キヤウ崩壊してたしね、夫婦漫才じゃないんだから。ていうか崩壊するキヤウすら確立されてないんだけど、僕たち」

ヨウ 「ではまずは自己紹介をするべきなのではー」

真夜 「次回予告でそれはじーよー。本編のお楽しみなんじゃないかなあ？」

ヨウ 「くえええ……。？」

真夜 「だってほら、ここは本編関係ないんだし、第4の壁突破していかないと」

ヨウ 「カベツ……。壁ですかー？。壁っ……。壁エーー」

真夜 「パントマイム……」

ヨウ 「次回、カラーテイスト、第2話。私の登場ですー」

真夜 「僕はまだまだ先☆」

「6」

七海・枢 「1 .5話 対岸からの景色」

七海 「このあとって時間取れたりするのかなしら？。生徒会の仕事が終わったら少しつき合って欲しいのだけどー。……枢くん？」

枢 「え……なに」  
七海 「また上の空？」  
枢 「すみません」  
七海 「いいのだけと。……？ どうかしたの？」  
枢 「いや……なんか回こつに見かけない生徒いるな一つて」  
七海 「……？ ああ、仁ちゃんじゃない……？ ……？ 隣の子は……誰かしら。……気になるの？」  
枢 「別に。なんか昔の友達に似てたきがしたんで」  
七海 「へえ、枢くんにも友達いたんだ？」  
枢 「友達……つてか……幼馴染……？ カギのころはよく遊んでましたよ、たこ焼き作るつとして真つ黒になつたり」  
七海 「ぶっ、……枢くんが？ 想像できないんだけど」※笑いを堪える  
枢 「子供の頃の話ですよ。……最後の方は仁とはつか遊んでた記憶しかありませんけど」  
七海 「……？ もしかして女の子？」  
枢 「女ですよ。可愛かつたからそれでイジメられたりして……まあ、大抵は構つて欲しくてちょつから出してたんでしょつけど」  
七海 「へえ」  
枢 「なんすか」  
七海 「……枢くんのそんな顔初めて見たから。……面白くなつて」  
枢 「はあ……、……昔の話ですよ。昔の。懐かしくなつてただけです」  
七海 「あら？ 別に妬いたりなんてしていないんだから、気にしなくていいのよ？」  
枢 「そんなつもりありませんけど」  
七海 「自意識過剰だつたかしら」  
枢 「はい」  
七海 「(クスクス) ——それで時間は取つてもらえるのかしら？」  
枢 「七海さんがそうしたいつてんなら図書室で時間潰してますよ。終わつたら来てくださら」  
七海 「うん？」※微笑み  
枢 「……」  
七海 「……枢くん？」  
枢 「はい？」  
七海 「んっ……」※キス  
枢 「っ……、……人に見られますよ？」  
七海 「見られて困るのかしら？」  
枢 「それもそつですか」※冷めてる  
七海 「——また後でね」  
枢 「ええ。(七海を見送り、向から側の校舎に視線を送つて) ……深月……」

M 枢 「……もし、深月がこの町に戻つてきてゐるのだつたら——、」

枢 「どうすんのかな、……あいっ」

波の音でFO

仁 「続く」

「了」

深月 「〇〇役××ですーオー！トヤシメ！『カワートヤメ！』はYouTube、Podcastが主の配信の他にもおまひHJのホームページやシナリオなどを封入した有償版の配信も行なっておりますー第一話のおまひは『次回予告、トヤク2』と『1.5話 教室からの景色』です。(適宜に一言コメント追加してくださる)。詳しくは又タシメ『カワートヤメ！』の概要ページをご覧ください」



【2】「深淵の御子は巡りゆく星を見るか」

「1」

深月 「私の始まりの記憶は今でもしっかりと覚えていて。光も差し込まないような深い底に沈んだ教室の中で彼は一人泣いていた。その涙の訳も、理由も、悲しいと思う感情さえも。……私には何一つ分からなくて、ただ呆然と自分の内側にいたその子を見つめていて」

///ツキ 「君は……？」

深月 「私……私は……」

深月 「それが深月という少年の中に生まれた、少女としての人格。――それが私。深水深月という歪な存在の、少女の体をした彼にとっての守り人だった」

///ツキ 「カラーイラスト 第2話 深淵の御子は巡りゆく星を見るか」

「2」

じよばじよば、腰ぐらゐまで海につかっている

深月 「おおおう……大体股下、時折腰って感じかなっ……？ こんな海面高かつたけ……、船引っ張り出した方が楽だったかなあ……」

M深月 「陸地の残っている街とは違って、こっちの方はもう殆どの場所が海水に浸かってしまっていた。元々あったらしい石畳が水面の下で藻を生やし、人々は海面より少し高いところに店を構える。――街とは違った懐かしい景色。いまじゃこつこつ景色の方が一般的なんだろうけど、私にとってはそれ以外の場所で過ごした時間の方が既に長くなっている」

深月 「（ぶと笑つ） 、面白いなー、///ツキ？」

M深月 「あちらこちらぐと目移りしてまう」

M深月 「はったり昔///ツキをイジメていたっていう子達に出会ったらどうしようって気もするけど、お互い成長してるし、仁も随分私変わったって言うてたから別に――、」

枢 「あ」

深月 「オッ」

枢 「……深月」 はったり出くわす

深月 「枢――……」

枢 「……」

深月 「な……なんでしょうっ……？」 ※ちよっと身構える。ギヤグ方向

枢 「へえ……、やっぱ女の子になってるんだなって」

深月 「なんですかーそれー。まるで私が女の子じゃなかったみたいじゃないですかあー」

枢 「昔から可愛かったとは思つよ。けど、綺麗になつたと思つから」

深月 「っ……、そ……それは――……ありがとっ……」 ※努力しているので照れ臭い

枢 「ん」 ※そつこつ慣れてる

深月 「てかあんまり驚かないんだね。仁から聞いてた？」

枢 「まあな」

深月 「何してんの。ここ、雑貨屋さん？ 仁の付き添い？」

枢 「いや……そつこつわけじゃないんだけど」

深月 「ん？」

枢 「帰つて来たんだって？」

深月 「まーっね。週明けから同級生だよ？ もしかしたらおんなじクラスかも」

枢 「ひとクラスしかないぞ」  
深月 「そっか。じゃあまた一緒だっ。……ふーん？」 ※まじまじ見つめる  
枢 「……なに」  
深月 「相違わらずだなーって。当たり前だけどそっくり、巨乳とか」  
枢 「ああ。双子だしな。あつちはだいぶ成長期遅れてるみたいだけ」  
深月 「確かに背伸びたねー！　しま何センチ？」  
枢 「ひゃくななじゅう……80にはちよこと足りないうら」 ー78cm  
深月 「男の子ですねえー」 ※ニマニマ  
枢 「さっきからなんだよ気色悪い」 んぁー？  
深月 「いやあ、枢に彼女ができたって聞きましたねー？」  
枢 「ああ……ほんとおしゃべりだよな、あいつ」  
深月 「補足するならば一緒にいるところを目撃致したんですよ。綺麗な人じゃん。生徒会長さんなんだって？」  
枢 「肩書きはね。……そんな褒めるほどの人でもないと思っけ」  
深月 「なにそれ。ツン子し？」  
枢 「別に。本当のこと言っただけ」  
深月 「んー？　まあ、追求はこれぐらいにしといてあげましょっ。あんまり揶揄ごと破屋することの方が定着だし」  
枢 「てかさそっちこそなにしてるの、散券？」  
深月 「そんなところ。どんな風が変わったのか気になっちゃって」  
枢 「面白い？」  
深月 「私にとってはね」  
枢 「ふーん……」  
深月 「……あ、もしかして枢が待ってるのってー」  
七海 「枢くん？」  
深月 「わっ！」  
枢 「……おかえり」  
七海 「……？　どちらさま？」  
枢 「ああー……えーっと……幼馴染の深水深月、街から戻って来た」  
七海 「ああ、昨日のー、」  
深月 「はい……？」  
七海 「いいえ？　こちらの話よ。はじめまして、如月七海です」  
深月 「深水深月です……すみません、お邪魔しちゃって」  
七海 「いえいえ。随分楽しそうにお話ししていたよっだけと……どう？　一緒にお茶でもする？」  
深月 「いつ、いえいえっ、荒石にお邪魔しようしそんな度胸ないないっ」  
七海 「あら残念。枢くんって自分のことあんまり話さないから面白い話でも聞ければと思っただけ」  
枢 「なにそれ」  
深月 「では、また次の機会にでも……」  
七海 「残念。楽しいと思っただけ」  
深月 「……？　ええ……？　はい……？」 ※思っているように思えなかった  
七海 「行きましょっか、枢くん？」  
枢 「ああ、……うん……」

船をすいーっ、コムポート

深月 「……船……」  
七海 「いくらすぐ乾くと言っても洋服が濡れるのはあまり好きじゃないの」  
深月 「そ、そうですよねーっ！　この人にかてー」  
七海 「枢も乗ればって勧めてるんだけど……」  
枢 「七海さん引いた方が歩きやすいし」  
七海 「ですって？」  
深月 「なるほど……」  
七海 「それじゃあね？」

すーっと去って行く二人

「3」

深月 「ぬーん」

仁 「ありやないにやー？」 ※いつの間にか真後ろの仁

深月 「あら、しのぶ」

仁 「御機嫌よう？ みづき？ ていつか全然驚いてくれないのね」

深月 「いつから？」

仁 「膝下スカートは濡れやすいとかあたりから」

深月 「微妙に聞きそびれてる」

仁 「仕方ないじゃん！ 柊のやつがいたから近づけなかつたんだもん」

深月 「あれ？ 喧嘩でもしてるの？」

仁 「なんだろなー……思春期……？」

深月 「どっちが……？」

仁 「あっ、いつ、つつ、がつー！」

深月 「そこかなあー。あー、かなめだなーって思ったけど」

仁 「深月はそこかも知んないけど、私にはめっちゃくちや冷たいんだからー。あれはオバケだね。触れてる感触すらない」

深月 「なんとなく仲がうまくいってないのは伝わって来ますねえ……？」

仁 「昔っから何考えてんのかわかんない奴だったけどさーっ、なんかますます磨きかかって雲がかっちゃったみたいだな」

深月 「仁は面白くないねえ、何言ってるのかちっぽばりだ」

仁 「えっくん！ こで、何処行くの？ ついてって良い？」

深月 「良いけど、そこは？」

仁 「ん？」

深月 「用事とかあるんじゃないの？」

仁 「ああっ、違う違う。そもそも深月誘いに行ったらもう家にいなかったら追いかけてきたんだよー。神社裏に行くんでしょ？ 昨日戻らなっちゃったみたいだし」

深月 「なるほど。忍は私のことなら抱きついてわけですねっ？」

仁 「もちろんー」

深月 「よし、じゃあ道案内は託しましたー」

仁 「託されたー！」

「4」

街を散策する二人

仁 「とはいってもまあ結局のところここも廢村！ 歩道前って感じだしねー」

深月 「まだまだ入ると思っけじゃん？」

仁 「いやいや、年々減ってますよー？」

深月 「そーだそーだー！ こっちの電車って海底走ってるんだよねー。びっくりしちゃった」

仁 「ええ……？ そっ……？ 昔からじゃない？ ていつか、アしも廢線寸前だし」

深月 「やつは地上走ってるの見慣れちゃった感あるかなー……。もしくは地下が空にぶら下がってるのか。ほら、街って縦に長いし」

仁 「わー、やだやだ。この都会帰りがー」

深月 「こっちはこっちの魅力があるって話じゃないですかあー」

仁 「わーってるわーってる。第一、私も嫌いじゃないよ？ この街」

深月 「それは良かった。方向性の違いで解散するバンドは多いからね」

仁 「そもそも楽器弾けないじゃん」

深月 「本気でできるよっ」 ※ぐっ

仁 「謎子ミクス……」

深月 「仁は歌えるし、ちょっとういね」

仁 「柊はギターで、生徒会長さんにはどう？。無理でしょ、空中分解するイメージしか湧かないわ」

深月「やーっ、そこは桜がマラカスで七海さんはウァーオリンでしょー。長い髪似合うぞ」  
仁「マラカスは賛成だね」※ニマニマ  
深月「こと……ここ何処？ 街のはすれまで来ちゃったけど」  
仁「んー……ああ、祠のあった島の、ほらここぞ。急に落ちるとびこくりするから怖いんだけど、ん、ん、せ、の、ほ、れ、ほ」  
深月「絵になるねえ、しのぶちゃん」  
仁「バカ言ってるないで、ほらおいで」  
深月「あいなっ」

どぼん、と海に入る。どぼどぼ、泡。

深月「ーーーー、わぁーっ」  
仁「飛び込めば一面深緑の世界ってわけですからっ」  
深月「うんうんっ」  
仁「どろ街とは違って、神秘的っていつかわ」  
深月「わかるよーっ、言いたいこと……、……凄くよね、これって、……うん、すごいっ……」

深月「それはまさに精霊の森とも言える光景だった。海面に浸かり、腐り果ててしまった木々を依り代にするものにして新たな命が芽吹いていくー。泳ぎ描く魚の群、太陽を遮るエーの陰影。水面へと消えて行く光の泡はまるで生命の息吹を感じると言っても過言ではなく、」

仁「リポーターだっここ？」  
深月「この感動を一人でも多くに伝えたくてなりましたっ……！」  
仁「どうしてもエーの陰影はないわー、エーの陰影永遠続く陰影っ。らっばーかー」  
深月「くいはおっ」  
仁「あーハイハイ」  
深月「えーっ、扱い酷くないですかー仁ちゃん」  
仁「酷くないですよー？ ていつか酷いとしたら私の扱いですな深月さん」  
深月「はい？ なんのこと……？」  
仁「どーっして帰ってくるなら帰ってくるって連絡くれなかつたんですかねえー？ 離れてても連絡とってなくても友達だって思ってたのは私だけですかあー？」  
深月「それはー……その……」  
仁「むっー？」※膨れてみせる  
深月「あのですね、えーと……まあ……怖くてですね……？」  
仁「私が？」  
深月「忘れられてるのが、ですね。……電話しようとしたんだけど、もう一人の私がですねっ、やめましょー！ こわいよー！ って……？」  
仁「ことにもっ、親友も甘く思われたもんですが」  
深月「すみませぬ」  
仁「うんにゃ、私だっ深月に会うまでは覚えて貰えてるか心配だったもん。だからアボなし突撃隊だったんですし。だから、寂しかったのは本当だけどその気持ちにはよく分かるよ？」  
深月「仁……」うるうる、みつめる  
仁「な……なんでしょうっか……？」  
深月「大好き！ ありがとう！」  
仁「わっ、わっ、わー！！ なに急にー？ え、え、ええええー？」抱きしめられて  
深月「仁が友達で良かったなーって」※ニコニコ  
仁「でしょでしょ？ そーっでしょ？ 私って良い友達なんだから、大切にしないよー？ まったくー」  
深月「勿論ですっ」

鈴の音

深月「えっ……？」  
仁「ん？ どした？ なに……？」

深月「いまなんか……誰かに呼ばれた気がして」

鈴の音

深月「ほらまたー」

仁「ええ……？ 怖からせよつとしてんなら無駄だよー？ 妖怪木八ヶ幽霊の類はとっくに卒業したから」

深月「そっじゃなくて、本道に――、っ……っこちー」

仁「ちよ、ちよこと深月っこちー」

M深月「聞こえる――、確かに聞こえるよね、///ジキ……？ 誰かが呼んでる、誰か私を――」

凍った鈴の音

M深月「――ほらまたっこー」

ぽぽぽ、と脈泡が浮かぶ

深月「……っ……」

仁「んあー……？ なにこれ……こんなとこに何なんであつたっけ……？」

深月「随分古そうだし、神社より昔のものなのかな……？」

仁「て言っか、ここってほんとと海に沈んでた場所じやない？ この前の地震で出てきたのかな……。もしかしらな  
お宝発見ー？」

深月「そっつっつっつやなそそっただけっ……」

仁「呼ばれてるってん中？ けど流木が邪魔してるしこんなとこ誰も来ないって……」

深月「だけと子供が閉じ込められてたりしたら大変っ」木をどけよことする

仁「つじにちー、変なとこでアクティフなんだからー」仕舞合っ

深月「んっつっつっつ」木が重っ

仁「せーので引くもー、良しね」

深月「はっこー」

仁「笑わせないうえよー（真剣な深月が可愛うので、くすりと笑って）、行くもさ、せーっ、のー」

深月「んっつっつっつっつ――、ちよっこー？」

ずくずくずく、泡が舞っ

仁「ちよっ……大丈夫深月ー？」

深月「はっ開いたっ……、っ……誰からますかっこー」

ギギッと祠を開ける。鈴の音色

深月「――――っ？」

M深月「なに……らまの――、」

ぽぽぽと泡

深月「わっ」

仁「深月ー」

ぽぽぽ、と泡

深月「――――……これって……、」

仁「ほ……おあつ……？」

少女「んっ……」※眠ってる

仁 「嘘でしょ……？」 ※混乱

深月 「女の子……？」

少女 「んえ……？」

M深月 「縁に覆われた祠に包まれるようにして眠っていたその子は、」

少女 「ひい……どの……？」

M深月 「そうして、目を覚ましたのです」

仁 「続く」

「5」

七海・枢 「次回予告」

七海 「意中のあの子を連れ出す七か条ー」

枢 「はい？」

七海 「其のー、崖に登ります」

枢 「はあ……？ いきなりおかしくありません？」

七海 「飛び降りざまに海面に向かって正義突きよっ？。それで海が割れば世界は貴方の物っー！ 森羅万象の終焉を目指して頑張ってね？」

枢 「なんのことやら」

七海 「正直この世の男なんて滅んでしまえばいい」

枢 「そういうこと言うから女帝なんて呼ばれるんです」

七海 「次回ー カラテヤースト 第3話ーモーゼの十戒ー」

枢 「七界の覇王って七海さんのことだったりするんですか？」

七海 「んっ？」 笑顔

「6」

七海・枢 「2.5話 七海と枢」

船ですーっ

七海 「よかったわ？ このシリーズの子達ってすぐに売り切れちゃっから、……残ってるか不安だったのよ」

枢 「七海さんの趣味って変わってますよね」

七海 「く……？ そっかしら……。こつこつものつて女のこならみんな買っと思っけと〜 クジラ猫。可愛らしやならあなたそっくり」 ※ぬいぐるみを出して見せて

枢 「みんなが七海さんのこと影でなんて呼んでるか知ってます？。女帝ですよ、女帝。冷笑の姫君とかうちのクニスの奴は呼んでいます」

七海 「大層な二つ名をつけられたものね。……私ってそんなに怖ろかしら」

枢 「近寄り難い雰囲気はあったかもしれませんがね、如月センパイ」

七海 「その割に物怖じしなかったわ？。枢くん」

枢 「ガラスの入れ物ほど、割れやすいものはないじゃないですか。そういうことです」

七海 「壊したって構わないとでも言いたげね」

枢 「それはそれで面白そうだと思いますんで」

七海 「ひとい子にゃー？」 ※にゃーは濁点。ぬいぐるみで。くすり

枢 「他の人の前でもそんなだったらもうこと人気者になれますよ、きこっ」

七海 「人気者になっで欲しいのかしら？」

枢 「女子に人気出そうですね」

七海 「はぐらかしちゃって」

枢 「だってどうせ男は斬って捨てる女帝様には変わらないじゃないですか。七海さんの男嫌ひひどろし」  
七海 「そんな中、どうして自分はって思わないのかしら」  
枢 「別に。言い替えてくるの断るのメンドクサクなっただか、都合が良かったんでしょ」※他人事のものに  
七海 「それもあるけど、似てるのよ。あなたって。可愛いもの——、クジラ猫」  
枢 「はあ」※どうでもいい  
七海 「(クスクス笑い)」  
枢 「変わった人ですね、ほんと」  
七海 「貴方にはだけは言われたくないわね、浅倉枢くん？」  
枢 「……」  
七海 「好きだけだね、貴方の『そーいことこ』」  
枢 「俺は苦手ですよ、貴方の『そーいことこ』」  
七海 「あら残念(※楽しそう)。だけど似ているのは本当よ？」  
枢 「そいつに似てて煙しいとは——うも思わないですけど」  
七海 「いえ？ そいつではなくて——、……とても紳士的だもの。貴方って」  
枢 「……だとは思っていないんですけど」  
七海 「だから面白くないじゃない」  
枢 「はあ」※意味わかんないな、この人  
七海 「歪なもののほど惹かれるものよ、人ってね」  
枢 「それはなんとなくわかるかも知れません」  
七海 「へえ？」  
枢 「懐しなくなる」  
七海 「(くすり)お茶でもしましょつか」  
枢 「そっすね」  
七海 「(クスクス)」※枢といえるのは悪くない。  
  
七海 「続く」

### 【3】 「亡霊の陰影」

「1」

草原。吹き抜ける風。眼下に広がる海

深月 「ここは……？ く……？ ……海が……、 ……狭い——？」

田村 「こんな所にいらっちゃったのですか」

深月 「へ。 田村ちゃん？」

田村 「……例え、 何かあることも私はついてまわります——。 例え行く末が地獄であることも」

深月 「く……、 一体なんの——、 」

///ｼｷ 「君はここに残るんだ」

深月 「///ｼｷ……？—」

田村 「じわじわ……」

///ｼｷ 「……」

田村 「う……わかりました……それが……お望みとあらば——。 しかし、 今一腹詰られるのなら——、 この私めに」

※口ぐせ

///ｼｷ 「——……///ｽｷ、 」

田村 「う……」

深月 「ふあっ……！？」 跳ね起きる

ｼｷｼｷ、 心臓の音。 夜中。 時計の針。

深月 「ふっ……はっ……は……？ 何……今の……夢……？」

M深月 「街……？ だけとあんな広い陸地どこにも……」

少女 「んっ……」

深月 「こ……この子……なんで私の部屋に……客間に寝かせてたはずなのに……？」

少女 「んぬっ……と口唇……？ ここは——……」

深月 「———、 」※呆然と

少女 「……お休みなさいませ……」※ﾊﾀﾝ

深月 「ちょ、 ちょっと——」

少女 「……スヤスヤ……」

深月 「はあ……まだ眠っちゃったのか……」

M深月 「洞で眠つけたその女の子は、 あれからずっと眠り続けていた」

///ｼｷ 「カマー・ト・ラスト 第3話、 亡霊の陰影」

「2」

学校の廊下、 歩きながらの二人

仁 「それで結局起きなかつたんだ？」

深月 「あー、 うん。 夜中に一回目覚ましたんだけどね——……すぐ寝ちゃった。 捜査願とかは出さないうつて……もういっせらくつてで面倒見ることになりそう」

仁 「はーっ、 転校初日だつてうつのに心配事が多うねえ」

深月 「学校自体はそれほど……？ ていつか仁とおおなじくうえだし、 見てみたかった？ 私の秀才っぷりー 先生に当てられておバツチり盛えやりましたよー？」

仁 「はいはい。 だからってVサインはならでしょっ。 周りの子、 笑ってたよ？」



深月 「うはー……それは気付いてなかった……」 恥ずかしう  
仁 「この感じだと人気でそーだよなえ、深月」  
深月 「そっかなあ……？ 告白されたこととかはないんですけど」  
仁 「気付いてなかっただけじゃない？ 告白されてるのに」  
深月 「私ってそんな天然愚女に見えますか？」  
仁 「さーで、どうでしょなえ？ 昔っから鈍かったし」  
深月 「むむむ……そこまで言われるとなんだか自信が」  
仁 「嘘だよ。そんな鈍感だとは思ってない。けど不思議だねえー、誰かに邪魔されてたんじやないの？ 彼氏作るの」  
深月 「誰かって誰にも」  
仁 「そりやあ、深月のこと好きな誰かによ」  
深月 「え……」 トキ。足が止まる  
仁 「え、なに。心当りあるの？」  
深月 「ないないっ、全然ないー」  
仁 「まー、そついつことにしとしてあげましょつ……。お、着きましたぞい？ ここが我が文芸部なりー」  
深月 「ほーっ……」

「3」

ガラッ、と扉を開ける

黒辺 「ノックをしたまえ、ノックを」 ※ゲントウポーズ  
深月 「へっ……」  
仁 「あー、気にしなくて良いよ。その人、幽霊部員の黒辺さん」  
深月 「黒辺……？」  
黒辺 「ああ、そつだ。黒辺真夜というものだ」 ※ニヤリ  
深月 「黒辺……真夜さん……？」  
黒辺 「イエーッス！ 黒辺真夜は誰かってー？ ほ、く、ちーっ！ 黒辺真夜こと黒辺真夜様とは僕のことなのちゅー  
ユーオーケイっ？」  
深月 「帰国子女さんですか……？」  
黒辺 「いんや？ 純和製。海外文学を読む時も翻訳版にししか手を出せない」  
深月 「本、お好きなんですね。幽霊部員さんのに」  
黒辺 「なんならその部長よりも部屋にはいるんだぜ？」  
仁 「深月、相手にしなくていいよ」  
深月 「え、でもー、」  
黒辺 「つれないなあ？ そつ思わないかい、深月くん？」  
深月 「えつと……？」  
黒辺 「深月くんたる？ さつき仁ちゃんがそつ呼んだ。君も可愛いわ」  
深月 「そつ……そんなことないですけど……」  
仁 「早く成仏しないかな……」  
深月 「退部じゃなくてー、あつー！ 幽霊部員だけにー」  
黒辺 「いいねえ、頭の回転が早い子は大好きー」  
仁 「深月に姿な真似したら許さないわよー」  
黒辺 「何をどう許さないのかな？」  
仁 「……元神に仕える家系の人に敵ってもらつとか」  
深月 「いやいや無理ですよ？」  
仁 「だよなえー……？」  
黒辺 「ひどいなあー、僕って嫌われてるのかな……？」  
深月 「好かれてはなさそつです」  
仁 「ほつとけほつとけー」  
深月 「あー……、黒辺さんてなんで男の子の制服着てるんですか？」  
仁 「深月っ」  
深月 「だつて気になるし」

黒辺「と言われてもな……裸でいるわけにもいかないだろう。それともなにかな？ 着物とかのが似合ってるって言いたいのかな？」

仁「似合つかもねえきものー」※シロー

黒辺「実際似合っただけとね」

深月「あの……？」

黒辺「ああ、ごめんごめん。『わざと』だよ」

仁「おい……」

黒辺「君の意見はもともとだし僕が君でもそう聞くだらう。どうして男物の制服なんて着ているんですか？ ってね。安心してくれたまえ、男装癖があるわけじゃない。『これが』僕の正しい姿なだけさ」

深月「あー……愉快な人なんですね？」

仁「随分ぶん投げたわね」

深月「だってこの人本当のこと話してくれてない感じがするし」

黒辺「ご名答！ 真相を語るは愚の骨頂！ 情報の伝達は正しく行われるべきだけどそれが全てってわけでもない。人生において必要なのは楽しむこと！ 人が人として正しく生きるということは実に難しうと思いが楽しく生きるという点においてはそう難しいことでもないだらうー」

仁「流石深月ねー、ある意味核心ついているよ。この人かなり良い加減だし、ほんとに適切なことしか言わないから」※

黒辺「がごちやごちや言っている前で。編集で被せます」

深月「賑やかな部活でよかったね」

仁「空気読めないって罪だわあー……」

黒辺「読めないんじやなくて馴染まないだけけど」※ぬいこが入ってくる

仁「だとしたら性根が腐ってますね。水と油でも潤滑油程度には馴染みますよ」

黒辺「残念ながら弾き出しているのは油の方なのさ。清らかな存在である僕を世界は認めなかった」

仁「お気の毒さまでーす」

黒辺「ああ、そうだ。女装癖はないんだけど折角だから試してみようか」

深月「はい……？」

黒辺「ぱちんとね」

深月「わっー！」

黒辺「どうかな？ 似合ってる？」

深月「くっー？ くっー！？」

黒辺「なんかこう……防御力を削り取られた気分だねごっそりど。よくまあこんな破廉恥な格好で出歩けるね君たちは。露出癖でもあるのかい？」

深月「早着替えですかー？ すべー！」

黒辺「いや、そこではないんだがー、その難しうことでもないさ、……ほいっ」※パチン

深月「おおー」

仁「なんで女物の着物なのよ」

黒辺「話の流れでだよ。どうだい？ 似合ってる？」※色気を持たせて

深月「お綺麗です！ ていつか髪も結い上げて……うまのー瞬でー！」

黒辺「どうもこうも、万物の姿形というものは魂に由来するからね。僕ぐらいの存在になれば見てくれを弄るぐらいどうってことはないのさ」

深月「あー……流石先輩ー！」

仁「またごっこり放りなげたなー……えっとね、深月。肝心なところで噛み合っていないから説明しておくと黒辺さんは年上だけど先輩じゃなし、なんなら一年生だからこーはいよ」

深月「一年で留年……？」

黒辺「いいねえ、可哀想な目で見られて嬉しいよ。その気があるなら慰めてくれても良いんだけど」

仁「ちょっと黙っててもらって良い……？」

黒辺「嫌だね、僕が黙るとしたら世界が終わる時さ。その時まで僕は言葉を吐き続けよう」

仁「ハイハイ、なら『少しはまともに』自己紹介してみたら？」

黒辺「そうだね。ならば、改めましてこんにちは、文芸部の初代部長にして創設者の黒辺真夜だ。いまは部長の座を浅倉くんに譲って幽霊部員をさせて貰っている。何か用事があるときはいつでもおあいど。僕は大概この部屋にいるからね」

深月「幽霊部員さんなのになに……ですか？」

黒辺「幽霊部員だからさ」※ニヤリ

深月「……？」

仁 「言いたいでしょ」  
黒辺 「まあね」  
深月 「……？」  
仁 「あのね。この人、黒辺真夜さんは私たちの10年前に入学した先輩で、高校一年の時に事故死していまは後輩になっちゃった名著ある『幽霊部員』ちゃんよ」  
黒辺 「どうだい？ 驚いたかな？！」  
深月 「幽霊部い……地縛霊さんじゃなくて……ですか……？」  
仁 「は……？ (ほかーん)」  
深月 「だってほら……！ 学校の七不思議的には……！」  
黒辺 「くっ……くははっ、なるほど。安心してくれ給え、誰かを呪っているわけでもなし、縛られているわけでもない。だから文字通り『幽霊部員』さ」  
深月 「なるほど。浮遊霊みたいなものなんですね」  
黒辺 「そうなるね？」  
仁 「まあ……深月らしいっちゃ深月らしいけど……。もううらや……屋上行こうか。お風呂から落ち着いて食べたりちんだわー」※部屋から出て行く  
深月 「っっ……っん」  
黒辺 「深月くん？ これから楽しくなりそだね？」  
深月 「は……はい……？」  
黒辺 「(笑みを浮かべる)」  
仁 「みづきー」  
深月 「はーいっ」

ガツツと扉を閉めて出て行く

黒辺 「ね、深月『くん』？」

「4」

ガチャガチャと扉をひく仁

深月 「……ていつか屋上って立ち入り禁止なんじゃ？」  
仁 「表向きはね。ちよこつコソがいるけど鍵開ける方法があつてや、入れちゃったもねえこれが」  
深月 「ふえー」  
仁 「ふふふ、偶然発見したんですけど……ここをこつこつと……、……こつこー」

鍵が外れる。

仁 「ねっ？」  
深月 「おー」  
仁 「とかいつて実は私も来るの久しぶりなんだけー……ど……？ ……？」  
深月 「……？ 仁？ どしたの？」  
仁 「あ……っつん、ええこと……、ちよこつ今日はやめにしなう？」  
深月 「どして？」  
仁 「それがその……先約があるっほつていつか、荒石に他の人と出くわすのはあつていつか」

七海 「ちよこつ……」※扉の向こう側

深月 「この声……、……七海さんと……かなめ……？」  
仁 「あー……」

七海 「んっ……」※キスされて

深月 「……えこと……？」※状況が耳えてくる

M深月「微かに聞こえた吐息は異様に熱を帯びていて、だからそれだけでこの扉の向こうで何が行われているのかは容易に想像できた」

深月「あはは……仁……？」

仁「あー……うん？」

M深月「目配せし、しかし言葉が出てこない。ヒキヒキと仁の心臓の音がこちまで聞こえて来そのせいで顔を赤くして、」

仁「もう……戻ろっか……！！ 屋上はまだ今度ねー」

深月「うっ……うんー！！」

M深月「だからわざわざしく騒ぎながら屋上へと続く階段を後にする。何も聞かなかったふりをして、何事もなかったように――、」

M深月「何やってんのよお……枢え……」

M深月「多分、私の顔も、真っ赤だったと思う」

枢「……………」二人に気付いて

七海「枢くん……？」

枢「いや」

七海「んっ……」キスされて

枢「……少し気になることあっただけ」

七海「誰かに覗かれてるとでも？」

枢「覗かれないの？」

七海「さあ？」※クスクス、それも面白いかもね

M深月「心なしか、二人の声が少しだけ大きくなった気がした」

「5」

どぼぼぼ。海の中。

仁「はーっ……もっっ……ありえないよねえーっ！ 枢の奴……！！」

深月「んー？ あー……忘れてあげよーよ」※優しい

仁「だって学校だよー？ 七海さんも何考えてんだかっ」

深月「あはは……」

仁「何食わぬ顔で教室戻ってきて、なんでこちが気を使わなきゃいけないのよおー 恥ずかしいったらもうっ……、つくづくあいつが男で良かったと思っよ。私まで変態扱いされちゃっ」

深月「双子って大変だねえ」

仁「双子がつていつか、あんな弟がいて、かな」

深月「まだ言ってたんだ、それ」

仁「当たり前よっ」ぶんすか

深月「七海さんとは長いの？ 枢」

仁「去年の秋ぐらいからかな。半年ちょっとだからもうってる方だと思っよ」

深月「そうなんだ」

仁「大抵2、3週間で別れちゃってたもん。新記録」

深月「の割に嬉しくなさそうだね」

仁「そう見える？」

深月「うん。とってもど機嫌斜め」

仁「むー……そんなつもりないんだけどな……」



仁 「なに？ 記憶喪失だとでもぬーの？」  
少女 「そう……みたいですわね……？」  
仁 「みたいですわねってあんた……」  
少女 「ごめんなさいっ……」  
仁 「んうー……？」 ※怪しいなあー  
深月 「……何か事情があるんだよね、きつと」  
仁 「深月いー？」 ※良からぬことを考えてやしませんかー  
深月 「まあまあ、困った時はお互い様ってね？」  
仁 「それにしたって……、……信用していいの？」  
少女 「決して怪しいものではない……！ ただできればその……、……もう少しお側に置いて頂けると嬉しいので  
す……」  
仁 「みづきいっ……、 記憶喪失なのに怪しくないとか自分で言ってるんですけどオホ……」  
深月 「大丈夫だよー、だってこんな可愛いんだよー？ 悪い子なわけないじゃんー」  
少女 「わっ」  
仁 「その判断基準はどつなのさ」  
深月 「怪しくないもんねー？」  
仁 「んう……」  
少女 「あのっ……！ー！ ……私が眠っていたっていう場所へ、案内して頂くことはできるでしょうか……」  
仁 「なあーにー？ あくまでも記憶喪失ってわけ？」  
深月 「まーまー？ いいよ？ 連れてってあげるー！ー、……ところで名前は？ それも覚えてない？」  
少女 「私は……、……私のことは、目やうお呼びくだらうっ……深月さま、仁殿？」 ※深月の出方を伺っている  
深月 「目やちゃんね？ 改めまして、深水深月です。どつぞよろしく？」  
少女 「はいっ……」  
仁 「むうー……」  
深月 「ほら仁も」  
仁 「浅倉仁も。……深月に変なことしたら許さなから」  
少女 「あっ……」 ※迫られて身を引く  
深月 「こちらら。ほら、行こっ？ こつちこつちー」  
少女 「……はいっ」  
仁 「ヌウ……」  
少女 「……………」 ※仁のことを気にしつつも先をいく深月を見つめる

少女 「ヒコ様ー！ー、」

少女 「続く」

「6」 次回予告

黒辺・ミヅキ 「次回予告ー」

黒辺 「可愛いものには旅をさせろ、可愛いものを食べさせろー。ぼくは妖怪口りつ子ハニターせー」  
ミヅキ 「妖怪と幽霊ってどう違うんです？」  
黒辺 「胸を触られた時の反応だねー。合法口りは恥じらいを覚えるがマシちゃん口りはきゅんーんとする。しけならこ  
とをされているという美感がないからねー」  
ミヅキ 「無反応なら実質口りつてことですか」  
黒辺 「恥じらいを覚えないう胸部なら価値はないと僕は考えるかなー」  
ミヅキ 「独特の感性ですね」  
黒辺 「そう言うところ、大事にしていること思っんだ」  
ミヅキ 「次回、カラーテキスト 第4話ー 黒辺を仁があーっ。……大変だなあ、黒辺さん」  
黒辺 「彼女の胸部はタマバガ二ー」

「7」

黒辺・ミヅキ「次回予告、その後の二人」

ミヅキ「黒辺さんは女装趣味なんですか？」

黒辺「いやいや、こんな格好をするようになったのは死後だよ。生きていた頃は普通の実男子だったさ」

ミヅキ「？ 見た目も作っていらっしやる……？」

黒辺「いや、見た目はそのまま。服はちよこちよこ変えてるけど。基本的に学生服ばかり着ていたかなあ」

ミヅキ「ああ……なんだか文学少年って感じですか」

黒辺「本を読んでたらすっぱされたりしたよ？ 女の子に」

ミヅキ「へえ……」

黒辺「男だってわかったら『不潔！』って逃げるように去ってんだけど、いま思えば彼女たちは高貴な存在だったのかもねえ」

ミヅキ「よくわかりませんけど……」

黒辺「どうだい？ 僕とミヅキ君、二人で秘密の花園」

ミヅキ「ご遠慮します」※苦笑

黒辺「だよねえ。僕も男には興味ないし。そもそも君は歳をとりすぎているからね。一桁だったら考えてあげてもよかったんだけど」

ミヅキ「正真正正銘々爺さんなんですね」

黒辺「欲望に忠実だと言っただけだな？ 次回、カリーナ・ラスト第4話。深淵の呪縛、沈む星！」

ミヅキ「女の人にしか見えないのが怖い」

## 「8」アナウンサー

仁「オーディオドラマ『カリーナ・ラスト』はYouTube、Podcastなどの配信の他にもおまけHPのホームページやアナウンサーなどを封入した有償版の配信も行なっております。第2話と第3話のおまけは『2.5話 や梅と桜』『次回予告、そのあとの二人』。（適宜に一言コメント追加してくだらう）。詳しくはスチールド『カリーナ・ラスト』公式サイトをご覧ください」

【4】「深海の呪縛、沈む星」

「1」

少女「私は……、……私のことは、田村と眠りてくれたら……深田を助、仁殿？」※深田の丑方を伺っている

深月「田村ちゃんね？ 改めまして、深水深月です。どうぞよろしくへ」

少女「はうっ……」

深月「ほら仁も」

///シキ「……」

M深月「……？ ///シキ……？」

仁「浅倉仁も。……深月に変わらしたら話にならから」

少女「あっ……」※迫られて身を引く

深月「この仁も。ほら、行なう？ 行なうかー」

M深月「眠のせう……？ けい、確かに今——、……」

深月「……///シキ……どうした……？」

///シキ「……うや、……なんでもなら」※田村に眠覚醒

深月「……？」※怪訝に眠る

M深月「なんだか、///シキの反応が、気になった。——それに——」

M深月「——なーんか……眠た事ある気がするんだよね……」の予……」

M深月「笑の機子か、何処か懐かしく感じられた」

田村「カンテートテスト 第4話 深海の呪縛、沈む星」

「2」

深月「……で、このか書方が眠っていた間なんだけど……」

田村「このか……。……間と言ったよりも海のもずくですね」

仁「それを言ったらエクスでもー」

田村「あれは……？」

深月「元深水神社、一応手入れはしてるらしいんだけど、もうボロボロかな」

田村「神社……ですか……」

深月「眠覚えある？」※記憶喪失に眠りかかて

田村「いえ……すみません」

深月「んーん？」

仁「んうんうー……。？？」

田村「な、なんでしょつかっ……。ー」

仁「深水神社を知らないだなんて、ますます怪しい」

田村「あー、あはは……」

深月「もーっ……。今日の仁なんか変だよー。この子がそんな怪しい子に見える？」

仁「見えるよー。普通に怪しいでしょーー」

深月「そこかなあ……。？ 普通に普通だよなあ？」

田村「ふ、普通に普通ですよー」

深月「ほらーっ」

仁「うやうやうやー。今のでえっつて納得するー？」

深月「だってほら。誰にも事情ってあるものでしょ？ だから言いたくないことは言わなくていいと眠のし、かなぐり  
ち私には眠いたには見えなから良しかなくて。……帰る場所がなしの本当めたらだし」



三ウ「深月さま……」  
仁「でたよ……優等生深月……あーっもう！ わかった！ わかりましたー！ー！ じゃあとにとんつきあつてあげようじゃないー けどね、三ウちゃんー 貴方が不審な動き見せたら縄で縛って海に沈めてあげるかねー！ー 覚悟しときなさいよー」  
三ウ「はっ……はっ……？ー」  
深月「よしっ」  
三ウ「こゝこれで本当に良かったのですか……？ー だって私は……」※わたくし  
深月「……良いんだよ。これで。……語るものになったら話してくれると嬉しいな。んで、お家に帰りたくなかったらいつでも帰って良いから」  
三ウ「っ……ありがとうございますっ……！」  
深月「いえいえ」※なんか照れるなあ  
仁「で？ まだ嬉しんの」  
深月「く？」  
仁「手がかり探しいー 記憶喪失だって設定なんじゃない？ー」  
深月「んー……仁は先に帰る？」  
仁「この流れで帰れるわけないじゃんー（※オワター） なんか潮の流れも怪しいし、深月一人に任せらんないよ」  
深月「よっ、大親友ー」  
仁「チヨースいんだから……」  
三ウ「あら……？」  
深月「どうかしたっ？」  
三ウ「いえ……、あちらに父なだか……？」  
深月「……？」  
仁「ああ、多分ー」

じきぽ

イルカ「（鳴き声？）」

深月「わっー！？」  
仁「うおー？」  
三ウ「まあー！ イルカさんー」  
深月「ちよっ、わっ、きゃっ……くすぐったい……！ー」  
三ウ「わー……懐かれとりますね……？」  
深月「あははっ、ちよ、ちよことっー！ 見てないで助けてよおっ……」  
仁「そーいえは指からそつだつたわよねー、深月って……事あるごとにシヤマとかイルカに絡まれて……。……くシツが落ちてきたことあつたっけ」  
深月「くえー！？ そんなことあつたっけ……！？」  
仁「小やう頃にね。おーっ、三三三……かわいらなー、お母」  
深月「はーっ……助かった……」  
三ウ「……一緒に遊びたいのじゃあ？」  
深月「悪くないならいいけど……。……噛まない……？」  
仁「ぶっ……あははっ、噛まなら噛まならー シヤマならともかくイルカは平気だよー」  
深月「ちよっー！ー だって本気で怖かったのにー」  
仁「ハイハイ？ とにかく。この子の目覚めの場所、探しに行くんですよ。案内してあげますよー、ほら、こっからこちー」  
深月「んっーっ……」

イルカ「（喜んでついでにく・鳴き声）」

三ウ「……」※イルカに懐かれてる深月を見つめて

じきぽ

仁 「――つてわけで、ドーンってどしどし街へ。これは流石に知らないとは言わせないうえー？」  
田ウ 「……すごいですね……」  
深月 「昔は大勢ここにも住んでたらしいんだけどね。浸水してからは強度の問題で捨てられちゃったんだって」  
仁 「私たちが子供の頃には半分ぐらゐで沈んでたもんねー。たまに倒壊してくるから近づくなあって言われてたっけ」  
田ウ 「……少し近づいてみてもよろしいでしょうか？」  
仁 「大丈夫だと思っけど、気をつけてね？」  
田ウ 「はいっ」  
深月 「……なんだか不思議な子だね」  
仁 「不思議っていつか隠してるだけっぽうけど……。……本当に面倒見るつもり？」  
深月 「記憶喪失っていうのは嘘かも知んないけど、あんなところに閉じ込められてたんだよね。……何が事情があるに決まってる」  
仁 「はーっ……。……一度決めたら頑固なところあるからなあ……。……深月は」  
深月 「そうかなあ……。？」  
仁 「そーよ。いつもはふにやとしてる癖に急に――……。？」  
深月 「……仁……。？」  
仁 「……。うつん、なんでもないっ。……。あれー？ あの子どこいった？ 発見させないもつたけえ」  
深月 「ほらあそこ。イルカ達に囲まれてる」  
仁 「わ……。全盛期の深月越えたんじゃない？」  
深月 「またまたあ」※苦笑  
仁 「なんか深月に似てるかも」※肩の力が抜けた  
深月 「私に？」  
仁 「雰囲気っていつか……。匂いが？ 妹みたいだよ、あの子」  
深月 「妹かー……。？」  
仁 「……。なに？」  
深月 「妹って言えば仁かなって？」  
仁 「だからあっちが弟――」  
深月 「あはは」

どはは

田ウ 「くっ……。？」  
深月 「わっ……。――」  
田ウ 「ギャー……。？」  
深月 「ッ……。流れがっ……。？ー」  
田ウ 「ンンンンっ……。」※イルカに囲まれている  
仁 「田ウちゃん――。そのイルカから手を離しおやメー――」  
深月 「っ……。」※助けに行こうとする  
仁 「待って深月――。私が行くー」  
深月 「でもっ……。――」  
仁 「陸地での生活長かったからか、深月泳ぐの下手になっただけだし、任せしよ」  
深月 「仁っ……。きやつ……。？ー」※流れがひどく、足が浮きそうになる  
仁 「待ってて――」

どははー

深月 「じのぢー――」

「4」

M仁 「潮の流れが戻っ……。？ のおままだと――」

田ウ 「ンンンンっ……。」流れれそっ

仁 「ヨウちゃんー」  
ヨウ 「仁のっ……あっ、」※手を離してしまふ  
仁 「っ……！ 届けー」  
ヨウ 「っ……」  
仁 「捕まえっ……たっ……」  
ヨウ 「イルカちゃんっ……！ー」  
仁 「良いからっことしてっ……！ー あの子たちは勝手に助かるから」  
ヨウ 「っ……」※じゅめっく  
仁 「んっっっっっっ……！ー じゅっ……っ…… はあっはあっはあっ……」  
ヨウ 「すみません……」  
仁 「いっしょ……あとは流れが収まるまでこのじりの中でー……」

まるっ

仁 「く……？」

M仁 「こそっ……、 そんな……、」

じりが崩壊

M仁 「じりがー」

ぼろろー、ぶぼろー。

「5」

波の音。海面に顔を覗かせる二人

深月 「ぶはっ」  
仁 「はあっ……はあっ……はあっ……」  
深月 「間に合って……よかった……」  
ヨウ 「深月さま……イルカさんたちも……」

イルカ 「（重々喘ぎ声）」

仁 「……！ー バカー！ー なんで深月まできたのよー？」  
深月 「だってあのままだと二人とも賣られちゃってたまるっし、危ないって思ったら体が勝手に……」  
仁 「だからって……」

イルカ 「（重々喘ぎ声・ヨウに懐く）」

ヨウ 「ありがとねー」

仁 「あっ……」  
深月 「とにかく、無事でよかったよ。仁……」  
仁 「んっっ……助けてくれてありがと……」  
深月 「んっ」※うらもっ  
ヨウ 「偉いですねーっ？ 勇敢でしたぞー？」※イルカをよじよじ

イルカ 「（重々喘ぎ声・ヨウに懐いてる）」

仁 「それにしても……その子、一度逃げたのによく戻ってきてくれたね」  
深月 「……っん……？ なんか必死だったからあんまり覚えてないんだけど気がついたら呼んでた。おかげで仁のうしろまで一直線」

仁 「呼んでたって……なに、イルカと話せるとか？」  
深月 「そこかも」 苦笑  
仁 「——、深月——」 ※抱きつく  
深月 「なにっ？ー、くっ……ど……どっしたの……？」  
仁 「うやぁ……なんてゆーか……深月は……深月なんだなあって……」  
深月 「く……？」  
仁 「……深月——」  
深月 「な……なに……？」  
仁 「……深月……、ごめんね」  
深月 「わっ……？ー」

どっぽん——、ぽぽぽぽぽ。

深月 「じのっ……んっ——、」 ※キスをされ  
仁 「——っ……、」 ※キスし終え

ぽぽぽぽぽ

M深月 「水中から見上げた海面は、差し込んだ夕日に輝いていて、それはとても綺麗で、眩しくて——、私たちを包み込むようにして突き上がる泡の粒は、その光を細かく反射させていった」

深月 「なんで……、どっしてっ……」 ※涙目  
仁 「ごめんね、……深月……本当にごめん——……」 ※頬を赤く染めながら  
深月 「仁——……」 ※困惑

M深月 「その日、私は初めて……キスをした」

仁 「ごめんね」

M深月 「親友と」

///ｼｷ 「続く」

「5」 次回予告

ヨウ・七海 「次回予告ー」

ヨウ 「海の中を泳ぐのは気持ちが良いですねっ？ まるでイルカになったようです」  
七海 「昔の人は泳げなかったって言っただから、海神様に感謝しなきゃね」  
ヨウ 「海面に出た時『ふはあっ』てなるのはその名残ですか？」  
七海 「そこね、でもあれって仕事の後の一杯に似てるかも」  
ヨウ 「仕事の後の一杯」  
七海 「気持ち良いのよ？」  
ヨウ 「気持ち良いですかー 次回ー カラーテイスト 第5話ーちょっぴりじターな大人の飲み物ー」  
七海 「大人のキス、教えてあげましょっか？」

「6」

深月 「4 .5話 幻惑のクロスゲーム」

深月 「……ここは……？」  
七海 「あら？ 目が覚めたのね」  
深月 「七海さん——？ ……な……七海さん……？」

七海「なにかしら」  
深月「なんで巫女服……」  
七海「似合ってますよね？」  
深月「いえ、そうじゃなくて」  
七海「貴方が着ないから着て見たの。どうかしら」  
深月「私よりにあってる気はしますけど……」  
七海「でしょう？　はい、貴方もなかなかのものよ？」  
深月「は……？　はいー？　なんで、これっ……水着ー？」  
七海「良い体してるじゃない」  
深月「いやいやなんでっ」  
仁「おーい、みつぎー」  
深月「仁……！……、ふじつ……？」  
仁「ちょっ、吹き出さなうでも汚う」  
深月「な……なんでメイトぶく……」  
仁「はあ？　深月が着せたんでしょ、ご主人様？」  
深月「な……なにが何だか……」  
七海「似合ってるんだから問題ないじゃない」  
深月「問題じゃないー」  
黒辺「おおっつい、みんなあー」  
深月「……」  
黒辺「いやいやいやー！　無視しなうでもー！　オチ担当でしよほくはー！」  
深月「いえ、ういです。見えなくて」  
黒辺「見てよー！　見てちよーだいよー？」  
深月「結構です」  
黒辺「深月ク……ン……！」  
深月「はあ……」

#### 時計の針の音

深月「……んう……」  
三ツ「すー……、すー……」  
深月「……だよな、そつだよな……響だよな……。……、……黒辺さん……、……響よ。……ありやないわ」  
黒辺「ちょっとなー？」  
深月「続くー」

## 【5】「滲む微熱」

「1」

仁 「ごめんね、深月っ……本当にごめんね……？」

深月 「仁っ……やめて……やめてよ仁っ……」

仁 「大好きだよーっ、」

深月 「仁ーっ」跳ね起きる、夢オチ

ヨウ 「んっ……？ 深月さん……？」

深月 「あ……ごめん……」

ヨウ 「いえ……、……スウー……」

深月 「……夢……？」

M深月 「……うつん、夢じゃない……、あれはーっ、……夢じゃない……」

M深月 「トキトキと脈打つ鼓動と唇の感触、あの時の感覚は微熱となってまだ残っているような気がして、けれど、それよりも、」

深月 「なんで……？ とっとしても……///シキ……。ーっどっして“避けちめてくれなかつたの”……？」

M深月 「あれっきり表に出てこなくなった『この身体の持ち主』にうたちを覚え始めていた」

仁 「カラーテスト 第5話 滲む微熱」

「2」

深月 「はあ……」

黒辺 「何度目かのため息だね。部室の空気が君の微熱に侵されそっだ」

深月 「ずっと見て、趣味が悪いですよ」

黒辺 「幽霊部員とはいえ僕は文芸部員だからね、部外者の君のが場違いだとは思っただけとっ」

深月 「ああ……、すみません。鍵が開いてたんでっ」

黒辺 「だろっねー。僕が開けたのさー」

深月 「許可を頂いたようなものじゃないですか」

黒辺 「可愛いは正義だよ。君を拒む理由など無い」※断言

深月 「それはどーもー……」

黒辺 「テンションが低いなあ、唇でも奪われたかな？」

深月 「「「「「」」」」」」びっくり

黒辺 「ごめっつっ」

深月 「……やられた」諦めた

黒辺 「これでも天才と謳われた物書きだったんだぜ？。鼻は効くんだ、特に面白い話題に関してはね」

深月 「やっぱり趣味が悪い……」

黒辺 「やっぱり三角関係だろう？。大抵の恋の悩みなんてワンプターンだっってことっ」

深月 「……嫌いです。黒辺さん」

黒辺 「僕は好きだよ、深月きゅん？」

深月 「もー……」

黒辺 「ああっ、張り裂けそうな想いっ……伝えようとも届かないっ……傷い恋心っ……！ーっ」

深月 「余裕で不愉快です」

黒辺 「そんな表情もど褒美と思えてしまっのだから、僕はどっにも罪深いっ……！ー」※浸る

深月 「どうぞご勝手に……」

「3」

ガッパ

七海「あら……？ あなた……」  
深月「生徒会長さん……」  
七海「文芸部に入っただのね。……浅倉さんは？」  
深月「授業終わったらいなくなったので……ここかと思って私は来てみたんですけど……」  
七海「そう……」※中に入ってくる  
深月「え、あ」  
七海「なにかしら」  
深月「いえ、その……。……七海さんには見えてないんですか？」  
七海「……なにを？」  
深月「いつ、いえっ！」  
黒辺「だれそれ構わず見えちゃってたらそれはそれで幽霊も形無しなんだよねえ」  
深月「ちょ、ちょっとー！ なにやってるんですかー！」  
七海「……？ それはこちらの台詞なのだけど」  
深月「ああっ……ええっと……？」※視線をそらす  
黒辺「相変わらず色っぽく下着履してるなー、パパ泣いちゃござー？」  
深月「ちょっとー！ー！ー！ 黒辺さんー！」  
七海「黒辺……？」※話しける  
深月「あのっ、そうじゃなくてっ……かつ……柩とはうまくいってるんですかー？」  
七海「……どうして急に彼の名前が？」  
深月「仁からこんなに長続きするのは珍しいって……ー あっ、別に柩が女の子取っ替え引っ替えしてるのかその言の  
話じゃなくてっ……」  
七海「……ああ、なるほど。そういうこと……」  
深月「く……？」  
七海「……貴方、彼のこと好きなの？」※侮蔑の意味で  
深月「は、はあっ……！？」  
七海「可愛いものね、彼。幼馴染ってことは……長年秘めてた想いが爆発とか何とか、そんな感じ……？ ごめんな  
さいね、何だか感動の再会を邪魔してしまったよっで……それなら彼の貴方を見る目にも納得がいくわね、あれはまる  
でー！ー」  
深月「……」  
七海「……何かしら」  
深月「……えっと……その……」  
七海「……ん？」※あれ？  
深月「すみません……違います、わりとほんとに」  
七海「く？」  
深月「柩君のことは正真正正友達とは思ってません……それ以上でもそれ以下でもないです……」  
七海「……もしかして私の勘違い？ あんまりにも貴方が柩くんと嬉しそうに話してたからってきりそのための  
と……」  
深月「それはその……友達として……？ だから本当に……その……、……すみません」  
七海「……………」  
深月「……………だほんっ」※態とらしく。下手。

M深月「……この人、案外可愛いかったりするのかなあ……？」

七海「えーっと……、それでなにがなんなのかしら？ 黒辺さんがなんですか？」※ベースを取り戻そうとするがで  
きていなら  
深月「戻りすぎです。柩とうまくいってるんだなあっで……」  
七海「ああ……そうだったわね、……うまくいけると言うより悪く行きうよっがなしいもの、私たち。だからこそ貴方  
が彼のことを好きなら多少なり申し話ないとは思っただけど……。……そうでないならいいわ。忘れて？」  
深月「え……柩のこと……好きなんですよな……？」  
七海「そうね、嫌いではないわよ？ さっきも言ったけど可愛いもの」  
深月「……？ えっと……」  
七海「もしかして私、結構悪い女に写ってたりするのかしら。別に構わないのだけどそう思われるのはなんだか憂鬱

ね」

深月「えっと……もしかしてそれほどでもないけどお付き合いされてたりします……？」

七海「そうね」※あっこい

深月「好きでもない相手と付き合えるものなんですか……？ その……キスしたり……それ以上のこと……とか……」

七海「……？ お腹が空けばとりあえず何か食べたとは思ってしょう？ 好物しか口にしたくないなんて、とんでもない偏食家ね」

深月「でも、そんな……」

七海「わかっているわよ。それとこれとは別。好き詰めれば単純なのかもしれないけど、やっぱりそれほど簡潔に言い表わせるものでもないと思うもの。——誰かを好きって気持ちね」

深月「そういうものなんですか……？」

七海「そういうものよ——？ それに、好き合ってる訳じゃなくとも気持ち良いものよ——？ セックスって」囁くように

深月「っ……！——」

七海「ごめんささい？ 深水さんって可愛いらつらからかつちやった」※クスクス楽しそう

深月「っ……」※すごく警戒している

七海「枢くんには秘密ね？ 彼、やきもち妬いちゃっから——、そねじゃあね」出ていく

深月「……私も……あの人手手かも……」※トキントキ

#### 「4」

黒辺「言っていることは間違っていないんだよなえー、そーいう価値観だっただけだと思っしよー」

深月「何処いってたんですか」

黒辺「ん？ 助けて欲しかった？」

深月「もう良いです……」

黒辺「そんなに胸に落ちない？」

深月「だって……、……やっぱり私には理解できません」

黒辺「好きな相手とキスできればそりゃ一番幸せだろうけど。けどね、そこまぐ世界は回っちゃくれない。道楽じゃないか」

深月「けど……」

黒辺「他人(ヒト)の色恋沙汰に口を挟むほど無粋なことはないよ？ 第一、君も君で悩んでいたんじゃないか？」

深月「……しのぶ……」

黒辺「お相手は仁ちゃんか」

深月「ちがつ……」

黒辺「ふふふ」

深月「……はあ……降参ですよ。誰にも言わないでくださいね」

黒辺「僕が見える相手がいるなら話しちやうかも知れないけどね、まあ安心してよへ」

深月「はいはい。……枢はどう思ってるんだか……」

黒辺「美人な彼女で鼻が高いだろうさ」

深月「黒辺さんに聞いた私が馬鹿でした」

黒辺「まあ、そこらくんわかって付き合ってるんだと思っよ、彼もね」

深月「……？ なんですか、それ」

黒辺「枢くんは大人だってハナシ」

深月「……？」

黒辺「何処行きたい？」

深月「七海さんのところですー やっぱり納得できませんー」

黒辺「頑固だねえ」

深月「お好きにー」

黒辺「いやはや全く、そちらこそ。お好きにどーぞ？」

がらら、ぴしゃん。

黒辺「しかしまあ……？ ……無料だねえ？」



「5」

ぷかぷか船が浮かぶ

七海「枢くん、待たせちゃってごめんなぞう」

枢「いえ、別に……特に用事とかないし」

七海「行きましょつか」

枢「……どうかしました？」

七海「ん……？」

枢「なんかあったんじゃないですか？」

七海「まあね。でも貴方のその言こところ……嫌いよ」

枢「それはとーも」※冷めてる

深月「七海さーっん」

枢「……深月……？」

深月「はあこはあこはあこ……って……枢っ」※枢の話をしに来たのに気まずう

枢「なに」

深月「あー……んやー……あー……？」

枢「……邪魔なら席外すけど」

深月「いや、えっと……それほどもないんだけど……」

七海「なにかしら？ 気にせず言えばいいわ？」

深月「えっと……あのっ……何かってほじじゃないんですけど……なんて言つか、モヤモヤしてっ……」

七海「別に貴方には関係のない話でしょっ」

深月「そうですねおっ……あのっ……素敵だと思っんですー」

七海「……？」

深月「私っ……七海さんみたいに大人じゃないし、枢みたく悟ったりしてないから分かりませんけどっ……応援してますー！ 二人のことー」

七海「はあ……？」

深月「街で見かけた時から思ってたんです。だってなんだかんだ言っただって二人ともお似合いだし、枢ってこんなんだけとっざって時は頼りになるから七海さんもきこっその言こところに惹かれてるんじゃないかなー……なんて、だってほら、今もこうして七海さんの帰り待っててくれてるし、ボートだっ用意してーっ」

七海「知ったような口をきかないで」

深月「く……？」

七海「貴方には関係のないことでしょっ」

深月「七海……さん……？」

七海「ヒトの……。……行きましょ、枢くん」

枢「……ん」

船ゆらゆら

深月「え、あ、ちよこっ待ってくださる七海さんっ」

枢「深月っー」

船に乱暴に乗り込んでバランズが開れる

深月「あっ」

七海「えっーっ、ちやっ……？っー」

どほーん、どほちる七海

深月「七海さんー」

どほどほ

深月「く……え……えっ……？！」

M 深月「浮かんで……来ない——……？」

枢「っ……！！」飛び込む

深月「枢——」

潜っていく枢

深月「なんで……私……、そんなつもりっ……」※なに、どうなってるの……？

七海「——ぷはっ……、げほっげほっげほっ」盛大にむせる

深月「枢—— 七海さん——」

枢「大丈夫……？」

七海「ごめんなさい……ありがと、枢くん」

枢「いいからほら、上がって」

七海「んっ……、」力が入らず海に漂りかける

深月「七海さんっ……！」

七海「……ありがとっ」

深月「いえ……、っ……」※引き上げる

船着場により登る七海、枢もついてくる

七海「はあっ……はあっ……はあっ……」

枢「……落ち着いた……？」

七海「ええ……、だいぶ海水飲んでしまったけれど……」

深月「七海さん——、えっ……ごめんなさい——」

七海「……いいわ……詰め寄って来たのは貴方の責任だけど、溺れたのは私の問題なもの……、貴方は悪くないわ」

深月「でも、なんで……、……溺れるなんて……」

七海「海神様に見放されたんじゃない？」※自嘲気味に

深月「く……？」

枢「原因不明、心の問題じゃないかって言われてるらしいんだけど。……稀にいるんだって『溺れるやつになる人』。聞いたことない？」

深月「そんなの……っそ……」

七海「……」※消滅。自分でも信じられなく

深月「海で溺れるなんて……想像できない……」

七海「しなくていいわ。……したところで良いことなんてないもの」

枢「送ります」

七海「ありがと」

プカプカと揺れる船

深月「あのっ……ごめんなさいっ……！」

七海「……いいわ」

深月「……？」

七海「私が悪いんだし。……貴方って——……、……何だか苦手だわ？」

深月「え……？」

M 深月「なにかに言わなきゃいけないような気がしたけど、……私はただ棧橋からその様子を見送るくらいしかできなくて」

深月「……驚くことばかりだねえ……///ツキ……？」

M深月「ただ、その場に立ち尽くしていた」

ウミネコ、波の音

M深月「波の音が――……、空を流れて行く雲の影が、白く、煙めく水面を彩って行く。よく知る、慣れ親しんだ海。心地の良い、優しさでもって迎え入れてくれていたはずのそれが……、……何だか急に良くわからなくなった」

深月「……なんて、海が変わったわけじゃないのにね」

M深月「そこに映るのは私だ。深月の姿形をした私。……虚像」

深月「はあ……」

M深月「――波音の先で小さくなった影が――、船を操る枢の胸に、七海さんが寄りすがたように眠えたのは……錯覚だったのかもしれない」

深月「……」※返事をしてよ……

黒辺「続く」

「6」次回予告

仁・枢「次回予告」

仁「あのね、枢。私、枢に秘密にしていたことがあるの」

枢「んあ、なに。てか時間ないんだけど」

仁「貴方は海亀に運ばれてやって来た浦島太郎なのよー。だから本当は私のお爺ちゃんなのー」

枢「現実から目を背けるのは勝手だけどそれはあんまりじゃ？」

仁「川から流れてきた亀にまさか担いだきびだんご」

枢「フアンキーなおとし話だな」

仁「かぐや姫は私が守ってみせるー！ 次回、カラーテイスト 第6話！ 竜宮城で下克上ー。ここからが私の時代なのよー！ー」

枢「うちの妹は何処に向かってんだ……？」

「7」

七海・枢「5 .5話 波の音が消える時」

波の音

七海「う……、……ごめんなさい、……らしくなかったわね」※体を引きはがして

枢「別に。いつものことじゃん」

七海「いつも貴方に頼ってるって？ 笑わせないで頂戴」※余裕ぶるが足りない

枢「誰もそんなこと言っていないけど」

七海「……子供の頃は普通に泳げたのよ？ クラスでも一番早かった」

枢「……」

七海「イルカより早く泳げる子だって評判だったんだから……」

枢「……知ってますよ。水泳の大会で一回だけ見たことがありますから、七海さんの泳いでるとこ」

七海「……嘘？」

枢「まだ髪が短かった頃ですよ。……スタートダッシュで遅れて、慌てて飛び込んだのぐんぐん追い抜いてたの知ってます」

七海「……枢くん……」

枢「……同じレーンに仁出てたんですよ。……多分本人忘れてると思いますけど。嫌なことすぐ忘れるから」

七海「ああ……なるほどね。……私はおまけか」  
枢「……けど、似合いますよね、七海ちゃん」  
七海「おまけが？」  
枢「そういう格好」  
七海「……どっという意味なのかしらね」※苦笑  
枢「びしょ濡れで、……すぐ壊れちゃいそうなんだから、俺、好きですよ〜」  
七海「……貴方ってほんと……」  
枢「……？」  
七海「……いわね、知ってたもの、そういうもの」  
枢「ふーん……」  
七海「……このまま独りにはなりたくないのだけよ、それ、貴方は私を何処へ運んでくれるのかしら〜」  
枢「駅前のテトラポット、……珈琲がたまいいですけど、そこですよねですか？ ……体、冷えてるじゃない。店裏に言えばタオル貸してくれるんで」  
七海「なるほど、良い提案ね」  
枢「他の場所が良かったですか？」  
七海「……うっん、今日は――……なんだか甘いものが食べたうからそれが正解ね」  
枢「ん」※はい  
七海「……ほんと……らしくなりわね……」

七海「続く」

「8」

七海「〇〇役××ですーカマー・ト・マ・シ・ニ・テ『カマー・ト・マ・シ・ニ・テ』はYouTube、Podcastなどでの配信の他にもおまけH2O、H1Mやシナリオなどを特に入った有償版の配信も行なっておりますー第4話、第5話のおまけは『幻滅のロストミュージック』『5.5話 涙の雫が濡れる時』。(適宜に一言コメント追加してくだらう)。詳しくはスクリプト『カマー・ト・マ・シ・ニ・テ』公式サイトをご覧ください」

【6】「黒き潮が裏腹であれば」※ちぢなみ

「」

深月「————、」※息を飲む

七海「はあっはあっはあっ……、……想像できなんでしょう？ 海で溺れるだなんて」

M深月「私たちにとって海は……、優しい存在だった。そりゃあ時々驚かされる事はあるし、この前の仁みたいに海流に連れ去られそうになる事だってあるけど……基本的にはそこにあつて当たり前で、穏やかな波の中に身を委ねればあまりの心地よさに眠気さえ襲つて来て……身体と共に意識も沈んで行く。……そんなゆりかごみたいなものだと思つた。なのに……、」

深月「ねえ、///シキ……？ 部屋帰つて来たんだから代わりなさいよ、なんかもう……疲れたもおっ……。三つちゃんも出かけてるみたいだしさー……。もしもーし、///シキさー……。深月さー……。」

深月「……出ていなり……。つか……。」

M深月「///シキがひきこもり体質なのは仕方ない。その為に私がいるものなんだ、だから……」

深月「……うーんですけど……別に……」

M深月「わかっている。それが私の役割なのだと、知っている。私は///シキの保護者で、///シキが私を助けようとして来たことは一度もない。……街で男の人にナンパされた時だって、……転校初日で緊張していたって、……///シキは表に出てこない。なのに仁が流されそうになった時」

深月・///シキ「仁ー」

M深月「躊躇することなく入れ替わったのは……仁が親友だから……。それともー、」

深月「……」

M深月「仁が唇を重ねてくるほんの直前まで、あそこにはいたのは私ではなく///シキだった。だけえ、それってー、つまりー……。」※強制的に思考停止

深月「考えることが多くて困っちゃった……」

M深月「聞けない。思つてはいても聞けなすり関係ない。私は///シキを守れば良い、その為に私はいるんだ……だから、私は……」

深月「っ……」

M深月「……おけおせて『くれなかった』。……自分は後ろに引っ込んで、そのくせ体だけは縛つて」

深月「……はあ……」

M深月「気付いてしまった、かも知れないと思つてしまった。///シキがなにも言つてくれなすりことを取らなすりには私は」

深月「ずるいかな……流石に」

M深月「罪悪感だけが、膨らんでいく」

七海「カラーテキスト 第6話 黒き潮が裏腹であれば」

「2」

口入口入、と髪を叩く。口ボキ

///シキ「ん……？」

仁「あー……」

///シキ「……仁……？」

んん、と飛び込む///シキ。んんんん

深月「えこと……」

仁「その……」

深月「仁の方から強らにきてくれるとは思わなかった」

仁「学校でもろくに話せなかったから……なんてゆーか、このままキクシヤクはやだなあって……黙りまして……。  
……目やちゃんは？」

深月「出かけてる。帰ったら家にいなかった」

仁「そっかそっか？」

深月「……仁」

仁「なに……？」

深月「なかったことになってらるも、※///シキに対しても仁に対しても罪悪感

仁「くっ……？」

深月「なかったことにしてあげるっ……、……流れそうになって混乱してんだよね、仁。だからあんな……」

仁「深月……」

深月「……それとも……仁は私と、……そつらつ関係に——……なりたらん……ですか……？」※自分のことじゃなら  
とわかつていてもトキトキ

仁「……」※ほかーん

深月「なっ、何か言いなさいよっ」

仁「あはははっ、なにそれっ、超可愛いんですけど深月さんっー」※爆笑

深月「はああー？」※すごい恥ずかし

仁「あーっ、参った参った。私が男だったらマジでやばかったと思っわ、それ（爆笑）。可愛すぎるでしょ、深  
月」

深月「人が真剣に話してんのにそれってひどいー」

仁「待った待ったー（笑）テロピンは勘弁してよーっ」

深月「もーっ……」

仁「昔さ、私が流されそうになった時の事覚えてる？」

深月「んっ……？」

仁「深月と私と、……柁も一緒に遊んでて、この前みたいに海流に流されそうになったの。小学校入った直後だった  
かな？ あの時も深月、私のこと必死に捕まえてくれて、……柁と二人で引つ張り戻してくれたんだよ」

M深月「……私が生まれる前……かな……」

仁「この前の深月……あのときの深月みたいでカッコよかったんだよ。……街から帰ってきて、別人みたいに女の子  
らしくなっちゃったけど、根このトコは変わってないんだって嬉しくなって、暴走しちゃったっていつか。……私  
は、深月のそーいつとこる、好きだなーって？」

深月「仁……」※岬然と見つめる、どう受け取ってるかわからなくて

M深月「……そっか……、仁はその頃から///シキのことかーー、」

仁「私が好きなのは兎前の深月っ。そしてあんたはどこからどーみても可愛い深月っー。気の過ちだー。許してくれ  
給えー」

深月「初めてだったんですけどー？」※苦笑

仁「私だって初めてよ。お互い様でしょ」

深月「そういうことになってあげましょーか？」

仁 「だからね？ これからも友達でいてくれない？ 私はあんたの親友でいてあげるからっ」  
深月 「それでいいんだよね？ 仁は」  
仁 「こんな可愛い親友持てて私は幸せ者だぜっ」  
深月 「わかった、じゃあ私も仁の親友でいる」  
仁 「うんっ。――約束だよ」  
深月 「約束」※指切り  
仁 「えへへ、何か照れ臭いね」  
深月 「だね」※罪悪感

「4」

枢 「……深月」  
深月 「……？ 枢――」  
仁 「はあ？ 何しに来たのあんた」  
枢 「お前にじゃないよ、深月に話しあってきた」  
深月 「私に……？」  
枢 「……お前先に帰ってる」  
仁 「はあっ！？ なにそ」  
深月 「仁」※遮る  
仁 「深月……」  
深月 「……上ではなそ？ 船で来たんでしょ？」  
枢 「ああ」※先に海面に上がる  
仁 「……深月……」※どういふ事？  
深月 「ごめんね、もう睡いし、また明日学校で」  
仁 「んう……、ッ……枢えーっー」  
枢 「？」  
仁 「深月に寝なことしたら承知しないから――」  
枢 「……ふん」※するわけないじゃん  
仁 「にやー！ー！ なにあの態度ー！ー」  
深月 「ごめんね」  
仁 「……いいけえ……。……っ……なんでもなりー お休みー 深月ー」※去る  
深月 「お休み、仁ーっ」※去って行く仁に対して

ぽぽぽ。ぽぽーんと波。そこを泳いでくる深月。

枢 「……………」  
深月 「お待ちせつ。ごめんね」  
枢 「いや、いら」

ちやなみ

深月 「わーっ……綺麗な満月ー」  
枢 「街でも見えるんじゃないのか？」  
深月 「月はね。けど、こんな星は多くなりし、空も広くなりから」  
枢 「そういつもんなんだ」※いつもながらぼーっとしてる

はしゃん、と船に上がる

深月 「そう言えば仁って船使わないよね。機械音痴なの治ってないの？」  
枢 「なあってない。この距離泳いでるのって結構かしてると思っけし」  
深月 「人のこと言えないうちも……(苦笑)。それで話して？」  
枢 「七海さんのこと。深月のことだから気にしてるかなって」  
深月 「ああ、うん。けど枢が一緒なら安心？ みだしな……。立派になっただねえ？」

枢 「そんなんじゃないよ。……ただあぁ見えてあの人弱いから、余計な詮索してあげて欲しくはないなって。……それだけ」  
深月 「……なんだ、やっぱかっこいいじゃん」  
枢 「……なにが？」  
深月 「別に？」  
枢 「変な深月」  
深月 「そこかなあ……？」  
枢 「そうだよ」  
深月 「……じゃあさ、余計なことしないためにも七海さんのこと、少しだけ聞いてもいい？」  
枢 「なに？」  
深月 「好き……なんだよね？ あの人のこと」  
枢 「……別にそういうんじゃないよ。あの人とは」  
深月 「……七海さんもね……？ 私と枢くんはそういう関係じゃないって。……好き合ってる訳じゃなくて、けど付き合ってるのは……だからえっと……」  
枢 「セフしてって言われたらそうかも」  
深月 「なっ……」その単語が恥ずかしい  
枢 「顔真っ赤だよ」  
深月 「だ、だって……！」  
枢 「まー……七海さんのいう通り付き合ってるのはいるんだけどね。けど、好きとか嫌いとか、そういうんじゃないって……居心地いいから……かな、俺たちの場合は……」  
深月 「それって好きってこととは違うの……？」  
枢 「うん。つか、好きな奴は別にいるし」  
深月 「え……？」  
枢 「……ただ、あんまりにも鈍感で……気がつかないみたいだし、……妬かせたかったのかもな」  
深月 「……そっか」  
枢 「……うん」  
深月 「……その気持ちは……なんかわかるかも……知んない……」  
枢 「……………」

M深月 「七海さんのいう、気持ちと身体は別だとか、枢みたいに居心地がいいからとか、そういうのは全察しとていへば？」

深月 「妬かせたいってのは、……わかるよ」  
枢 「……深月……？」※微かに深月の感情が揺れたのを感じる

M深月 「王や王やど、今ならなんとなく衝動的に仁がそうしてしまったのも仕方ない叶って何処かで眠っていて。だからこそ、私もそんなことしてしまったのかもしれないけど、——でも結局これは免罪符にもならない言い訳で」

深月 「……ごめんね、枢」  
枢 「んっ——？」  
深月 「っ……」※必死に思考停止

M深月 「私は映画やドラマでのキスシーンをずっと恥ずかしくて直視できずにいた。だってそれは大人のすることとて、愛を確かめるような密な光景で、」

深月 「っ……、」※震えている  
枢 「深月……？」  
深月 「かなめえ……」涙目になりつつ、もう一度  
枢 「……、」

M深月 「私には、どっやっただって叶わない夢だと知っていたから」

枢 「……深月」



深月「かなめ……」

M深月「落ちていく——、胸の奥底から締め付けられるような罪悪感とともに、沈んでいく」

M深月「何処かで、この気持ちをはきこみ、仁のそばとは正区対で……とて、まじまじなものなんだ、思った」

M深月「月明かりが照らす、真つ暗な海の上で、……私は、何度も極に、……キスをした——」

「5」

がらつくと部屋に戻ってくる深月

田「おかえりなさいませ」

深月「田ちゃん……帰ってたんだ？」

田「はう……少し祠の周りを……、あの神社の付近を見て回っておりました……」

深月「何か思い出したら？」

田「色々と思わしうものが……」

深月「……？ それは？」

田「思えばはげやませぬか？」

深月「く……？」

田「……失くしたと思っておりましたが、意外致せば外見つかるものですね」

深月「……綺麗だね」

田「はう」

深月「……田ちゃん？」

田「深月さま——、」

深月「ねっ」

田「……違う……」

深月「どうでしたの……？」

田「……あのとき……仁殿をお助けになったのは本当に深月さまでありましたか？……？」

深月「く……？」

田「もしやとお思いました……しかしこの顔色は……違う……」

深月「……えっと……なにかなんとか……」

田「う……、と仁殿ではなりのですね」※部屋を出て行く

深月「あ、ちやうど……田ちゃん——」

呆然と立ち尽くす深月

深月「なにかなんとか……。……ねえ？ 川ッサ……？」

川ッサ「……………」

深月「……答えてくれなう……か……。……自分の部屋なのだ。……おるらむ、川ッサ……」

ぐシと倒れ込む

深月「うっ……、うっ……んっ……」※ぐシとおるおる。嗚咽を押し殺す。

M深月「極とキスをした——。……そのことが、今になって胸の内をえぐるものだった」

深月「なつめ……」

M深月「川ッサの振る、……聞きたかった」

川ッサ「癒へ」

## 「6」次回予告

黒辺・七海「次回予告！」

黒辺「てやんでえてやんでえー！ 不純異性交遊取り締まり係だてやんでえー！」

七海「家庭内暴力に怯えつつも援助交際に手を出しては堕ちていく少女と、其れに寄り添う孤独な少年犯罪者の物語。うふふ」

黒辺「のはあー！？ なんでそれをー？ 人の黒歴史を暴くには良くないなあー？」

七海「少年涙ながらにヒロインを絞め殺して『君のことが好きだった』と告白するシーンは涙なしには語れませんね。特に妹の」

黒辺「やめてー！ そこから先は自分でもとつかしてたと思うからー！」

七海「大7星会新人賞受賞作・黒辺真夜作『七つの恋心』」

黒辺「今読み返してもひどい処女作だ……」

七海「次回、カウーティスト 第7話ー ロリコン作家には法の鉄槌を」

黒辺「けどまあ売れれば正義って……気休めにもならないよねえ……？」

## 「7」

黒辺・ヨウ「番外編・クジラ猫の冒険！」

黒辺「とあるところにクジラのよつな猫の形をしたクジラがおりました」

ヨウ「に、や、に、やー……」

黒辺「クジラ猫と呼ばれるそのクジラのよつな猫のよつなクジラはかつて別れた犬イルカを探して旅をしています」

ヨウ「そのイルカさんは犬ではなくイルカさんなのでしょっつか……？」

黒辺「谷を越え、山を登き、海を飲み干し、大地を枯らして、それでも犬イルカに出会えないクジラ猫は泣き叫びます。……泣き叫びますー」

ヨウ「に、や、に、やつ、に、やつー！」

黒辺「終いには泣き疲れて眠ってしまいます。ーそうして出来たのがこの海、この世界、そうしてクジラ猫は海神様として讃えられ続けたのですー」

ヨウ「……なんなのでしょう、これは。そもそも犬イルカさんとは巡り会えなかったのですか？」

黒辺「犬イルカはクジラ猫の心の中に身を潜めていたんだよ。かつての争いを悔い、己と向き合った時、彼らは再会できるんだね。どうだろう。児童文学としてはなかなかの傑作だと思わないかな？」

ヨウ「思いませんね」

黒辺「即答か」

ヨウ「犬イルカの出番を増やしてください。そしてクジラ猫さんをもっと可愛らしくー なんだか怖いですー」

黒辺「これでも女の子の間で大人気のマスコミタレントキヤラクターなんだよー？ ぬいぐるみだの抱き心地は最高でー」

ヨウ「その作者が黒辺さんだったとは知りませんでした」

黒辺「ペンネームはエム・エー・ワイ・エーー マヤだからね。子供向け用の別名記さ」

ヨウ「聞いておりません」

黒辺「君も出してあげようか？ 金魚こぼし」

ヨウ「必要ありませんー」

黒辺「ま、僕はもう死んでるから出来ないんだけど。はっはっはー」

ヨウ「……おうち帰りたい……」

黒辺「まあ、クジラ猫は可愛いからさ？ 今度抱いてあげてよ。ー深月君も持ってるんだろ？ クジラ猫？」

ヨウ「誠に遺憾ながら。抱いて寝ていた自分を呪っております」

黒辺「犬イルカもよろしくねー」

ヨウ「結構ですー！ ……でもまあ……抱き心地ならこの子の方が……」

黒辺「ん？」※楽しそう

ヨウ「なんでもありませんー」

黒辺「自分に素直になれないのって、辛いねえ？」

ヨウ「続くー」

【7】 「子守唄には御伽噺を」

「1」

仁 「カラーテイエスト、第7話 子守唄には御伽噺を」

子守唄

仁 「おはよ、深月」

深月 「おはよ、仁？」

仁 「だんだん暑くなってきたよねー。もうすぐ夏かなあ」

深月 「まだもう少し先だと思っけど？」

仁 「台風近づいてきてるって話だし、いよいよって感じはするけどねー」

深月 「あー、夏の風物詩ですなあ」

仁 「ですなあー」

七海 「それじゃあまた後で」

枢 「ええ」

深月 「……っ……」※立ち上がる

仁 「深月っ……？」

枢 「……？ ああ、おはよ深月」

深月 「おはよ」

枢 「……なに？」

深月 「……ごめん？ なんでもなら」

枢 「はあ……？」

深月 「ごめんね」※昨日のこと

枢 「ああ……ごん……？」※よくわかってない

仁 「ちよこちよこっ！ 深月…… なんなのよ今のー」※駆け寄って、声は潜めて

深月 「別に？ なんでもないよ？」

仁 「なんでもって感じじゃなかったでしょー！ あいつは何かされたー？」

深月 「違っつては〜、枢はそんな人じゃないって知ってるくせに」

仁 「けどお……んっ……？」※深月がいつもと違う気がする

深月 「ほらほら、チャイムなりますよー？ おぐんきょーおぐんきょー」

仁 「みづきいっ……！」

チャイム

「3」

放課後

七海 「それで？ 深月さんとはキスしただけ？」

枢 「うん、まあね。深月泣いてたし。流石にそこまで鬼じゃないよ」

七海 「そーかしら。私との時は結構積極的だったと思っただけど？」

枢 「七海さんは好きじゃん、責められるの」

七海 「人を変態みたいになんて言わないうちで知らえるかしら」

枢 「ごめんごめん」

七海 「……何だか不思議な子ね、深月さんって」

枢 「そこかな。分かりやすいと思っけど」

七海 「もっと優等生なのかと思ってた」

枢 「あれは目撃自棄って言うんだよ。それに、それ言っなら七海さんもだけど」

七海 「幻滅した？」

枢 「いや？ 嫌いじゃないよ、七海さんのそーらと口」  
七海 「ありがと。……私は嫌いだけだね。他の女になびくようなオト口」  
枢 「冗談きついの。心にも無い癖に」  
七海 「（ため息ひとつ）……誤魔化して目をそらして、気づかないふりして——……バカみたいね」  
枢 「ふーん……」  
七海 「……ねえ、枢くんてさ、」  
枢 「七海さん」※人差し指で唇を抑えるような感じ  
七海 「っ……？」  
枢 「それ以上踏み込むのは、……違うでしょ」※穏やかに。距離感を保つ  
七海 「……まだなにも言っていないわ」※若干むすっと  
枢 「言ってからじゃ遅いかなって」  
七海 「……そうね。——私たちにはそんなこと『必要ない』——、」※キスする  
枢 「んっ——、」※応える

M七海 「甘く、思考を鈍らせる程に濃厚なキス——。……けれど、それでもまだ私は冷静で、」

七海 「足りないわ」  
枢 「わかっているよ」  
七海 「んっ——、」※再びキスをされて

七海 「足りなかった。頭の芯まで痺れさすにはまだ——、」

七海 「っ——、」※抱きしめ返す  
枢 「七海さん……？」※いつもより積極的だから驚いた  
七海 「少し黙っていて……」※今度は自分から  
枢 「んっ……」※受け入れる  
七海 「っ……」

七海 「——あの影が——、……私を見ている……」

M七海 「初恋を、忘れられる人は早々いないだろう。それはやっぱり大切な思い出で、特別な存在だ。恋なんて人間が子孫を残すために昇せる幻想でしかない。つまりところ、錯覚、くだらない理由つけの1つでしかなく。だからこそ、恋は忘れることができるし、冷める。目が、覚める。心も。けれど稀にそうじゃないものがある。失ってしまえば割り取られ、——修復など到底できないような。……他者を自己の一部と認識してしまうような」

M七海 「自身の一部が欠けてしまったと思うような」

M七海 「つまりはそれを愛と——……、」

M七海 「失笑する他、ないのだけど」

枢 「七海さんさ、……いや、気のせいかな」※ドロートーク  
七海 「……なに？」  
枢 「……深月のこと、嫌ってない？」  
七海 「……優等生だからかしらね」  
枢 「またそれですか」  
七海 「ああいつ予言でるとアツアツするわ」  
枢 「ふーん……」  
七海 「悪い子ではないのはわかるのだけれどね」※それでも好きにはなれそうになり  
枢 「大丈夫ですよ」  
七海 「なにがかしら」※ちよこムッとしてる  
枢 「七海さん、十分可愛いですし」  
七海 「……可愛くはないと思うけど」

枢 「いじめがいがありますよ？」  
七海 「……ほんと、趣味が悪いわね、貴方って」  
枢 「（くすくすと笑って）そうですか？」  
七海 「そんな枢くん捕まえる私も、……どこかしてるのかも知れないけどー、」  
枢 「……独り言、いいですか」  
七海 「言いわよ？ 言ってみなさい？」  
枢 「七海さんこそ、優等生ですよ」  
七海 「……それって一途に尽くしてるってことなのかしら」※真面目に見当はずれ  
枢 「いえ、そうじゃなくて」  
七海 「……？」  
枢 「……俺には真似できそこありません」  
七海 「……（くすりと笑って）そうね、あなたは不良ですもの。（※枢のほっぺたツンツン）悪い悪い狼ちゃんのものね？」  
枢 「そうやってすぐ子供扱いする」  
七海 「子供じゃなくって？」  
枢 「くえ？」※挑発に乗る、もう一回ツンツン  
七海 「わっ」※覆い被さられて

「4」

部屋、窓から惨事を見つめる黒辺

黒辺 「いやはや、誰かに見られたらどうするつもりなのかなあ」  
仁 「……？ なに見てるのよ」  
黒辺 「いずれ忘れたくなるような黒歴史」  
仁 「はあ……？」  
黒辺 「なんでもないよ」

カーテンを閉める

黒辺 「それにしても、あの子は一緒じゃないんだね」  
仁 「職員室。せんせーの手伝いー……教材の片付けだとかなんとか……」  
黒辺 「絵に描いたような優等生じゃないか」  
仁 「まーね」  
黒辺 「機嫌悪いなあ、経験豊富な先輩に相談してみるかい？」  
仁 「そんな嬉しそうなお顔で言われたらその気も失せるわよ」  
黒辺 「事実面目そつなもの」  
仁 「ふんー！」※そこにあつた本を投げる  
黒辺 「おっと？ 暴力は良くないな」  
仁 「こんなの……！ー！」

ガラッ

黒辺 「おや？」  
ヨウ 「……ここは……文芸部でよろしいのでしょうか……？」  
仁 「ヨウちゃんー！ どうしたの、こんなところまでー」  
ヨウ 「深月さまの母上殿に古い本を返すならこちらに行けば良いと伺しまして……図書館はいつの昔に潰れたのかぜんとかで……」  
仁 「あー……地盤沈下だね。今は校舎裏に沈んでる」  
ヨウ 「そうでしたか」  
仁 「確かに貴重な本とかはここに移動してあるけど、何か調べ物？」  
ヨウ 「郷土史をー、……この近辺の歴史などを記したものがあれば拝見したいのですが……」  
仁 「物好きなのね」

三「すみません……どうしても確認しておきたいことがあるので……」  
 仁「良いわ、探してあげるわー。たまには文芸部っぽい活動もしないと予算降りないわねー？」  
 黒辺「果たしてそれは文芸部の活動と言えるのかい？」  
 仁「この子が調べたことをしホートにして張り出したらきゃーそれが部活動になるわよー」  
 三「えっと……？」  
 仁「ああ、ここの話。気にしないで？」  
 三「はあ……？」  
 仁「確か歴史関係のはここら辺に――……」※カサッ  
 三「……仁殿は……深月さまと長いお付き合いなのですかね……？」  
 仁「まーね。子供の頃からずっと。深月が小2の時に引っ越しちゃったからそこからしばらく会ってなかったけど」  
 三「そうですか……」  
 仁「それがどうでした？」  
 三「……その頃からお慕えしていらっしやったんですか？」  
 仁「はっ……はあー！？」  
 三「その……私も……あの場におりましたので……」  
 仁「っ……あ……えっと……そっぴんじや……ないわよ……」  
 三「……？」  
 仁「深月は親友だし、友達だし。……第一女の千回士でっっておかしらじやない……」  
 三「そうでしょうか。想い人が同性であっただけで、別に仁さまは私のようなものにも欲情致しますか？」  
 仁「あなた……」  
 三「ならばっ、その想いは純粋なものですっ。恥じることはなうと思致しますよ？」  
 仁「変な子だとは思ってたけどまさかそっち方面になつて飛んできたとはねえ……はー、あったわも。深月の郷土史」  
 三「ありがとございます……」  
 仁「なによ。まだ何か言いたいわけ？」  
 三「深月様は……なんとおっしやったのでしょっ」  
 仁「く……？」  
 三「仁殿のお気持ちを返せ止めになったのですかー？」  
 仁「いやいやいや、怖いんだけど……まさかあんた……そっちのけがあるんじやないでしょっかねっ……？」※轟然  
 三「達しますー。私はただっ……」  
 仁「ただ……？」  
 三「っ……、……わかりません……」  
 仁「はあー……？」  
 三「深月様がそうであると思っただのですが……深月さまは深月さまで……と口様では……」  
 仁「なに言ってるのあんた」  
 三「深月様に双子の兄上か弟君がおられるという事は……？」  
 仁「ないわね。残念ながら双子なのはうす」  
 三「そうですよねえ……、はあ……」  
 仁「よくわかんないわよねえ……あんたも」  
 三「そうですよね……」  
 仁「……ちーっ……」※三の顔を手で挟み込む  
 三「ふにゅっ……？」  
 仁「隠し事してるのはあんたの勝手ー。けどな、言えもしないことをまっぴら見せむらかして悩まなうでくれるっ？ー。気になるじやないー」  
 三「すみませんっ……」  
 仁「相談なら、乗るわよ。……深月には話してらうことなんですよ。ちーっ」  
 三「はー……」  
 仁「お茶淹れてあげるからそっ座って。どうせその本読めたらんじやないっ。持ち出されて無くてはだりしたら困るじ、ここで読んでいきなさいよ」  
 三「すみません……」  
 仁「良いの良いの。深月が来るまで相手してあげるわよ」  
 三「（くすくす笑って）」  
 仁「なによ」  
 三「いえっ？。仁さんって良い人だなあっ」

仁 「そう思うならもう少し懐きなさいよ。そう警戒心丸出しにされちゃこっちだつて肩がこるわ」  
ヨウ 「はいっ」  
仁 「はーっ……それにしてもまだ日も暮れてないのにカーテン閉めっぱなしで気が滅入るわね。幽霊って日差しに弱いとかあんなかしら」  
黒辺 「本が日差しに弱いことも知らないうかね？」  
仁 「でも換気はひつよーでしよー？ そもそも本以前に私が腐っちゃっ」

カーテン開ける、窓の鍵も

黒辺 「オスススしないな」  
仁 「部長は私です」  
黒辺 「あっそ」

窓を開ける。波の音。風が吹きこむ。

仁 「はーっ、いい天気ー……ヨウちゃんもここに来てもらんよ、いい風がー」  
ヨウ 「……？ 仁殿……？」  
仁 「みづ……き……？」  
ヨウ 「く……？」

「5」

波の音

深月 「こと……校舎裏の倉庫って……あ、あった。あれかー」

ガラッと倉庫の扉が開く

深月 「くっ？」  
七海 「……？ あら？」  
深月 「ど……どこも……」  
七海 「……、何か？」  
深月 「い……いえ……？ え……」※七海さんはだけてるような気がする  
七海 「……どうかした？」※取り繕って  
深月 「いっ、いえっ……、先生に頼まれて……？ えこと……七海さんはここでなにを……？」  
七海 「機材の手入れをね」  
深月 「ボンベ……？」  
枢 「……あ、深月」  
深月 「枢っ」  
七海 「……お邪魔みたいね」  
深月 「そんなん……！」  
七海 「良いのよ？ 好きにして。私の用は済んだから先に帰るわね」  
深月 「七海さんっ！」  
七海 「後、その教材はその倉庫じゃなくて隣だと思っわ。廃材置き場はそっち」  
深月 「あ……ありがとございます……」  
枢 「仁は？ 一緒じゃないの」  
深月 「手伝い頼まれたの私だけだから多分部屋だと思っけど」  
枢 「ふん……」  
深月 「……？ 枢……？」  
枢 「……七海さん」  
七海 「なに？」  
枢 「――別れよつか」  
七海 「……はい？」※何を言われたのか一瞬分からず

枢 「俺、深月と付き合ってることはするよ」  
深月 「なに言ってるの枢ー？」  
七海 「「――、……本気で言っているのかしら……？」 ※落ち着いて見せて  
枢 「わりと」  
七海 「……好きにしたら？」 ※毅然とした態度で。しかし動揺して  
枢 「うん」  
深月 「かつ……枢ー？ 私は別に――、」  
枢 「悪い、深月」  
深月 「んっ――？！」 ※キスをされて。フタス口がぐ落ちる  
枢 「…………、」

M深月 「枢っ……？！ なんでっ……」

仁 「は――――、」

M深月 「――仁……、」

深月 「んっ……んっ……」 ※必死に抵抗するが力が強い  
仁 「っ……あ……、ッ……」 ※逃げ出す  
ヨウ 「仁殿ー！」

M深月 「ヨウちゃんっ……」

黒辺 「あーあ……」

M深月 「なんで……、」

深月 「っ……！」 ※突き飛ばす  
枢 「んおっ……」  
深月 「はあっはあっはあっ……仁―― っ、ッ……――！」 ※枢にぶつかる  
枢 「っ……」  
深月 「最低っ……」 ※涙目  
枢 「……」  
深月 「っ……どう言ってるの？！」  
枢 「違っの？」  
深月 「っ……」 ※眠む  
枢 「冗談だよ。そんな目しないですよ。誰も深月が俺のこと好きだなんて思ってるから」  
深月 「だったらなんで……？」  
枢 「……なんとなく……」 ※仁がいた部屋を見上げて  
深月 「はあっー？」  
枢 「……いじめたくなっちゃったよね。必死なの見てると」  
深月 「……先にキスしたのは私だから謝る、ごめん。……けど、おっしなうで。私は……、……私も……おっしなうからっ」 ※枢とは違っと言ったかつたが同じだと思ったので  
枢 「うん」  
深月 「それ片付けといて――」 ※仁を探しに向かう  
枢 「……最低か……？ ……そりゃそーだろーな」

深月 「（走っている感強い）」

M深月 「――っのぶっ……、」

黒辺 「続く」



「7」 次回予告

深月・黒辺「次回予告」

深月 「七海さんって色っぽいわねエ〜っ、ちよっと癖毛な髪とか細い足とか……七海さんって感じで憧れちゃ  
うっ」

黒辺 「昔から可愛かったけど急に化けたよねえ。可愛くから綺麗。じゅーじゅー泣いてた頃が懐かしいよ」

深月 「スタイル良くて胸も大きいし、同性ながらもキスしちゃった……」

黒辺 「下着もなかなかエロくてそそられるよ」

深月 「幽霊なのをいいことにやりたり放題し過ぎじゃないですか？」

黒辺 「取材は習慣だよ？」

深月 「次回―― カラーテキスト 第8話― 名探偵三つちゃんは見た―― 海底に眠る枢の真実――」

黒辺 「乙女の秘密、明かしてみせようぞー」

「8」

仁 「番外編・あの日の夜」

M仁 「やってしまった、やらかしてしまった」

仁 「あーっもうっ……！」 ※ベッドでバタバタ

M仁 「よりもよって、深月とキス……しちゃって……」

仁 「明日からどういう顔して会えばいいのよ……」

枢 「なにしてんの、お前」

仁 「勝手に入ってこないでよー」

枢 「俺の本持ってたのそっちじゃん……文句あるなら勝手に持ってくなよ」

仁 「むー……」

枢 「なに。どうかしたの」

仁 「……初めてキスした時……どう思った」

枢 「……はあ？」

仁 「だからー 初めてキスした時なんとも思わなかったのー？ 最初の子だって2週間もしないうちに分かれてたし  
やないー あんたってそーいう男なんでしょー？」

枢 「いやいや、どういふ男なんだよそれ……お前の中の俺はどうなってるんだ」

仁 「普通に軽蔑してる」

枢 「あつそ」

仁 「それで？ どうだったのよ。……やつは『こんなやつとするんじゃなかった』とか思ったわけ」

枢 「……キスぐらい、大とでもするだろ」

仁 「そうじゃなくてー！」

枢 「唇重ねたからってなんとも思わねえよ。……めんどくさいのはその先だろ」

仁 「その先って……、待ってー そついつの私にはまだ早いー」

枢 「じゃなくて。馬鹿か」

仁 「はあー？」

枢 「どうでもいいやつに『好きだ』って言われる方がめんどくさい」 ※めんどくさい

仁 「あんたって……思っていたより最低ね……」

枢 「知ってる」 ※どうでも良い

仁 「……じゃさ、あと一個だけ……、聞きたらんだけ……」

枢 「なに」

仁 「……好きだけと付き合いたらんとかそついつのんじゃなくて……、……ずっと傍に居たらんとか……そついつのめ……  
うざうざと思っ……」 ※憂く乙女

枢 「……別に。……迷惑かけなまやらんじゃならぬ。そついつのは」

仁 「そっか」 ※よかった

枢 「んじや、これ返してもらったから」

仁 「んじ」※ニ口ニ口

枢 「……はあ……」※なんかやだなー

M仁 「――明日……梁田と話そう……怖らむじい……」

枢 「続く」

田中「〇〇役××ですーホームページにて『カリートヤスト』がYouTube、Podcastなどの配信の他にもおなじみのイラストやシナリオなどを挿入した有償版の配信も行なっておりますー禁の語、禁の語のおまけは『番外編・タシに猫の黒陰』『番外編・あの日の夜』。（適宜に一言口を入らせてください）。詳しくはまたタシの『カリートヤスト』の公式サイトを覗いてください」

【8】「秘められた想い」

「1」

深月「（走っている感 overwhelming）」

深月「最低っ……（※涙目）……どう言っつもの？ー」

枢「冗談だよ。そんな目しなうでも。誰も深月が俺のこと好きだなんて思ってないから。……うじめたくなっちゃったよね。必死なの見てると」

深月「……先にキスしたのは私だから謝る、ごめん。……けど、おつしなうで。私は……、……私も……おつしなうからっ」※枢とは違つと言いたかつたが同じだと思つたので

枢「うん」

深月「ッ……」※走りだす

M深月「私っ……私はっ……私がヤキモチ妬かせたいと思つたからこんな……」

M深月「仁——、」

M深月「私……///ッキはとつてッヒヤッヒヤはっかしてる——、」

深月「っ……」

M深月「……最低だ……」

深月「カラーテイスト、第9話 秘められた想い」

「2」

M仁「キスしてた……？ー 深月と枢かっ……？？？ いや、幼馴染だし深月がそう思つてたとしても不思議じゃなうけどっ……！ー！ ……けどっ……そんなのってありッ……？ー！ ……なんでよりもよつて……！ー、」

七海「くっ……」肩上げて

仁「わっ？ー」座り込んでいた七海になつかれる

七海「っ……ただ……」

仁「すっ、すみませんっ……！ー」

七海「あなた……」

仁「七海……さん……？ え……泣いて……」

七海「……っ……なんでもないわ。平気よ」

仁「なんでもって——、」

深月「しのぶーっ？ー」

仁「っ……！ー！ こっち——」

七海「くっ……？ー」

教室の中へ

深月「（走つていく感 overwhelming）仁っ……」

足音が響きわたっていく

仁「……はあー……びっくりにしたあ……、……深月足音すき……」

七海「……ねえ。重いのだけよ」

仁「た、確かに最近体重増えたけど、そこまで大っぴらなうわよー！ー」

七海「そうじゃなくて突然押し倒して、どっぴっぴりなのかしら？ 空き教室に連れ込んでもしかしてそこのけで

もあるの？」

仁 「違っわよー！」

七海 「なにムキになってるのよ」

仁 「んっ……違っの、そっじゃなくて私は……」※だにちだにち

七海 「とりあえず、どいてくれない？」

仁 「っ……うん……（※おすおす）私だっで貴方をどっかっしものことかなくて……咄嗟っでっつか……泣いてるっ  
こ、見られたくないだろーなーっと思っで……」

七海 「泣いてた？ 何処の誰が？」

仁 「隠しきれないっ！ー！ー！ 真っ赤っかだからね？ー！ 目ー！ー！

七海 「……、……泣いてないわよ」※拗ねてる

M仁 「っわぁー……めんどくさー……」

仁 「……枢と……何かあったんですか」

七海 「はい？」※堅語そっけ

仁 「ていつか……別れたのかなっ……て……」※そっだとしたら深月と付き合ってるのも納得がいく

七海 「……」※ぽかーん

仁 「なっ、なによその顔ー」

七海 「いいえ？ ただ、私と枢くんのこと、興味ないと思っでたから」

仁 「あいつが誰と付き合おうと勝手だけっ！ー これ以上女ったらしの姉だと思われたくないんですっー！ー」

七海 「妹でしょ？」

仁 「違っー！」

七海 「変わった子ね」

仁 「どっちがー」

七海 「ふー……。……………そーね？ っうれちゃったのかしら」

仁 「振られ……。？」

七海 「なあに？ まさか私が振っただけ？」

仁 「い……いえ……でもー！……、えええ……。それで深月と……。？」※理屈として考えればそっなのだけっ、そ  
うだっと思えな

七海 「深月さんと……。？ なるほど……。？ そっうっことなの」※一人で納得

仁 「なんですか」※むっ

七海 「愛されてるのね、あなた。羨ましいいわ？」※素直に。けれど仁には嫌味にも聞こえる

仁 「はぁ……。？」

七海 「……枢くんのこと、……好き？」

仁 「はっ？ なに言っでんの、好きなわけないでしょあんなやつー」

七海 「じゃあ嫌い？」

仁 「どっちかっでっつと……。嫌っってほっじやならけっム力っく……。うちうち癩に触るっでっつか、目障りっ  
か……」

七海 「（クスクス笑っ）」

仁 「なによぉー」

七海 「報われないなーっで思っでね？」

仁 「意味不明なんですけど」※むっすり

七海 「はぁー……。なんだか滑稽ね」

仁 「喧嘩売ってます……。？」

七海 「貴方のことじゃないわよ」※苦笑して立ち上がる

仁 「あ、ちよっこー」

七海 「もう少しここにいたら？ あなたもひどい顔してるから」

仁 「んっっ……。ちよっこ……。？」

ガッラ

深月 「ー？ なっ、七海さんー！ー？」

七海 「あら。どっかした？ もしかして私のこと探っでいたのかしら？」※余裕ぶる

深月 「いえ仁を……というか……私と枢はなんでもありませんから……だから今すぐ枢と話して……、ちゃんと話せば枢も――、」  
七海 「深月さん」  
深月 「はい……？」 ※なんでもしよう……  
七海 「前にも話したけれど、私も彼とはなんでもないので。だからそんな風に、」  
深月 「違いますよー。私こそ枢とは本当に……！ー。それになんだかんだ言ってお二人とても似合いますし、枢もあんなんだけえきごと七海さんのこと好きだと思っんですー。七海さん綺麗だし、枢があんな風に誰かとくるんできると、私も見たことなかったし……！ー」  
七海 「私は別に枢くんじゃなくたって良いのよ？」  
深月 「え……」  
七海 「余計な詮索はせず、側にいてくれるのなら誰だっていいわ。それはきこと彼だつてそこ」  
深月 「そんな……」  
七海 「……誰かの代わりにだなんて誰にもできないうもの……それでしょ？」  
深月 「どういう……ことですか……？」  
七海 「想っちゃいけない人のことを想っちゃったのら……、その人ってどうしたら良いと思っ？」  
深月 「……………」  
七海 「諦めるか、諦めきれぬのかか……前に進めなうなら、蹲って、腐るしかないと思わなう？」  
深月 「そんな……（※事ありませんよ、とは言えなら）、私には……良くわかりませんが……誰かを想っちゃいけないなんて……！ー。悪いありませんー」  
七海 「……純粋なのね。あなた」  
深月 「……」 ※自分は///シキに想いを抱けられずにいる  
七海 「なんでもならわ？。抱れて」 ※少し落ち着きにかけていることを自覚  
深月 「七海さんはっ……（※震える声で）……枢のこと……嫌いなんですか……？」  
七海 「……言っただけでしょ？。好きとか嫌いとか……そういう話じゃなうわ。……えっでめらうの、……私は。――じやあね」 ※出る  
深月 「七海さんっ……、っ……七海さんは、それで良いんですか……？」  
七海 「……、」  
深月 「そうやって……自分で自分のこと、言い聞かせるみたいにして……それでいいんですか？……？」  
七海 「……そうね。それもあるけど――、やっぱり私って……貴方のこと、嫌いだわ？」 ※拒し紛れ、冷静を保って  
深月 「七海さん……」  
七海 「そうやって土足で踏み荒らすの、えっかと思っわね」  
深月 「七海さん――」 ※呼び止めるが、

去って行く七海

深月 「……よく……わかんないよ……私には」 ※わかってるくせにー。

「3」

カコハニ

仁 「ふあー？」  
深月 「……？」  
仁 「っっ……だ……」  
深月 「仁……」  
仁 「深月……あはは……あー……、あのち……喋りながら話せなうわ？」  
深月 「……っん」

コホホ

深月 「えっ……」  
仁 「……」  
深月 「……あのね、仁っ。枢のことなんだけし――、」

仁 「わかってるよ。……好きなんですよ……？」  
深月 「く……」  
仁 「……いいよ……許す。枢なら……許しただけ。……深月からしたらそれが当たり前だし、むしろ私の方が変っていつか」※だによむによ  
深月 「あ、あのねー？ 違つよ……？ー 違つくて、そのっ……私は別に枢とキスしたかったわけじゃ……なくて……、えっと……」※枢が勝手に、けれど自分からキスをしたのは確かなので言う込む  
仁 「深月ー。……ありがとう」  
深月 「仁……」  
仁 「私は良いの」※強がる  
深月 「……」  
仁 「……あーっあ……けしもちにやって枢かーっ……」※拒絶  
深月 「っ……あのねっ……？ー ｵｼｷはっ……ほんとほっ……」※言ってるものの口戸惑つ。そしてそれは痛みも伴つ。  
仁 「……ん？」  
深月 「……、」※言える気配ひやなら  
仁 「なんであんなに泣きそうになつてんのよ」※笑つて  
深月 「……だつてっ……わたし……」※ｵｼｷが仁のことを好きだとする気持ちを返け止められなら  
仁 「うーんだよ。私の方こそごめんね。なんかｵｽｸﾀｲｶｲことになつちやつて。これまでどーり、深月と私は友達でいしましょ」  
深月 「しのぶ……」  
仁 「……ふう（※肩をすくめて）、……でもｽｼｷりしたっ」  
深月 「……？」  
仁 「だつて、おかしーもんっ、私が深月と、だなんてっ……。深月が枢とくっつくなら誰めもつくし、なんなら枢も大人しくなつて深月と私が姉妹になつちやつかもつてこつたよねー？」  
深月 「仁……」  
仁 「枢にひどいことされたら相談してよねー。おねーちゃんとして、しっかりしつてやるからー」  
深月 「本当に……違つんだよね……？ 仁……」  
仁 「ん？」  
深月 「私と枢は本当に……ｵｼｷは仁のことー、」※逃避れそう  
仁 「……だつたら……私とキスできる……？」  
深月 「仁……？」  
仁 「私の好きはね……？ そーいつ好きなんだよ……？」※迫る  
深月 「やっ……！」  
仁 「っ……」  
深月 「ごめつ……私っ……」  
仁 「……なははっ、でしよ？ー 深月はノーマルなのー。私だつて深月だからそうだーっただけで、別に女の子とチューしたりとか思ってるわけじゃなりよー？ だからちっ……、……ちっ……抱れて？」  
深月 「……仁……」  
仁 「……友達で……うてくれなうかな……、これからっ……」  
深月 「っ……、……っん……」  
仁 「ありがとう、深月？」※拒絶  
深月 「っ……」

M深月 「……やつぱり……最低だよな……、ｵｼｷー……？」

「4」

おぼろ

M深月 「いつしたら取っのか分からならんことだらけだ。」

M深月 「……ねえ、ｵｼｷ……？ 考えるこつはつかでいつしたらういか私わかんないよ……。……本当に私が決めてるの……？ ｵｼｷはそれでういの……？ 私は……ｵｼｷにはなれないんだよ……？」

M深月「///ツキを守るために生まれた存在。……その私が、///ツキに助けを求めている……。なんて、本来転倒もいらところだ。だけど、なんでもよかった。///ツキに一言『頼むぞ』とでもなんでもいらいから言っていて欲しかった。……そうしたら私は――、」

深月「///ツキの為になら……なんだって……」

M深月「……なのに。ちゃんと聞いているはずの主人（あるじ）は、なんにも言っていてくれなくて――」

ゴボボ

「6」

波打ち際、校舎裏の。

七海「……あら……深月さん……」

深月「七海さん……」

M深月「そんな時だからこそ、誰かの話で、気を紛らわしたかったのかも知れない」

M深月「何処かで七海さんを探していた」

七海「珍しいわね、独りだなんて」

深月「七海さんこそ……」

七海「それって嫌味なのかしら？」

深月「いえ……」

七海「（くすりと笑って）冗談よ。この間はごめんなさいね？　つり強く当たってしまったわ？」

深月「いえ……」

七海「……風が気持ちいいわね。ここは」

深月「……よく来るんですか？　ここ。特別棟の裏つかわってあんまり人こないって聞いていたので……」

七海「そうね。一人になりたい時は割と」

深月「……怖くないんですか……」

七海「海が？　平気よ。取って食われるわけでもあるまいし。こんなところにまでサメもやってくることはないしね」

深月「そう……ですよね……」

七海「私に……何か話があったんじゃないの？」

深月「すみません……やつぱり枢とはこのままじゃいけないと思ってて……」

七海「またその話」※溜め息混じりに

深月「でも――、私が原因だとしたら」

七海「潮時かな」

深月「く……？」

七海「（※苦笑。本当に察しが悪い子）……私ね、好きな人がいたのよ」

深月「え……？」

七海「ずっと、憧れていたわ？　……今思えば初恋ね。すごくカッコよくて……優しくて……、……愉快な人だったわ。けれど私は迷惑をかけてしまって……いまじゃもう想いを伝えることすらできない」

深月「それって……？」

七海「……死んだの」

深月「――――、」※黒辺さんと繋がる

七海「身体が丈夫な方ではなかったから、驚きはしなかったけど――……、いらい、嘘ね。しばらくの間、……あの人の遺体を見てからも信じられなくて、よく二人で話した場所に通ったりもした。……当然誰も来てくれなかったし……いまじゃもう、私は海の中にも入れないんだよね」

深月「七海さんが溺れちゃったのって……それが原因で……？」

七海「さあ？　……でも、そっだとしたら――……、……いらい口実だったわ？　――だって、そしたら私は『あの人が』離れられるもの――」

深月「……、」※ほーん

七海「……？ なに？」

深月「いえ……」

M深月「ただー、ただ、そんな風に語る七海さんの姿が、眩しくて、このまま消えてしまひ方なほど鬱くて、綺麗で」

深月「……まだ……好きなんですネ」

七海「どうかしら？」※苦笑

M深月「すごく寂しそうだったから……」

深月「……柩はその人の代わりですか」

七海「彼だって、私を彼女の代わりをしているのだからーお互い様だと思わない？」

深月「柩の好きな人って……」

七海「もしかして気付いていないの……？」

深月「え……」

七海「……呆れた。……気にしないでいいわ。わからないなら言を突っ込まない方が賢明よ。お気の毒様」※立ち去る  
うとして

深月「すみません……」※察しが悪くて

七海「……彼のそーいところは私だって嫌いじゃないわ」

深月「……？」

七海「私も、あの人以外を愛そつとは思えないもの」

深月「……」※触れれば壊れてしまひ方なほどに危つら

七海「それじゃ」

深月「七海さん……」

M深月「たった一歳、私たちよりも一歳しか違わないのに七海さんはとても大人びて……、なのに、」

七海「柩くんによろしく伝えておいて？」

M深月「その笑顔はとても子供じみているように感じた」

柩「続く」

「9」次回予告

深月「ねえ、柩の好きな人って」

三ツキ「なんかそついつと鈍感だよな、散々人のこゝ鈍感呼ばわりするくせに」

深月「いやいや、ていつか、三ツキは分かるの……」

三ツキ「子供の頃からすこゝと変わってないと思つても？ 多分」

深月「こそ……じゃあ私だけ……？ それってには知ってる……？ 私だけは気づいてなかつたりするの……？」

三ツキ「深月……」

深月「く……」

三ツキ「にも気づいてないと思つても」

深月「なーっんだ、じゃあ長いじゃん」

三ツキ「そつだね……？ 次回、カマーテマスと第9話、心折お察しします柩さんー」

深月「ほんと七海さんって意地悪だよなえ？」

三ツキ「ハア……」

「10」

七海「8.5話 校舎裏のひと時」



波の音

M七海「この海が私を拒むようになってから、もう何年も経つ――。街の、それなりに大きな病院で検査してもらったこともあるけれど……この体質になった理由は不明だった。言うなれば、精神的な問題。心が海に潜ることを拒んでい  
るんでしょこと、お医者さん達は口を揃えて言った。……医学的に問題がないのであればと、今ではもう、両親も『気  
をつけなさい』として言おうとしなかった。――無論、枢くんと付き合っまでは出張く度にそれなりに心配もされてい  
ただけで――、」

七海 「信頼されてるものね――、彼……」

M七海「一目見て、同族だと私は思った。入学してきた彼と廊下ですれ違い、ふとその視線が気になって振り返った先  
で彼もこちらを見つめ返した。それから驚くほど単調に、そして単純に異性の仲くと軋がり落ち――、」

七海 「はあ……」

M七海「一人の時はよくこの校舎裏に来ていた。潮風が心なしか濃く、それでいて午後からは日向になるこの場所はお  
気に入りの場所の一つ……、お気に入りというよりも溜まり場に近いのだけだ。……寂しさを紛らわす、掃き溜めの」

七海 「なーんてね」

M七海「憂りすぎだと、自分でもわかってる。だけど、気を紛らわせるような相手は何処にもいなくて――、」

七海 「こんな私を見たら……あの人は叱ってくれるかしら……?」

M七海「例えそれでもいいと思う、自分がいた」

黒辺「続く」

【9】 「翌日に禁生えしもの」

「1」

M深月「仁は可愛らしい。いわゆる『女の子』って感じでちっちゃくて、小動物みたいで。明るくて冴えないところが可愛しくて、男子にも人気がある」

M深月「……七海さんは綺麗だ。スタイルは良くて仕草も可憐で、誰がどう見ても美人だって言う」

M深月「だって私は……、」

深月「……………んっ…………」※鏡に写る自分を見つめて

M深月「……………///シキにうつってこの姿は……嬉しくもなんともないんだろう」

深月「——少しでも可愛くなると、着飾っていた自分がバカみたらだった」

「2」

□△□△

深月「……？ 柩……？」

□ポポ、少し波が高い

柩「悪い、こんな時間に。寝るといってた？」

深月「ごらん、まだ。……随分慌ててたみたいだし……どうしたの？ なんかあったの？」

柩「七海さん……見てない？」

深月「なに……？ どういうこと？」

柩「帰ってないらしいんだ……。いつも家まで送ってたから俺とこじゃなかつたって連絡あって……、……心当たりないか」

深月「ごめん……わかんない……」

柩「そこか……、いや、うい——、悪かったな」

深月「ごらん——。……柩……！」

柩「なに？」

深月「今から探しに行くの……？ なんか海も荒れてるし溺されたら……」

柩「そりゃそっただけよ、あの人が危ないでしょ」

深月「……っ、私も行くっ」

柩「は？ なんで深月まで——、」

深月「心配だからっ。ちょっと待っててー」

柩「……」

深月「カラーテキスト 第9話、翌日に禁生えしもの」

「3」

M深月「あのときの七海さん、相当眠うつめてた……。そんなことならだるっけよ、ちっちゃくてちっちゃな体で——、」

深月「……、一応洗き桶……あつは——、……。……あれ……。——……田村……ちゃん……。……」

M深月「七海ちゃんがいなくなった——、……そしてうちからは、田村ちゃんも消えていた」

「4」

波が高い、風が強い。雨も降り出す。ガツガツと扉が開く

深月 「ふぁーっ……びっしょりしょ……」  
黒辺 「おやおや、こんな夜更けになんだい」  
枢 「勝手に入っっているの」  
深月 「緊急事態ですし、……そういえば枢には見えてんの？」  
枢 「なにが？」  
深月 「や、見えてないならいいんだけど」  
黒辺 「おーい、無視かなー？」  
深月 「七海さんが消えました」  
黒辺 「……なんだって？」  
枢 「深月……？」  
深月 「黒辺さんなら心当たりあるんじゃないですか？」  
枢 「……誰と話してんの」  
深月 「幽霊部員の黒辺真夜先輩」  
枢 「はぁ……？」  
深月 「七海さんのこと、なんかすごく気にかけてるみたいだったから。……何か知ってるんじゃないですか」  
黒辺 「……検討がつかないな」  
深月 「嘘が下手すぎです。早く吐いてください」  
黒辺 「やれやれ……、神社なんじゃないかな？」  
深月 「神社……？」  
黒辺 「だけど今はもう海の底だ。……七海はいま潜れないんだろう……？」  
深月 「……行こう……枢——」  
枢 「な、黒辺真夜って10年前に亡くなったあの黒辺真夜？」  
深月 「……？ 多分そうなんじゃないかな……」 ※黒辺の表情を見て  
枢 「……本当にいの？ そいつ」  
深月 「一応……そこは……」 ※どりどりを感じてちよっと気圧されてる  
枢 「黒辺真夜がここは……」  
黒辺 「……さて、なんだろうね」  
枢 「……いや、行こう」 ※踵を返す  
深月 「えっ……？」  
枢 「死んだ人に頼ったって仕方ない。いまはもういない人なんだし」  
深月 「でも黒辺さん——、あ、ちょっと待ってよー 枢——！」

ガツガツ

黒辺 「……いない人で悪かったね」 ※苦笑

窓ガラスに打ち付ける雨、風。高波

黒辺 「……七海ちゃん……」

「5」

ゴボゴ

深月 「ちよっと枢えー」  
枢 「息できないからって潜れないわけじゃない。校舎裏の倉庫には酸素ボンベとかあって……、たまた七海ちゃんそれ使って潜ってた——、だから、」  
深月 「でもこんな海でっ……」  
枢 「だから急がなきゃっ……、あの人——たまたに無茶するから——、」  
深月 「……黒辺さんのこと、何か知ってたの？」

枢 「別に。……興味ないし調べることは思っただことない。……でも、七海さんにとって大切な人だったんだろことが  
てことは分かってたから」  
深月 「……枢はさ……七海さんのこと……やっぱり好きなんだ」  
枢 「違うよ。ただ……ほっとけないんだ……ああいつ人……ムカつくんだよね」  
深月 「……そっか」  
仁 「深月——！」  
深月 「仁——？」  
仁 「っと見つけた……、て枢——！ ちよっと待ちなさいよ——！」  
深月 「ごめんっ急いでるから……！」  
仁 「あつ……もうっ……！！ ——お母さん心配してるよ——？ うきなり家飛び出してどーしたのね——！」  
枢 「危ないから家帰ってる、俺もすぐ戻る」  
仁 「一人で帰れるわけないじゃん——！」  
枢 「——……っ」 ※停止  
仁 「わわわっ——！ 急に止まんないでよ——っ？」  
枢 「お前は帰れ」  
仁 「子供扱いしないで、枢が帰らないなら私も帰んなら」  
枢 「危ないだろ」  
仁 「どっちが——！」  
枢 「……」  
仁 「もうっ……！！！」  
深月 「まっ、まあまあっ……七海さん見つけて引き上げればいいんだしっ……ねっ？」  
仁 「七海さん？ 七海さんがどっかしたの」  
枢 「お前には関係ない」  
仁 「気になるじゃん——！」  
枢 「……いいからお前はうちに帰ってる。母さんにもすぐ戻ること伝えといてくれ」  
仁 「あ、ちよっと枢——！」  
深月 「仁……」  
仁 「……あんな風に言われて帰れるわけないじゃんねえっ？」 ※強がり、深月に同意を求める  
深月 「……わかった。一緒に行こ？ 実は三つちゃんもうなくなってる……」  
仁 「え……？」

どーっどーと荒れる海

M深月 「海が荒れること自体は珍しくない。海流も、時々海そのものが生き物のようになんて回り回ることが多い——。だ  
けど、今夜の海は異常だ。……嵐が近づいてるっていう話は聞いてたけど、何か……嫌な予感か……」

仁 「見えてきたっ……！ ……けど、本当にこんなところには……？ 真っ暗でこれじゃ何がなんだか……」  
深月 「わかんない……。でも黒辺さんがここだっけって言ってたし……、それに——、」

M深月 「三つちゃんを見つけたのも、この近くだ」

枢 「っ……？ ……！！ 七海さん——！」  
仁 「枢っ？！」

ゴボゴボ

深月 「——そんな……、」

M深月 「海は、私たちにあってそれは誰よりも近く、地上よりも遥かな存在だった」

枢 「七海さんっ……！！ しっかりして……！！ ッ……」  
仁 「私も手伝っ——！」

深月「時折ひやっこさせられるほど怖い一面を持ちつつも、私たちを包み込んでくれる。……そんな、優しいものだと  
思ひ込んでた。だから――、」

じほほ

枢「……ッ……大丈夫、息はあるっ……気を失ってるだけだ……土に運べば――、」

仁「深月――」

深月「くっ……？　んあッ――？」

じほっ、と海流に飲まれる

深月「っ……、」※上下反転、視界が回る

M深月「溺れるなんて――……私は――、……」※気を失う。見た事なかった。想像できなかった。

ゴボボ

「6」

目ウ「嫌です――。私も一緒に――」

///ｼｷ「――わかっておくれよ」

目ウ「っ……その想いは嬉しいのです……嬉しいのです……ですがっ……」

///ｼｷ「ふめんね。だけど、君を選んではいけなら」※頭を撫でる

目ウ「ッ……と口様は……ずるいのですっ……」

///ｼｷ「えっかいっかまた――……、いや君は自由だ。だから――、」

目ウ「と口様――」

///ｼｷ「じゃあね」

目ウ「と口様あ――」

深月「……今の……」

目ウ「目が……賞めましたか」

深月「目ウちゃん――」

目ウ「……すみません……急に家を飛び出したりして……仁殿からお借りした本にもるとここに奉納されていると  
聞いてあったので……」

深月「……？　ここは……」

目ウ「私が眠っていた祠のすぐそば。深水神社と呼ばれておるそこのですね」

深月「……――。こんなこととしてる場合じゃなら――。七海さん……――。……っ……、目ウちゃんー。帰るっ――」

目ウ「私は……帰れません」

深月「く、ええ……？――」

目ウ「七海様でしたらご無事です。……こちらで溺れそこになつていらつたので、私が泡で包んでおきました  
た」

深月「目ウちゃんか……？」

目ウ「これを」

深月「……？　鈴の……髪飾り……？」

目ウ「ずっと探していたのです……こちらに奉納されていると聞いてよかった。……記憶はありますか？」

深月「ふめん、子供の頃の記憶はちよつと……昔は手伝いで巫女とかもさせられてたっほいんだけえ私は――、」

目ウ「では、そちらの、///ｼｷ様では如何でしょうか？」

深月「……く……？」

沈黙

目ウ「……おかしなことを申している目覚はわかります……。ただ深月様の中には『別の深月様も』が抱られるちよ  
な気がしてならないのです……。それにそのお方はあのかみ――、」

咲田・///ｼｷ 「にー」

田 「亡骸をお助けしようって……丑にうらなうやうたもつに感ひられて……」

咲田 「な……なに誂てるの？ 田ちゃん……？」

田 「咲田様は、そちらの咲田さまこそが、と口様なのではありませんか？……？」

咲田 「えい……」※それは取ぐわからぬ

田 「照ら丑してくだらませう……」

咲田 「世間をさ遷え、面影があるのです……」と口様」※訴えかける

田 「ち、田ちゃん……」

///ｼｷ 「……咲田」

咲田 「……///ｼｷ……」

///ｼｷ 「う……変わるね」

咲田 「え、ちよちよ……」

///ｼｷ 「——にんじおは、田ちゃん？ うらなうのばいめあしてになるのかな……？」

田 「ひい……ね……」※咲田

///ｼｷ 「あ……えい……、世に誂たらんだけいそのと口様……」

田 「と口様……」※抱きつゝ

///ｼｷ 「わ……」

咲田 「ち、田ちゃん……？」

田 「と口様……と口様なのです……やはり咲田さまはと口様でおられたのですね……？」

///ｼｷ 「……（※その意味を受け止めつつ）残念だけれど僕はそのと口様……人を知らず、君も初対面だ」

田 「わかっております。この図体は別のもろ。今のと口様はその記憶がなうのは仕方なう……」

///ｼｷ 「君は一体……何者なんだ？」

田 「私は海神（うみかみ）・海神豊玉彦（わたつみとよたまひこ）様が襲、ヤマザノ///ズキでござります」

///ｼｷ 「海神……？」

田 「そして、貴方様こそが海神・海神豊玉彦様でおられます」

咲田 「……つらつらけなうだけ……」

///ｼｷ 「そこが……おれはそこら……」

咲田 「咲田……？」※わかるの……

///ｼｷ 「この子に出会ってから寂な顔ばかり見るんだ。咲田も覚えてない？ なんだか随分昔の、……また海がこんなにはくなくった頃の景色」

咲田 「……海が狭い……？」

///ｼｷ 「うん。前からおかしな顔はたまに見てただけ、最近では明になつた……」

咲田 「うらやうらやう、なにそれ前世の記憶とか意味わかんない……」

///ｼｷ 「貴女様……」

咲田 「うや、幽霊はうだけだから……そんな……、ええ……」※信じられなければい実感はある

田 「もう一人の咲田様が混じつらう……」

咲田 「そりゃそつたもー、うきなりそんな……、……信じられるわけ……」

///ｼｷ 「ひい……その話が本当だとしたら、おまこと絶賛行くんだよね」

Σ呆月 「///ｼｷ……ひ」

///ｼｷ 「考えたことはあるから。魂こてものの存在は」※慣けなら拒絶・自分の体が自分のものではならぬではならぬ。とらつたにいつて

Σ呆月 「く……ひ」

///ｼｷ 「よく（拒絶）」※呆月に対して

曰ウ 「そのままでは不便でしょう」

鈴の音、にほはる気配。

呆月 「わっ……ひー」

///ｼｷ 「くひ……」

呆月 「ひ……ひつち……ひ」

///ｼｷ 「そんな……こんな事してー」

曰ウ 「このかんじは彦様に負けたもの……、今はもうその力はお餅でなくともひには――……。……その回数か  
返えるものであればおせぬか……お二人で一つの体とらつたのは面倒だけれどもひつちひ」

呆月 「本当は……///ｼｷなの……ひ」

///ｼｷ 「そのめたらだね」※拒絶

呆月 「ひ……、ひい……私、こんなひ……」※目の前に///ｼｷがらるひとは驚く。しかしそれは置いといてなかつた

///ｼｷ 「驚いちゃ……魔法みたらだね」※おまことホッとしてる

呆月 「///ｼｷ……ひ」

///ｼｷ 「呆月は超たるひ」※突き放すような

呆月 「は……」※驚いて音にならないうらひ。

///ｼｷ 「これから呆月呆月は呆月だけのものだ」※よかったね

呆月 「なに言ってるの///ｼｷ……ひ。呆月は私ひやなくて貴方でしょうーひ」

///ｼｷ 「僕が呆月である必要はなら」

呆月 「///ｼｷ……ひ」

///ｼｷ 「いつか……その出来ればいつて思ってたんだ」

呆月 「なんでーひ。遅いもー。そんなひ遅いー」

///ｼｷ 「そろそろ暗いならと海が荒れそうだから、曰ウちゃんひ」

曰ウ 「はい」※なんとなく察して

///ｼｷ 「呆月を頼めるかな」

曰ウ 「かしこまりました」※心中お察しします

呆月 「///ｼｷひ……ひ。///ｼｷも一緒に帰るんだよね……ひー。お父ちゃんとお母さんは驚くかも知れないうらひちゃん  
と語ればー」

///ｼｷ 「……」

呆月 「そんな……そんなひ……」

曰ウ 「呆月ね」

呆月 「曰ウちゃんおひめもー。///ｼｷは」※血分が混ざるひつて

曰ウ 「それが口様のお言葉であれば、私は従うまでです……」

呆月 「――」※///ｼｷの顔をヒッと見つめ、懇願

///ｼｷ 「呆月ひ。これまでありがとうね」

呆月 「やだ……」

曰ウ 「では」

鈴の音、バタ入、と扉が開く。

呆月 「///ｼｷひ――」

その中に飲み込まれる呆月。にほは

「7」

M深月「今日、海に沈むをみた。海流に流されながら、七海さんはきつとこんな気持ちだったのかなって思った」

深月「う……あう……—」

M深月「鼻が——、水が、口に、」

M深月「ぐるぐると目の前が回って、あまりの苦しさに意識を失う一方で、それでも私はうつろえることができて。流されるがままに、ただ、もみくちゃにされて、だけと///シキの顔が、頭から離れなくて——……」

へたへたと海辺に浮かぶ深月

深月「……掬氏だ……」

M深月「気がつけば、私は一人、海面でぶかぶかと浮いていた」

M深月「風の目から差し込んだ月の光が周囲を照らしていた。静かに、じんわりと、胸の奥そこにぽっかりと割れた穴に夜空の透き通った空気が染み込んでくるもので、痛みすらも感じず、手に取ってみようとしても『何もなら』」

深月「みつぎ……」

M深月「///シキが、どこにもいらない」

仁「みつぎ———」

深月「……？ 仁……」

仁「もっ——、心配したも——、大丈夫——？ 怪我してない——？」

深月「ああ……うん……？」

仁「……？ ……深月……？」

深月「く……？」※ほろほろ涙を流しながら

仁「……なにが……あったの？」

深月「……わからない。わからないよ……」※混乱して笑っただけ

M深月「——何処かで、うつも感じていたその存在がなくなっただけですごく心細くて、肌に触れる海水が冷たくて」

深月「わかんないよ……」

M深月「私は、うつしたらうしろのかみからなくなっただけです」

七海「癒へ」

「8」次回予告

田中・///シキ「次回予告—」

田中「わ、わたくし口癖……気分転換に何かして癒ひまじもつか……？ それとも子供をいれまあか……？」

///シキ「うやうやしくも田中おやん癒は」

田中「ああ、そのうちは今はおならの体でいれましたね……！ やはり気がかりうしろのどしたらその体もろっつとまじもつか——」

///シキ「うやうやしくもそのうら癒味じゃなくて……—、癒は君とそんな、」

田中「チヨウジクでアベノチヨールなアベツクでアヘーッなのでは？」

///シキ「田中おやんのうた時代でそのうらが流行ってたのかな……？」※気圧される



ヨウ 「いえ、これはと口様の口癖です」  
三ツキ 「嘘でしょ……？」  
ヨウ 「チヤスコでヤミヤミだったのですー」  
三ツキ 「く……くえ……？」  
ヨウ 「次回―― カラチヤスと第一〇話、一姫二太郎さん垣子ー 来る日も来る日も夢見ておりましたぞっ？」

「9」

黒辺 「9 .5話 枢と真夜」

枢 「扉開けろ」  
仁 「わかってる……！」  
黒辺 「っ……」  
枢 「っしょ……」  
黒辺 「七海ちゃん……？」  
枢 「はぁ……」  
仁 「そんじゃ私はっ……」 ※深月を探しに行こうとする  
枢 「待て――！」  
仁 「やだよー たって深月が――」  
枢 「あいつなら平気だ。流されたぐらいでどうにかなる奴じやない」  
仁 「なんでわかんぬよ……」  
枢 「お前だって分かるだろ。なんだかんだいって深月は強いよ。心配なのは分かっけと落ち着けッ」  
仁 「っ……もっいいー」 ※部屋を出て行く  
枢 「仁ー ……っとはもっ……」  
七海 「んっ……」  
枢 「……馬鹿なんだから……」  
黒辺 「……気を失っているだけか……」

窓ガラスがガタガタ揺れる

枢 「この人が死んだらあんたのせいだからな、黒辺真夜」  
黒辺 「……………」  
枢 「……いや……違うな……」  
黒辺 「はぁ……お互い苦労するねえ、枢きゅん？」  
枢 「……」  
黒辺 「生憎僕は君がいつように『もついない』、だから結局は傍観者でしか無いわけさ。つまりこれは君の気まぐれが招いた結果。君の性格の悪さが起こした必然ともいえよう――。失望が末に沈み消えようとしている少女になんと言葉を届けようか、……なんとも情けない話だね。目の前で繰り広げられるおハナシに手を加えられないってのはね」  
枢 「俺も……この人も……多分……一番大切なところは譲れないんだと思う……。……だからきこっ……どつしたって諦めるしかない……だね……」  
黒辺 「……………」 ※見届ける  
枢 「だからって……何も感じ無いわけでもない……」  
黒辺 「好きなんだろう？ 七海ちゃんのことか」  
枢 「……」  
黒辺 「精神は肉体に引く張られるもんだ。その逆も然り。切っても切れない関係にある。――君が七海を抱いている間、僕が何も感じていないとも思うなよ。エロガキ――」 ※結局、黒辺も七海が大切  
枢 「……（苦笑）」  
黒辺 「は……？」  
枢 「呪い殺されないってことはあんたは認めてくれてんの？ 俺たちのこと」  
黒辺 「――！ 誰が―― お前なんか――」  
枢 「（立ち上がり、黒辺を真上げるようにして） まー……それはどうかわかんないけど」  
黒辺 「んっ……？」  
枢 「悔しけりや指くわえて見てないでなんとかして見せてよ、先輩」 ※七海の恋人としての意味も含め

黒辺「……」

枢「……なんとかしてみるよ……」

黒辺「……はあ……。君は本当に不器用だねえ……。？」

枢「……っ……」

黒辺「……なんかできるならそうしているぞ、ばかものめ。君が言ったんだろ？ 僕は——、……僕は、もういらないんだよ。……浅倉枢くん……。？」※だから君がごっこにかするんだ

七海「続く」

「10」

枢「〇〇役xxですーオーディオドラマ『カントリーマスター』はYouTube、Podcastなどの配信の他にもおまけ音声ドラマやシナリオなどを封入した有償版の配信も行なっておりますー第8話、第9話のおまけは『8.5話 校舎裏のひと時』『9.5話 枢と真夜』。（適宜に一言コメント追加してござい）。詳しくはまたシナ『カントリーマスター』公式サイトをご覧ください」

【10】「追憶の道」

「1」

仁 「ほら中人って深月ー」 ※カウカウっと部屋扉を開ける  
深月 「私……」  
仁 「っと……確かタオルがここに……ー」  
枢 「俺、廊下出てるわ」 ※出て行く  
仁 「あーあー、もっつ……ー！ なにかどうなってるんだよ……ー！」 ※顔を拭きながら  
深月 「ミツキが……」  
仁 「なに。どしたの。……なにがあったの」  
深月 「っ……」  
黒辺 「こりやまた……なるほどねえ」  
仁 「なによ」  
黒辺 「女の子にされちゃったわけだ」  
仁 「はあ……？」  
七海 「……騒がしいわね……」  
仁 「七海さんー」  
七海 「っ……、ここは……」 ※軽く目眩  
枢 「目、覚めたの」  
七海 「枢くん……」  
枢 「黒谷は？」  
七海 「平気よ……」 ※少しクワクワするけし  
枢 「……帰る」  
仁 「いやいやちよつと待ちなせうよー。なんか他にあんできよー」  
枢 「他にって？」  
仁 「例えばほら……無事でよかったーとか……」  
枢 「当たり前じゃん」  
仁 「そうじゃなくて」  
枢 「お互い踏み込まなうって決めてるから」  
仁 「はあ……？ ちよつと枢ー」 ※追いかけようとするが扉を閉められる

カウカウ、ピシヤ

仁 「っ……もっつ……」  
黒辺 「困ったもんだねえ……？」  
仁 「……？」  
深月 「ミツキー……」 ※膝を抱えて、小さくなってる  
七海 「ごめんなさい……」 ※仁に対して  
仁 「んう……ー！ー！ー！ あーっもっつー！ なんなのよあー。これはアー？」

深月 「カウーテイスト 第10話、追憶の道」

「2」

ミツキ 「深月が本物の深月だったらよかったのにね」

M深月 「一度だけ、冗談交しりにそんなことを言われたことがある。街で男の子に告白され、断った夜の夜だ」

M深月 「そんなミツキに自分でも驚くほど反発したのを覚えてるー。……だって深月は……本物の深月はミツキの方で。私は……そんなミツキを庇つために生まれてきたんだから。……それにその頃には、私はもっつー……。……、……ずつと一緒にしたから分かる。ずつと一緒を感じていたので知ってるー。……深月は、私の知ってる深月はー、彼以外に、ありえないんだ。……だから私は……」

深月「ミツキに会ったらも……」

M深月「一人では、生きてくけなら」

「3」

仁「分かる……？ 深月……」

深月「……仁……？」

仁「……何があったの……？」

深月「私……えっと……」

仁「……？」

七海「……声を……聞いたわ」

仁「……？」

七海「はえ……あの人がなかつた……」

仁「んあーっもっつ……！…… ころころの拒手なのよあー！…… おもこと黒辺ー 黙ってならで何か言ったらどうなのよー？」

七海「っ……？ー」※黒辺という単語に反応

黒辺「あーあ。僕は知らないぞー？」

仁「く……？ え……？」

七海「どうして貴方がその名前を知ってるの……？」

仁「いやだって……黒辺はこの部の幽霊部員で……ほらそこ……」

七海「っ……？ 幽霊……？」※意味がわからなう

黒辺「んあー……、……やつは覚えてならっほらねー。うや、当たり前なんだけえわ」

仁「……あー……信じてもらえなくてケッコーですけい……地縛霊っていつか浮遊霊的な……？ ……笑ったら笑いなさうよー」

七海「そこは……うるの……？」

仁「……いやらしい目であんたのこを覗てるわよ。うるうるよね」

黒辺「全く黙ってやつは……」

仁「本当のことです」

七海「そんなことって……」

黒辺「ありえなうって最初は僕も思ったけどやー、……世の中不思議なものだよなあ？ 10年前に死んだはずの僕が今ここにいて、しかもそれが七海ちゃんにバシちゃんだったってんだから。長生きするもんだよねー。っってもっ死んじやつてるんだけえ」

仁「七海ちゃん知り合いなって、ころころ」

黒辺「ころこ呼ばわりとは酷いなあ？」

仁「本当のことです」

七海「貴方には……見えるし聞こえるの……？」

仁「浮いてなきや幽霊って信じれないくらいにはね。ころころか深月にも見えてるっほらっ、割と見える人いるんじやなうの？」

七海「っ……」※涙が口ぽろぽろ

仁「はっ……？ー」

七海「そう……」※どうして私には見えなうんだろっ

仁「ちよ、ちよこと黒辺ー？」

黒辺「僕に言われてもねえ……？ このとーり見えおかわれもじならのびえーうるころころなんだ。君が僕の言葉を代弁してくれるのからっ？」

仁「その前に何がどうなってるのか説明はして欲しいんだけえ」

黒辺「そのつもりはなうから、……そっだな……ころころかなー、」

仁「……？ ……だめだね……？ ……っ……？ それが何……？」

七海「ッ……！ 貴方はどうしてっ……！…… どうしてっつもそのやっ子供扱っつてー 私のは……そんなこと一度も願ったことなんてなかったのに……！……」

仁 「えっ……ええっ……？ えーっ……？」

黒辺 「……………」

七海 「私はただ……貴方に好きだと言ってもらえて……嬉しかった……。……例えばそれが冗談だとしても……嬉しかったのに……。……それも今更『ごめん』だなんて……」

黒辺 「……はぁ……」

黒辺 「昔話をしようか」

仁 「……？」

黒辺 「とあるところに口り口入がいた。8つ9つも歳が離れているような女の子に本気で恋をしたおバカさんだ。その才能は悪魔との契約によって手に入れたもので、その代償は寿命だった」

仁 「はぁ……？」

黒辺 「そう長くはない時間でしてあげられることなんてタ力が知れてる。……なら、最後は立つ鳥跡を濁さずって感じに消えたかったんだけどー、……失敗しちゃってね。見ての通り、僕自身が未練がましくここにいる」

仁 「なによそれ……」

黒辺 「どの道ほくは死人だ。今さら兎や角言う資格はないし、枢くんは帰っちゃったから、君たちがどこにかこの子を一ー、」

深月 「そんなのダメですよ……！ー」

仁 「……深月……？」

深月 「今もこうして……今だって七海さんは黒辺さんのこと想ってるのに……！ー 忘れようとしても忘れられなくて、だから苦しんでこんな風になってるのに……！ー 黒辺さんはなんとも思わないんですかー？」

七海 「っ……、」※立ち上がる

仁 「く？」

深月 「七海さんが海で溺れるようになってるのだから、きこっとー、」

七海 「ッ」※深月にヒンタ

深月 「っ……？ー」

仁 「ちよー！ー ちよっとー！ー なにしてんのよー？」

七海 「……真夜さんが……そんな人なわけないじゃない……」

深月 「……？」

七海 「……っ……ごめんなさい。……そこに、いるのよね……？」

深月 「……え、ええ……」※頬に手を当てつつも戸惑う

七海 「（ゆっくり深呼吸）……ねえ……真夜さん……。私ー、ずこと、ずこと貴方のこと忘れられなくて……だった……誰でも良いやって思ってたんです……。だからって言い寄ってくる男なら誰でも良いわけでもない。貴方の代わりはいないから、貴方の代わりに『できな』ような人と付き合いおつて決めた。……だけど、それじゃダメだった……」

黒辺 「……」

七海 「……なのに本人はこんな近くにいるなんて、ヒトイです。相愛わらず」

黒辺 「（肩で采れてみせる）」

七海 「――黒辺さん……好きです。大好きっ……。たぶん、これからずっとー、……貴方のことを愛してしま……す……。だから、これからも……『私のことだけを』見ていてくださうっ……。？」

仁 「え……ええっと……。……なに？」

七海 「（クスリと笑って）だって悔しいじゃない。やられっぱなしじゃ」

仁 「くっ……？」※意味がわからない

七海 「もう、片思いは疲れたのよ」※静かに。出て行くこととする

深月 「七海さんっ……！ー」

七海 「痛かったわよね。ごめんなさいね」※優しく頬に手を触れて

深月 「い……いえ……」

七海 「貴方は――……、……私みたいになつてはダメよ？」

深月 「七海さっ」

七海 「じゃあね」

扉を閉めて出て行く

仁 「なによ今の……」  
深月 「っ……」  
黒辺 「言ってくれるよねえ……？ 小学生に手を出したら犯罪だってゆーのに」  
仁 「マシものの口リコんだっただとは思わなかった」  
黒辺 「半分冗談、半分本気って感じかな」  
仁 「曖昧なのって私嫌い」※むっすー  
黒辺 「双子だつてのにここまで割り切れてると一厘のこと清々しいや」  
仁 「どういふことよ」※むっ、眉を寄せる程度  
黒辺 「いや？ 仁ちゃんはおかわいいなあー」  
仁 「はあゝ……？！」  
深月 「言われなくても……私はず……」※ミヅキへの想いは諦めきれぬものではない  
仁 「深月……？」  
深月 「ねえ……仁……？ 私が……仁の好きな私が、私じゃなくてもう一人のミヅキの方なんだつていったら……信じ  
る……？」  
仁 「えっ……、ちよつと待って……なによ急にっ……」※突然なのでトキマキ、黒辺の手前  
深月 「真剣な話なの」  
仁 「でも、……え……？」※黒辺のことを気にしている  
黒辺 「僕はしばらく消えてあげるよ」  
仁 「あっ……」※二人きりはそれはそれで不安  
深月 「……仁」  
仁 「急に……なに……？ この前のことなら私――」  
深月 「仁っ」※こつち見てー  
仁 「……冗談じゃないんだよね。本気なんだよね……？」  
深月 「うん」  
仁 「……はあゝ……、私の知ってる深月がこんなタチの悪い冗談言つとも思えないし。そもそも嘘つくにしてももつ  
とマシな用意するよねえ……。……わかった、信じてあげる。深月が実は二重人格だつたつて話？ それとも実は双  
子でしたとか？」  
深月 「最初のが正解。……私は偽物のミヅキで、子供の頃、本物の深月が作り出した『女の子としての自分』なの」  
仁 「……？ え？」  
深月 「深月は本当は男の子で、女の子らしくない自分が嫌で私を生み出した」  
仁 「……嘘でしょ……？」  
深月 「大マジ」  
仁 「……やー……いやいや、やー……？ 無理でしょそれは――……だつて……エヘー……？ ……はあゝっ……？」  
深月 「私だつてそんなことありえるのかなつて思つてるんだけど、でも私はここにいて、本当の深月はいつも私の中に  
いて――」  
仁 「待った待った。ストップ。……真剣なのはじゅーっつン伝わってきてるから……。……それで、なに？ 深月  
が二重人格だとして何が言いたいの。……私は……どうしたらいいの」※深月への気持ちをどうしたらいいの。  
深月 「深月は……消えようとしてる」※認めたくないけれど受け止める  
仁 「く……？」  
深月 「いまはもう……私の中にはなくてっ……帰ってくるつもりはないつて……。いきなりすぎて私も意味わかん  
ないけど、けど、私がいてミヅキがいないなんて意味ないからっ……だからっ……、……だから……力をかけて……」※  
徐々に感情に響けて。本当は自分で連れ戻したい  
仁 「深月……」  
深月 「……私じゃ……深月を連れもどせないからっ――……仁が……ミヅキに言えばミヅキもきこつ……だから、お願  
いっ……、……お願いだよ……仁――……、……深月を助けて……」  
仁 「……わかったっ」  
深月 「……っ……？」※一瞬よくわからなかった  
仁 「なにがなんだかわかんないけど、けど貴方も私の知ってる深月なんですよ？ 偽物つてか、深月の女の子成分が  
あんたつて言うなら貴方も私のよく知っている深月深月。私の友達ー」※にやっ、頼り甲斐のある  
深月 「仁っ……」  
仁 「ほれほれー、かわいい顔がだいなしだよオ？」  
深月 「うんっ……」※涙をぬぐいながら  
仁 「だからさ、深月がお願いつていうなら私はわかったー 助けたげるー！ それが『親友』つて奴でしょ？」

深月 「っ……ありがとう……」

仁 「おっっ」※ただし事情はよく飲み込めてない

「4」

波打ち際に歩み寄る七海

七海 「幽霊だなんて……笑っちゃっわね」

波の音

七海 「……黒辺さん」

枢 「なにしてんの」

七海 「あら、帰ったんじゃないのね」

枢 「あめは言っただけと七海さん帰すまで帰れないよ。連れ戻すのが目的だったんだし」

七海 「あらあら？ ようやく妹さんから私に乗り換えてくれたっていうのかしら？」

枢 「七海さん」※馬鹿なことはよしてよね

七海 「……あの部屋にね、幽霊が住み着いてるの、知ってた？」

枢 「幽霊ねえ……？」※知らなかったという建前

七海 「嘘つき」※はぐらかさないの

枢 「知ったのはさっきだよ」※降参

七海 「……私だってそんなもの信じてるわけじゃないけど、あの子達が嘘をつくとも思えないし……、……なんだか嬉しかったのよ。これって変かしら」

枢 「存外メルくんだとは思っかな」

七海 「駄目？」

枢 「いいんじゃない？ けど死後の世界にけるってのは馬鹿げてる」

七海 「……」

枢 「それは俺が許さない」

七海 「驚いた。ほんとに私に興味を持ってくれたのね？ あんなに体を重ねても誰かさんのことばかり見ていた癖に」

枢 「嫌じゃないから、七海さんのこと、割と。何も言わなくても察してくれるし、踏み込まれたくないから強がってるところとかは可愛いし。ぬいぐるみ抱きながらじゃないと眠れないところとか正直そえる」

七海 「慰み者には丁度いいわね」※自嘲

枢 「七海さん——、……もつやめにしません？」

七海 「なにをかしら？」※余裕ぶる

枢 「諦めるのを」

七海 「へえ……？」

枢 「どうせ諦めようとしたって諦めらんないのはお互い様なんだし、無理なもんは無理」

七海 「っ……」※とんと胸元を突く

枢 「……？」

七海 「自分から振っておいて……良くもそんなことを言えたものね……」

枢 「だっってお互い、優先順位ってあるじゃん？ だから——、」

七海 「私はあの人を忘れようと思った事、一度もないわ」

枢 「じゃあなんで俺に声かけたの」

七海 「声をかけたのは枢君でしょっ」

枢 「手を出したのはね。呼び止めたのはそっち」

七海 「……」

枢 「忘れる必要なんてないんじゃないかな」

七海 「ふざけないで——」

枢 「……」

七海 「……諦めることも……忘れることもできず……ずっとあの人のことばかり何処かで追ってしまっ……。境界の端に、景色の何処かに、あの人がいるんじゃないかと思ってしまっことがどれほど苦しいかっ！ 貴方にはわからないでしょっ——？」

枢 「わかりませんし、わかりたくもありません」

七海 「ッ……」  
枢 「あいつがいなくなったら俺は耐えられなと思いますし——……だから、そんな顔をする七海さんが好きです」  
七海 「貴方ってほんと……どうかしてる……」  
枢 「七海さん」  
七海 「っ——、いいわ。もう……いいわ……」  
枢 「……」  
七海 「あの人がいなくなつて……けどそこにいるのが分かっているのに触れることもできないなんて……、……こんな事ってありだと思う……？」  
枢 「黒辺さんに見られてるって思うのは、前から変わらないうんじやないですか」  
七海 「はあ……」  
枢 「それに、黒辺さんと同じになつたつて、そんな風になつた七海さんをあの人が受け入れてくれるとは思わないんで」  
七海 「どうしてそう思うのかしら……？」  
枢 「だってあの人が、……いまだに七海さんのこと、好きそつだから」  
七海 「「——」、……………そつね……」  
枢 「だから……足りない分は他で補つしかないんじやないですか」  
七海 「それが貴方ってこと？」 ※侮蔑、囁くように  
枢 「都合のいい関係だとは思つてるんですけど？」 ※お互い様でしょ  
七海 「……………これ以上誰かに恥ずかしいところ見せるのも癪……か……？（※あくまでも撥ね除けつて）……重いわよ、私。あの人がいるつて分かつた以上、もつと。……それでもいいの」  
枢 「んなの前からでしょ」 ※はあ？  
七海 「な……」 ※失礼じゃないかしら—  
枢 「それにあの人の仕返しには一度いいんじやない？ 俺には見えなかつただけよ」  
七海 「……ほんと見ればよかったのに……。……そしたら、悔しがる顔をたーんと堪能できでしょつに」 ※苦笑  
枢 「今でも十分悔しかつてると思うよ。だって七海さん、綺麗だし」  
七海 「ありがとう」  
枢 「ん」

黒辺 「あーあー、見えないからつてイチャコつとまあ……」

波の音

黒辺 「……ッハア……。仕方ない。仕方ないかなあ……。これは……。一応年長者だしね。仁ちゃんが行くなら七海もつてことになるもんねえ……。？」

波の音、重ねて

黒辺 「久しぶりに外出と行きますか？ ……。できればお手柔らかに頼むよ……。『深月くん』……。？」

///シキ「續く」

「5」次回予告

七海・枢「次回予告」

七海 「私たち、これでまた付き合つてることでもいいのかしら」  
枢 「一応俺はそついつ認識だけど」  
七海 「そもそも付き合つてたつて言えるの？ 私たち」  
枢 「ん？」  
七海 「確かに体の関係は持つてたけど、一度も枢くんつて私のことを好きだとか愛してるつて言つてくれたことないじゃない？ 第一、最初から付き合ひまじよう、そつしまじようつて感じじゃなくてワアア、あ、はあ……。て感じだったんじゃない？ と言つて事は恋人同士つていうよりもやっぱり」  
枢 「時間切れです七海さん。その話はまた今度」



七海 「そうやって男っていつもはぐらかすのよね。曖昧にして次があるかも分からないのに、だから男の人って」 ※以下略

枢 「次回、カラーイラスト第一話、僕たちこれでクランクアップ」

七海 「ほんとその点において黒辺さんは、」

枢 「あ—————」

「6」

七海・枢 「次回予告は終わらない」

枢 「七海さんってほんと黒辺さん好きですよネ」

七海 「愛してるもの」

枢 「黒辺さんが生きてた頃って、七海さん幾つだったんですか？」

七海 「えっ、7歳？」

枢 「小学2年生……？」

七海 「愛に年齢は関係ないわ」

枢 「そうではなくて」

七海 「8歳の年の差なんて、世間じゃ珍しいものでもないでしょう？」

枢 「高校生が小学生にっこのがやばいんです」

七海 「年の離れた妹だと思えばいいじゃない。恋愛対象でしょ？」

枢 「頭おかしいんですね、知ってました」

七海 「幼稚園ぐらいの子が実習に来た大学生のお兄さんとかに憧れる時期ってあるじゃない」

枢 「ああ、そっか。黒辺さんなのがいけないんだ」

七海 「あら？ 黒辺さんは紳士的だったわよ？ キスのひとつもさせてくれなかったもの」

枢 「当然ですね」

七海 「今思えば唇ぐらい奪っておけばよかったのかしらね。あの頃は純粋だったわ？」

枢 「俺を見ていうのやめてもらっていいですか」

七海 「あらほんと、ヒトリ男に捕まったものだわ？」

枢 「ヒトリ男でいいですよ、別に」

七海 「勘ねたのね。面白い」

枢 「それはよかったです」

七海 「じかい、カラーイラスト、第一話。ファーストキスは生徒会室で」

枢 「どうでもいい情報を公開しなしてもらえますか」

【一】 「水底に響く音色」

「一」

///シキ 「……はあ……」

ヨウ 「と口様……」

///シキ 「ごめんね、肝心なところをお願ひしちやotte」

ヨウ 「うえ、私は――、……私はこつて……昔ひと口殿にお会いできただけで幸せ者でござります」

///シキ 「……だけと僕は君のことは……そのと口様つて人のことも全然……」

ヨウ 「時が過ぎれば何事も泡のように消えてゆくばかり。……人とは記憶ではなく、在り方であると考えます。///シキ様は、確かに、と口殿であった時の記憶はお持ちではありませぬか――……いまこつて私とお話ししている姿形、そして振る舞いは、紛れもなくと口様であります」 ※和やか

///シキ 「作り話つてこともあり得るわけだけとね」

ヨウ 「信じていただけないとも、この身を捧げるだけですから」 ※微笑み

///シキ 「君は――……、……いや……どうせ僕にはもつ……（※帰る場所なんてないんだから）、……何処か遠く街にでも行こうか。深月が二人したんじややこつたことになるじね」

ヨウ 「と口様がそのお望みであれば」

黒辺 「憶えるねえ？」

ヨウ 「い？」

///シキ 「黒辺さん――……」

黒辺 「ハジメマス、///シキきゅん？」

///シキ 「何しに来たんですか……」

黒辺 「あんまりじやないかな。先輩として君にアドバイスしに来てあげたつて言つのに」

ヨウ 「と口様……」 ※うつろしたしまじろ

///シキ 「深月のことなら平気ですよ」 ※だから帰つてくだせう

黒辺 「遠いな。そつじやなら」

///シキ 「……？」

黒辺 「僕はね、七海のような子を望やしたくないんだよ。女の子はみんな可愛うからね？ 気がついてるんだろう？ なのに目をそらして、知らないうちをしてる。……君がいなくなつたら仁ちゃんはきっと君の亡霊を追ひ続けることになるよ」

///シキ 「何言つてるんですか、仁は――、」

黒辺 「全部深月ちゃんから聞いちゃったみたいだからさ？」

///シキ 「嘘ですね」 ※絶対に誰にも話さないと言つ確信があつた

黒辺 「まあね。けど、このまま君がいなくなればきっと彼女は深月ちゃんの中に君を求めてゆくだろうし、それを拒めるほど深水深月つて言つ女の子は薄情でもない。そう言つ子なんだろう？ 『あの子は』」 ※///シキがそつろつ風に着作した

///シキ 「う……流石元作家さんですね」 ※否定できない

黒辺 「流石にもう人格を生み出せるような想像力は僕にはなかつただけとね（苦笑）。だけど、想像はいつも僕らの先をゆく」

///シキ 「……本当に深月は仁に……？ 話したんですか……？」

黒辺 「（ふふん、と笑つ）」

///シキ 「こつてそんな……」

黒辺 「失いたくなかつたからだろう」 ※わかりきつたことを聞くなよ。小馬鹿にして

///シキ 「僕を……？ なんて」 ※心底わからないな

黒辺 「それは僕の口から語るべき話じやないかな」

///シキ 「……？」

黒辺 「男らしく向き合つたね、男ならさ？」

ノックの音、おぼろ

「二」

ぶかぶかと船で浮かんでゐる深月

枢 「仁——……、」

仁 「深月は……ほんとは良いの……？」 ※回想

深月 「うん、仁が行ってさ。」

仁 「はえ……、」

深月 「お願い。」

仁 「……わかった。任せて。」

深月 「うん——、」 ※回想終わり

深月 「はあ……」

M深月 「ああは言っただけど……大丈夫かな……」

///ツキ 「これから深見深月は深月だけのものだよ？」 ※よかつたね・回想

M深月 「何考えてんのよ……私の為……？ それって逆じゃんッ……。私が///ツキの為にいるのに……バカッ……」

深月 「はあ……」

七海 「随分深いため息なこと」

深月 「すみません、船、出して頂いたりして……」

七海 「いいえ？ この道、仁ちゃん一人で行かせるなんてできないだろうから」 ※ちんこと枢を罵る

枢 「なんですか」

七海 「別に？」 ※クスクス

深月 「……」

七海 「本当は自分が行きたかったんじゃないの？ ——事情は言いたくないなら聞かないでおいてあげるけど、……あなた、凄くもどかしそうな顔してるわ？」 ※震地震。静かにはっぱかけよう

深月 「私は……、……必要とされてないので……」

七海 「くえ？」 ※囁るように。そこかしらへ的な

深月 「それにもって、『着れません』し、行ったってしょうがないです」 ※苦笑、強がり

三ツ 「その通りなのです」 ※おはあッ

おはん、と乗り込んでくる三ツ

深月 「三ツちゃん！」

三ツ 「アウッ……、……また風が来ます。早くお戻りください」

深月 「やだよ。……それに仁が///ツキの所に向かっている」

三ツ 「存じております。と言っております、二人きりにして欲しいと申されましたので私は……。……後、先生のことを勘ておかねばと照らまして。まさか深月様が潰れなくなってしまうれたとは思ってありませんでした。私のせいでとしたら申し訳ありません」 ※ぐこ

深月 「っ……ひっくりしたけどね……でも平気。気にしないで？ ……三ツちゃんの仕業じゃないんでしょう？」

三ツ 「はう……」

七海 「あなた……」 ※何処かで聞いた声

三ツ 「ご無事で何よりです」 ※七海に苦笑

深月 「……三ツちゃんは……どうして///ツキの肩を持つのか？」

三ツ 「と、おつしますとさ。」

深月 「だって///ツキ、どこか行っているんだよ……？ そんなの……おかしうと思わぬら……？」

三ツ 「いえ」

深月 「なんでー。だって///ツキはっ——、本物の深月はあつちなのにな——」

三ツ 「……良いではありませんか。どちらが本物であること」

深月 「三ツちゃん……——」 ※そんなわけないー

三ツ 「ヒト様が、そのお望みになった……！ ならば受け入れるのが務めではありませんかー？」

深月 「————、」

三ウ「この「〇年間」 と口様を守り続けて来た貴方であればお分りいただけるかと思っております」  
深月「三ウちゃん……」※とこしてわかってくれならの……？  
三ウ「別れが辛いのは承知の上です。来るなと言われれば私も共には参りません。ただ、あのお方に従うまでです……」※深月と同じ立場  
深月「そんなつ……、だけ……、つ……」※迷っているけれど、まだ踏み出せない  
七海「……えーつー」※涙き飛ばす  
深月「は……？ えー ええ……？」※七海と一緒に落ちる  
七海「わあーっ」※なんか楽しそう  
柩「はあ……？」

海に落ちる深月、七海と共にポーン

三ウ「深月さま……？」  
深月「あつ、つ……つ……、な、七海さんをつ七海さんを先に……」※七海さんを助けて……  
七海「ぷっ……あははっ……」  
深月「七海さん……？」※なに？  
七海「ここも」※すぐ後ろ  
深月「……？」  
七海「驚いた？」  
深月「え……くっ……つ……」※波に飲まれて、溺れそう  
七海「ほら、ちゃんと捕まってる」※可笑しそうに  
深月「はっ……はいつ……」  
七海「そんなに慌てなくてもさっ簡単にはじまりはしないわよ？」  
深月「は……はい……？ あめ……？ ええ……？」※ボートに捕まりつつ  
七海「ごめんなさいね、なんだかあまりにも眠そうだったからつい押し飛ばしちゃったわ？」  
深月「くっ……？」  
柩「深月……ほら、掴まってる」  
深月「つ……つん……」。 (出てきて) つ……はあ……七海さん……」※七海に手を伸ばす  
七海「……ねえ、深月さん？ きっと貴方は自分より他人の事が心配なのね」  
深月「当然じゃないですか」  
七海「それってまるで作られたような優等生だとは思わない？」  
深月「つ……」※言い返せない  
七海「そうすることが美德だつて言つのは否定しない。それは貴方の価値観だもの……けれどあなたは『自分のことなんて……でも……』つて思っているんじゃない？」  
深月「……」※でも……だつてそれは……」※……との関係のことは言いたくない  
七海「やっぱりあなた後悔するわね。きっと貴方は身を投げるわ？」  
柩「七海さん……」※冗談でもやめてくださいよ。  
七海「(柩に苦笑で「わかってるわよ」返える)」  
深月「どうしてそんなことわかるんですか……」  
七海「……そう言う物分りの良さつて昔の私をつくりだから」※魔性の笑み  
深月「……」  
七海「だから私貴方のことが嫌いなね」※自分でもいま気がついた。納得。  
深月「私も……七海さんのことは苦手ですよ」※手をさしのばす  
七海「構わないわよ？ 私だつて好いてやるつとは思つてはいないし」※応じる  
深月「そうですか」

海から上がって来る七海

七海「あなたが私のことを苦手なのは『こつはなりたくない』からでしょ？ ——なら、後悔しちゃダメよ」※微笑み、先を行つたものとして、優しく。  
深月「大切な人の気持ち……無視することになつてますか……？」  
七海「まずはぶつけてみないことには始まらないと思わない？」  
深月「……三ウちゃん」※意思は固まつた

ヨウ「はい……」  
深月「私、貴方みたいにはなれないみたい」  
ヨウ「深月さま……」※まだ迷っている。  
深月「枢」※キリッ  
枢「なんか嫌な予感しかしないんだけど」  
七海「拒否権とーりあーつけた？」  
枢「ひとついっすね……で、なに。仁が取りに行った『忘れ物』と関係あんの？」  
深月「うん。……七海さんの使ってた酸素ボンベってまだ学校にあるのかな？」  
七海「私目ら、ちゃんとメンテナンスしたのがあるわ？」  
深月「……それ、取ってきてもらっても良い？」  
枢「はあ……？ 今から？」※こっから？ マジっすか  
深月「うん」  
枢「時間、そんな無いと思うんだけど」※波が荒れ始めてる  
深月「お願い」  
七海「お願いできるわよね？」※魔性  
枢「……はあー、分かったよ、取ってくればいいんだろ？ 取ってくれば」  
七海「偉いっ」  
枢「後が怖いだけですよ」※まじで  
ヨウ「っ……」

海に飛び込む枢

枢「けど、俺が戻るまでに仁が帰ってきたら引き返してこいよ。マジでやばそつだから」  
深月「うん、わかってる」  
枢「ならいい」

潜って消える枢

深月「七海さん」  
七海「なにかしら」  
深月「例え幽霊だったとしても……黒辺さんがあそこにはいてくれて……嬉しかったですか？」  
七海「……」  
深月「納得……できましたか……？」  
七海「……そういうものって……、後々付いて回るんじゃないかしら」  
深月「……」  
七海「私は――、……性格悪いから（※苦笑気味）。それでも良いって人に甘えてみることにしたわ。軽蔑する？」  
深月「……いえ、すごいなあって……思います。大人だなあって」  
七海「違つものよ（※クスクスと笑って）大人がってるだけ。……誰かを想う気持ちに大人も子供もなりでしよう？ 分かったふりして、誤魔化して、譲れないところで意地張って……。……寂しいのね、きこつ……。けど、それって悪いことじゃないと思うわ。海で一人、沈んで行くよりなんかはずっと」  
深月「（クスツと笑って）」  
七海「なに？」※意外だった  
深月「やっぱり、枢のこと、好きなんじゃないですか」  
七海「え……？」※呆気にとられる  
深月「そーいう顔ですよ、それは」  
七海「……（※そつと自分の頬に触れて、クスリと笑い）そんなわけないじゃない」※黒辺の呪縛から一歩踏み出した  
深月「そうですね」※苦笑

波の音

M深月「……キー、私ね……、……マジキに言いたかったこと、沢山あるの。……だから、」

「3」

仁 「だから戻ってきてよー。///ｼｷｰ」

深月 「話させて、今度はちゃんよ」

///ｼｷ 「っ……」

月 「と口敷……」

仁 「///ｼｷっー」

///ｼｷ 「僕は……」

深月 「私は、向き合っから。貴方よ」

///ｼｷ 「僕は、帰らなうよ。仁」

仁 「っ……」

深月 「この海の中で、ちゃんよ」

///ｼｷ 「だめだね」

深月 「貴方よ……、向き合ったら」

仁 「癒へ」

#### 「4」次回予告

///ｼｷ・枢 「次回予告ー」

枢 「お前はいいよな///ｼｷ」

///ｼｷ 「え、うまなりえしたの」

枢 「仁可愛うし、深月可愛うし」

///ｼｷ 「枢だつて七海ちゃん美人じゃんか」

枢 「七海の女帝って通り名あるんだよねの人」

///ｼｷ 「く……くえ……」

枢 「水中戦でサメを絞め殺したとか噂になってるし」

///ｼｷ 「何それどう言うこと」

枢 「それにくぐとくしなんて可愛い方だなあって……」

///ｼｷ 「いやいややその比べ方はどうなのさー」

枢 「そういえばお前も深月なんだよね」

///ｼｷ 「え」

枢 「可愛いよな、///ｼｷって」

///ｼｷ 「ちよ、枢ー？、落ち着いてー。枢ー？、あ、あ、あーっー？」

枢 「次回、カラーテスト、第一話。僕、女にされちゃいました。——冗談だよ冗談。俺が深月に手を出すわけないだろ？」

///ｼｷ 「いやいや、信用できないんだよねえ……？」 ※キスしたじゃん

#### 「5」番外編

枢・仁 「番外編、ある日の双子」

仁 「ナーーーー」

枢 「……」

仁 「ナーーーー」

枢 「なんだよ」

仁 「……気に入らないんですけど」  
枢 「だからって足で踏む理由にはなっていない」  
仁 「あんた節操なさすぎでしょ。女なら誰でもいいのか」  
枢 「ああ、如月先輩。聞いたんだ？」  
仁 「耳ずと耳に入ってくるのよ。——あんたに捨てられた話とかね」  
枢 「あつそ」  
仁 「なんで女帝？ あの人があんたに声かけるとは思えないんですけど」  
枢 「声かけてきの向こうだよ。つか、俺から声かけるとかありえないだろ」  
仁 「つは——、モテ男はということ違うねえ」  
枢 「やけに突っかかるな。そんな悪い人じゃないよ、先輩」  
仁 「知ってる。生徒会長だしね。ただ心配になっただけ」  
枢 「なにが」  
仁 「あんた、本気で恋したことあんのかなって」  
枢 「……はあ？」  
仁 「真顔やめい！」  
枢 「バカじゃねーの」  
仁 「どっちがよ！ 人が心配してあげてるっていつのに——」  
枢 「人の心配する暇あったら自分の心配したら。お前こそ彼氏いたことねーくせに」  
仁 「うっさい！ 私はいいのよ！ 私はい！」  
枢 「あつそ」※立ち上がった部屋を移動する  
仁 「枢！？」  
枢 「まあ、軽蔑してくれんならそれはそれでいいかもな」  
仁 「はあ……？」  
枢 「仁は俺みたいになんないってことですよ？ 良いんじゃない？ それで」※部屋を出て行く  
仁 「ちよ、ちよっとなによそれ！ 意味わかんないんですけど——」

M 枢 「意味わかんなくて——よ、別に」

枢 「なんて、往生際がわりーか」

仁 「……何よあいつ。……………ふん」※なんかムカムカする

枢 「続く」

「6」

黒辺 「〇〇役××ですーオーディオドラマ『カニートヤス』はYouTube、Podcastなどの配信の他にポッドキャスト入  
ーとやシナリオなどを封入した有償版の配信も行なっておりますー第10話、第11話のポッドキャストは『次回予告は終わら  
ない』『番外編、ある日の双子』。(適宜に一言口を入と追加してください)。詳しくはポッドキャスト『カニートヤス』  
公式サイトをご覧ください」

【12】「深き月、水面に沈めば」

「」

三ツキ「ずっと隠しててごめんね。あと、久しぶり。仁」

仁「―――」※呆然と、息を飲む

三ツキ「えっしたの……？」

仁「深月……深月だ……」

三ツキ「ああ……うん、そうだよ？」

仁「……！ ぶっ、ごめんっ……深月が深月なのは当たり前なんだけとっ、えっと……、……深月なんだね……？」

三ツキ「うん。小学校2年ぐらひまでかな……？ まだ軀が仁と仲良かったぐらひまでは一緒に遊んでた深月だよ？」

※苦笑

仁「っ……」

三ツキ「えっかした……？」

仁「うっん……なんかよくわかんないけど……私っ……」※ホロホロ涙が溢れる

三ツキ「……仁……」※罪悪感

仁「久しぶりっ……深月っ？」

三ツキ「……うん……。……驚いた？」

仁「そりゃあもっつ……！ けど、わかった。……確かに私の知ってる深月はあんたで、あっちの深月も私の知ってる深月なのね。納得！」

三ツキ「もしかして気づいてたの？」

仁「うっん……。…… けど、なんかある日急に『深月ってこんな感じだったけな！……？』て思ったのは覚えてる。

元々腫しかったけど妙に氣遣いが上手くなったっていつか、女の子らしくなったなって」

三ツキ「ああ」※心当たりある。深月はそういう女の子として『生まれた』

仁「私の良く知ってる深月はこちの深月だったんだね」

三ツキ「……だけど、本当の深月はあっちなんだ」

仁「え……。？」

三ツキ「僕はさ、御神様なんだってさ。神様の生まれ変わり。詳しくはわかんないけど、多分深月って女の子がもともといたところに割り込んでしまったんじやないかな」

仁「向ここの深月が本物で、深月は偽物だったこと……。？」

三ツキ「本物とか偽物とか、そうじゃなくて。別々の存在が一つの身体に入ってたって感じかも。……だから深月はあっち。僕は神さま」

三ツキ「だから僕は戻らないよ。……戻るわけにはいかないんだ。仁」

仁「神様だから？ 関係ないよっ、帰るっ？」

三ツキ「帰らない」

仁「なんでっ」※信じられなく、とっただ感で笑ってみせる

三ツキ「深月は……深月に任せた方が良さ」

仁「……………」

三ツキ「僕は必要ないんだ」

仁「深月……」

三ツキ「深月にもろしく頼むぞ」

深月「カラーテキスト 第12話、深き月、水面に沈めば」

扉を閉める

仁「待ってよ深月ー。深月ー！」

黒辺「あーあ、ほっぽり出されちゃったー」

仁「黒辺……」

黒辺「なんだよその顔。聖痕読んで外してやっただって言うのに」

仁「はあ……。ちよっと深月ー！？ 出てきなせう深月ー！？」

黒辺「アクタイプ過ぎだよ」※呆れて



仁 「だってウジウジしてても仕方ないじゃん。聞こえてるんでしょー？」

黒辺 「出て来るわけないんだよね……」

仁 「つはー……困った子ねえ……？」

黒辺 「そんな子供みたいな」

仁 「子供じゃない」

黒辺 「良く言うよ。辛い現実から逃げたくなるのは大人も一緒だと思っけ？」

仁 「逃げたって何にも解決できないでしょ？」

黒辺 「たくましいねえ……？」

仁 「それにさ、深月は一人で悩んで、……もう一人の深月を作っちゃってぐらゐ悩んで、それで今度はいなくなるって馬鹿だよ。それで別のところに行っちゃって結局おんじょうに悩むの目に見えてんじゃん」

黒辺 「――仮にも相手は神様だつてのに、良く言うよ」

仁 「神様でも深月なのは変わらないでしょ」

黒辺 「君に彼のなにがわかるんだろうねえ……？ 何年も。相談すらしてもらえなかった君に」

仁 「それは――……今が全て――」

黒辺 「愛はつよし、か」

仁 「はあ？」

黒辺 「僕はなんとなくわかるけどなあ……彼の気持ちも。あとで恨まれるよ、きこと？」

仁 「それは……、いやだけど……」

黒辺 「彼は自分自身が嫌いなんだよ。それとも自信のなさの裏返しか――……。……彼が深水深月は自分じゃない方がいいって思った結果がこれなんだろ？ なら、キスでもしてあげるしかないんじゃないかな」

仁 「はあー？ 馬鹿なのー？」

黒辺 「馬鹿もなにも大真面目さ。王子様のキスでお姫様は目覚めるって王道だろ？ 目を覚ましてやればいいんだよ。私には貴方が必要なの、貴方はここにいていいのよって涙ながらに訴えれば届く届く。定石だる」

仁 「小説の読みすぎなんじゃない……？」

黒辺 「失礼だなあつ、これでも魅せ方を工夫すれば涙抜きには語れない――、」※大作家ですぞー？

仁 「深月――！！！」

黒辺 「……聞いちゃいない……」

仁 「……無理だよ……深月は――、……深月は私を置いてずっと街で生活してたんだよ……？―― 私のことなんてっ……」

黒辺 「ふうん……、僕はそうは思わないけどね」※含みを持たせて

仁 「なによそれ……」※なんかムカつく

黒辺 「忘れられないからこそ、遠くにおこつてのち、あるんじゃないかな」

仁 「はあ……？」

黒辺 「不器用だよねえ、みんなさ」

ごぼろ

仁 「わっ――？」※流されそう

黒辺 「おおつ、急にっ……こりゃっ……」※幽霊なので余裕。少し驚いただけ

仁 「んんううっつ？！」※柱を掴んで耐える

黒辺 「風の影響かな。こんな激しい海流――、」

仁 「うつさいわねえー？ なんであんた平気なの――！」

黒辺 「幽霊だから」

仁 「死ね――！！ ていつか成仏しろ――！」

ギンギンときしみを立てる神社

黒辺 「てかこの建物やばくない……？」

仁 「もういつ壊れてもおかしくないって深月言つてたから――、おまこと深月――！」

黒辺 「しょうがないなあ……？」

仁 「はあ？！ 何処行くの――」

黒辺 「僕は幽霊だからね、鍵がかかっているところが壁があるところが関係ない――、」

仁 「……？！」

黒辺 「少し話して来るよ」

仁 「あ、も、ちよっと…… 黒辺……？ 深月……！…… も……！」

「？」

トントントントーと扉を叩き続けている仁

黒辺 「あーもー、大人しく待ってればいいのにー、って、わーっ……暗いよ。物理的にも精神的にも。なにしてるの君……」

///ｼｷ 「こんなことなら深月の中にいた方が良かったかなー……とか」

黒辺 「おいおいおいっ？ セッかく手に入れた自由だつてのになに言ってるんだ。というか、そもそも深水深月は君の方だろうっ？」

///ｼｷ 「いえ……僕はわたつ……なんかとこ様って人の生まれ変わりに似て。この体は元々深月のもので、僕はそこに、」

黒辺 「違つたる。笑わせるなよ。そりゃあ深月ちゃんへの押し付けで、彼女への裏切りだと僕は思つぜ」

///ｼｷ 「僕は……」

ギンギンときしむ建物

黒辺 「時間がないから單刀直入にいうけどさあ。お前を好きだつて言ってくれる女の子がいて、お前が女の体だろうがなんだろうが気にしないってんなら抱きしめてやりやいいじゃねーかつ。なにウシウシしてんだよっ？」

///ｼｷ 「後悔しているんですね」

黒辺 「してるよー。いまの七海は綺麗だけど、昔の七海はそれこそ食べちゃいたいぐらい可愛かつたんだー。ひん剥いてぐくぐくしてやりたかつたぞー！」

///ｼｷ 「うわぁ……」※苦笑気味にトント引き

黒辺 「お前も男ならわかるだろうー。仁が他の男に抱かれても平気なのかよっ？」

///ｼｷ 「っ……、……深月が……抱とキスをした時……、なにも言えなくなりました……」

黒辺 「はぁ……？ ……あぁ……あの子も明後日の方向に突き抜けるからねえ……？」

///ｼｷ 「僕は……黒辺さんのようにたくましくはなれません……」

黒辺 「この僕の何処を見てたくましいだなんて笑っちゃうんですけどー」

///ｼｷ 「傷つくのが怖いんです……だつて僕は……。……『深水深月』には成れない」

黒辺 「見事にこじらせちゃつてまァー……？ いや、好きだけじゃね？ そつうつ子。とこさんねじれにねじれちゃつてる子は大好物なんだけじゃ……、……あの子たちが君を見てないつていつなら、そりゃあんまりだぜ」

///ｼｷ 「っ……」

黒辺 「差し出された愛に怯えてんじやねーやいつ、うつズッキエー」

///ｼｷ 「なんですかそれ」※意味わかんないんですけど

黒辺 「放送禁止用語に引っかかんだよ、悟れ、至れー」

///ｼｷ 「はぁ……？」

ぐきぐき

黒辺 「……？ー。おいおいおいっ、本格的にこの神社やばいでしょー？ 奥がどーしても勝手だけじゃ、仁ちゃんは返してあげないとマシむじろと思つぞー？」

///ｼｷ 「っ……じろぶっ……」※じろぶっ扉の方く

扉を開ける///ｼｷ、海流がコオー

仁 「///ｼｷー」

///ｼｷ 「仁……震らけむやっぱ僕はー、」

バキッと柱が折れる。扉が開いたことで屋根を内側から持ち上げられてうんぬん。

///ｼｷ 「……！ー 危ないー！」

仁 「くっ……、」

///ｼｷ 「仁ー」

仁 「///ｼｷー」

///ｼｷ 「っ……、」※両手裏の所で手を掴む、自分は神社の一角に掴まっ

つねり。ゴボボ、海流に流されそこになる二人。

///ｼｷ 「くっ……流されっ……」

仁 「うっ……///ｼｷー、泳ぐの得意だから私はー、」

///ｼｷ 「こんなつねりの中巻き込まれたら怪我するってー」

仁 「っ……？ー、なによこれっ……」

黒辺 「うっ……潮……ハリケーッかなあ……？」※死んでてよかったー

仁 「なんであなたは平気な顔してんのよ？ー？」

黒辺 「幽霊だから」※二度目

仁 「だっ……？ー、めっ……」

///ｼｷ 「仁っ……掴まっ……」

仁 「みっ……」

///ｼｷ 「手を……離さなっ……このまま岩の陰にっ……」

仁 「……」※くっとする

///ｼｷ 「んっ……」

M仁 「……覚えてる……、……覚えてる……この感覚……、私……」

///ｼｷ 「……っ……」

仁 「ん……」

///ｼｷ 「アッ……」

M仁 「そっ……私は……、私は///ｼｷの……」

海流、流れてくる流木

黒辺 「潮……」

///ｼｷ 「仁……」

仁 「くっ……」

///ｼｷ 「っ……」※両手裏の所で手を掴む

仁 「///ｼｷっ……」

流れてく///ｼｷ

仁 「///ｼｷー……」

黒辺 「行くな黒辺……」

仁 「だっ……///ｼｷ……、……///ｼｷ……、……」

M仁 「私は……彼の、その……、好きだったんだ」

「3」

海面、波が打ち

黒辺 「っ……？ー」

七海 「んっ……」

黒辺 「……名前を呼ばれた……」

## 雷

七海 「……また揺れてきた……」  
深月 「……七海さん、溺れる原因が精神的なものだと言われてたら信じますか？」  
七海 「気の持ちもので空が飛べるものになると言われてたって信じはしないですけど……」  
深月 「でもよね」  
七海 「……？ ……！ー なにあれっ……」

M深月 「つち潮——……？ でもこんな——、」

ヨウ 「じい様……？ 違う……これは——、」  
深月 「ヨウちゃん……？ ヨウちゃんっ！ どつかしたのー？」  
ヨウ 「……っ……海が……海が長らく自分たちを放っておいたじい様に怒って——、」  
深月 「はあー？」 ※海って馬鹿なのー？  
ヨウ 「じい様——、」

M深月 「あの中に……深月が……？」

深月 「……っ」 ※コウリと唾を飲む  
七海 「深月さんー なにしてるの—— あなたは——、」  
深月 「でも私……私はっ……」 ※前のめりに  
七海 「やめてっ……、もう少し待てば極くんも戻ってくると思っから」

M深月 「でも、……今行かなきゃ——、///ツギが……///ツギが選んで行くぢやない気がする——、」

七海 「深月さん……？」

深月 「大丈夫……大丈夫、大丈夫——……、」 ※自分に言い聞かせるように  
七海 「馬鹿な真似はよしてー」

## 海面

M深月 「溺れる感覚は今でもはっきりと思っ出せる。臆怯しくて、目の前が真っ暗になっ——、……すっぐ、怖かった。……けどっ……、」

深月 「……深月を失ったのは、もっと嫌だっ——、」

## 飛び込む

七海 「深月さん——」

## コボネ

深月 「っ……っ……ッ……、」

M深月 「やっぱり臆はでまなら——、凄く怯し——……海の中は真っ暗で……全容先も見えならはっ——、……けっ、」

M深月 「——深月っ……、」

M深月 「深月を感じる——、」

M深月 「しも行くからっ——、」

M深月「深月を——、感じる——、」

M深月「深月はっ……私がっ——」

流されてきた///ツキを受け止める深月

深月「深月——」

///ツキ「なっ……っ——」

ぽぽぽ

深月「っ……、」

///ツキ「深月——っ——」

M深月「ダメっ……、右も、左も——、流されて……息がっ……、けど右手は、……この身体は、絶対っ——……、」

M深月「深月っ……」

M深月「離しちゃ……ダメだっ——……」

ぽぽぽ。海流が止まる、底に沈む

深月「っあ……、」※ほぼ一、真はできなり

///ツキ「っ……なっ……とっして……」

深月「——、」※意識を失いかけている

///ツキ「深月——」

M深月「ああ——、そこに、深月がいる……ここに、深月が……。……どうやっても鏡越しにしか会えなかった深月が——、」

M深月「ちよならなんて言わないで。どうか、まだ私を……うつん、求められなくてもいい、ただ、私は、貴方を——、」

///ツキ「まさか、息が……っ」

深月「っ……（※苦笑してみせる）」

M深月「私はなにもしらない。……ただ、貴方がそこにいてくれる、それだけで私は……」

深月「うれしいの」※か細く、絞り出して

///ツキ「っ……」

深月「っ——……っ」※キスされて。口移しでの酸素供給（理論不明）

M深月「みつ……き——……っ」※朦朧とした意識で

M深月「そのとき、私は///ツキを感じた。///ツキの熱を、///ツキの想いを、……肌で、感じていた」

M深月「///ツキ——……みつきっ……」

///ツキ「っ……、」

M深月「私は——……それが嬉しいだなんて……許されるんだろっか——。この瞬間が、永遠に続けばいいだなんて、思ってもらいんだろっか」

///ツキ「……じつかりして、深月」

深月「私……好きだよ……？ 深月のこと……大好き……」

///ツキ「喋るなっ……しま海面に――、」

深月「大好きだよ……///ツキ……――、」

///ツキ「深月……？―― 深月―― おい―― 深月――」

M深月「だから、どこかもう少しだけ、できれば、あともう少し、……許されるならこの声を聞いていたい」

M深月「深月のそばで、彼の存在を……感じていたい……彼と一緒に……生きて……いたい……」

///ツキ「深月――」

M深月「願いは虚しく、海の闇の中へと消える」

M深月「私は――、私の意識はそのまま暗闇の中へと沈んでいった。月の光など、微塵も差し込みはしない。深海の、水底へと――」

#### 「4」次回予告

枢・七海「次回予告う〜」

枢「どうしたんですか」

七海「なっ、何かかしこー」

枢「いやいや動揺しすぎてしょ」

七海「なんでもないわよ？ ただ単純にクランクアップとか言いながらよくもまあノケノケと残っていられるわね、なんて愚っただけよ。……何よ、その巨」

枢「いえ、微笑ましいなって」※にっこり

七海「バカにしないで頂戴！？ これでも平気よ――！ 平常心なんだから――」

枢「だから何がですか」

七海「乙女心がわかってないわよ、枢くん」※□□□□表情が変わる

枢「分からないから聞いているんじゃないですか」

七海「だまらっしやい！」※照れが一周回って頭痛のタネに

枢「七海さんがそう言うならそうしますけど」

七海「はあ……どうして私が……」

枢「はあ？」

七海「煩い！ 次回！ カラーテキスト、最終話、目に見えないもの。……これからは遠慮しないから覚悟なせしー」

枢「可愛いなあ」※小動物みたいで

#### 「5」次回予告パート2

枢・///ツキ「次回予告のそのあとでー」

枢「つとに……なに怒ってんだあの人」

///ツキ「枢っ……かーなーめー」

枢「///ツキ。……なにしてんの」

///ツキ「いやあ……？ あんまにもイチャイチャしすぎてて入るに入れなかつたっつていつか、イイネー」

枢「なにが」

///ツキ「愚っただけじゃあ、七海さんと仁って正反対じゃん？」

枢「ああ……うん？」

///ツキ「何処に惹かれたの」

枢「ん？」

///ツキ「だから七海さんの何処が良かったの」

枢「……胸が大きいところ」

///ツキ「わー……」※素直だー

枢 「良い匂いするし」  
三ツキ 「ああ、確かにー」  
枢 「何気に手料理スゲえつまら」  
三ツキ 「それはポイント高いねー」  
枢 「でしょ。仁にはそつらつのが全然ならから」  
三ツキ 「あー……」  
枢 「でも仁なんたる？」  
三ツキ 「く？」  
枢 「お前。仁なんたる？」  
三ツキ 「あ、あ、あつはー……？ あー、うん？ うん？ まあ、うん……？」  
枢 「何処がいの」  
三ツキ 「え、いやあつ……？ それはその……」  
枢 「つるべただしがサツだし、魚は焦がすけど、何処がいの」  
三ツキ 「……か……可愛う……とこ……」  
枢 「は？」  
三ツキ 「可愛うからうじやんー 全体的にー 仁可愛うーー」  
枢 「……ああ、仁は可愛う」  
三ツキ 「うんー 仁可愛うー 可愛うなーー？」  
枢 「……素直じゃねーな、こいつ」

「6」次回予告のそのあとで、その2

仁・七海「次回予告のそのあとで、その2」

仁 「……………」  
七海 「あら、なにしてるのかしら。盗み聞きだなんて泥棒猫にお似合らね」  
仁 「どちがー っていうか大きい声出せなうでー」  
七海 「はあ？ ……ああ……、……仁可愛う」※ほそつ  
仁 「ひゃっー？」  
七海 「(クスクス)」  
仁 「七海さあーん……？」  
七海 「いいじゃない。好かれてるなら喜ぶなさいよ。あなたも罪人ね」  
仁 「だって全然褒められてる気がしませんよー！ 確かに私は七海さんみたくにおつきなりしスタイルも良くなりし、料理も……と……得意ではありませんけど……！ けど努力はしてるもんー！」  
七海 「努力？」  
仁 「エクスサイズとかバクとか……ちゃんと料理本見てるし休みの日はお母さんに教えてもらったり……」  
七海 「……可愛う」  
仁 「なにがよー？」  
七海 「思わず鼻血が」  
仁 「ふあ……！？」  
七海 「……確かにあなたはちんちくりんでおてんば娘だけれど」  
仁 「言いませんよ今時」  
七海 「そういう貴方が素敵だつて思つて貰えるのなら良いことじやない？ 楽で」  
仁 「楽つてー」  
七海 「なによ。良いつに奴隷に使える男が二人。良いご身分ね」  
仁 「私はそんなつ……、……私はただ……三ツキが喜んでくれればらうなつて……だから私……」  
七海 「うわあ……」※げんなり  
仁 「なんですかその顔ー」  
七海 「そつらつのは求めてないの。どちそつらめ」  
仁 「はー！？ ちよ、ちよこと待ちなれらよー！ 七海ー！？」  
枢 「仁」※すぐそばにいた  
仁 「枢！？」  
枢 「三ツキ」

仁 「ミツキ……ん。」

ミツキ 「あー……あはは……」

仁 「っ……っ……んん 七海さんのハカ……」

ミツキ 「あー……仕こちやこた……」

枢 「……やっぱ可愛うよな、仁こ」

ミツキ 「枢も大概だよなえ……ん。」

枢 「んん」※何食わぬ顔で



【13】 「目に見えないもの」

「1」

///シキ 「子供の頃から大人しくて、手のかからない良し子だって、言われて育った」

///シキ 「小学校に上がる頃までは深井神社もまだ健在で、たまにその手伝いもして」

///シキ 「良し子でいようと、言われたことに従って。反発することもなく、良し子を選んで。だからだろっか、小学校に上がる頃には男子によく揶揄われたり、虐められるようになって」

///シキ 「オホホ口神社だとか、今日は巫女服じゃねーのとか。他愛のない、今にして思えば気にするほどのでもないものだったんだろっけえー、彼らはきつと僕を抱えている違和感を敏感に感じ取っていたのかもしれない。

///シキ 「僕は、鏡に映る自分を見てはこの子は、誰なんだろっつて、ずっと思っていたから」

波の音、教室

「2」

M深月 「ここ……は……」

仁 「ねえ、深月はもう好きな人とかできた？」

深月 「く……？」 ※中身は///シキ

仁 「すーきーなりーとー、樫があすちやんに好きって言われたらしくてちゅ」

深月 「ああ……」

仁 「深月は？ そっつこ子、いるの？」

深月 「僕は……」

仁 「んっ？」

M深月 「……昔の……深月……？ 私の生まれる前の……？」

深月 「仁はどっなの？ 誰かいるの？」

仁 「いっ……いないもっ、……まだそっつこのは……わかんないっ」

深月 「ふーん」

仁 「なによね」

深月 「嘘つくこと分かりやすくなっつて」

仁 「嘘じゃないもーんー！」

深月 「あはは」

波の音

M深月 「――……、そっか……確か、この後……」

深月 「（一人で泣いてる）」

深月 「……、……？ ……？？ 私……あれ……？」

M深月 「……私が生まれたんだっけ」

深月 「（泣いている///シキ）」

M深月 「――……///シキ……」 ※別れを告げるように

「2」

波の音、船の上

深月 「んっ……んっ……」  
七海 「深月さんっー？ 深月さんー？」  
深月 「七海……さん……、」  
七海 「よかった……目が覚めて……」  
深月 「こっ……は……？」  
三ツ 「っ……？ー」  
仁 「深月っ……！ー」  
深月 「三ツちゃん……仁……」  
仁 「っ……よかった……本当に良かったー……」 ※くるくる  
三ツ 「……」 ※不気げな表情  
深月 「……？」 ※三ツの反応に違和感  
七海 「全くもう……疲れたわよ……」  
深月 「……えっ……？」 ※体を起こす  
七海 「人工呼吸。極くんに教わっててよかったわ……それにしてももう胸がクタクタ……」  
深月 「……七海さんが……助けてくれたんですか……」 ※事態が飲み込めな  
七海 「はい。その子が溺れていた貴方を引き上げて来てくれたのよ」  
深月 「三ツちゃんが……、……！ー。そ、そうだった、深月ー！ 深月はー？」  
七海 「なに言ってるの、深月は貴方でしょう」  
深月 「そっじゃなくてっ……！ー」  
三ツ 「覚えて……うらっしやらならんですね……？」  
深月 「……私は……、」  
三ツ 「……」

「3」

回廊・水中

三ツ 「……」  
三ツサ 「三ツちゃんっ……！ー。深月がっ……深月がー！ー」  
三ツ 「……っ……残念ですが、もう……」  
三ツサ 「……正に、戻せならかな」  
三ツ 「……」  
三ツサ 「深月は元々壁の中でした。だからまたー、」  
三ツ 「ダメです」  
三ツサ 「三ツちゃんー」  
三ツ 「お二人を分かつ事は話が通いますー。深月さまはもう……つまり、このお方を助けるという事で、三ツさまの命を……それにこの世で過ごした時間であれば三ツさまよりも深月さまの方が長い、おしがするよ……」  
三ツサ 「三ツちゃん」  
三ツ 「嫌ですー！ー」  
三ツサ 「……」  
三ツ 「……浅ましい女だっ……襲んでくださるのも結構ですっ……。私は……私はそれでも三ツ様と共にありたいのですっ……」  
三ツサ 「っ……」 ※その腕を伸ばす  
三ツ 「っ……」 ※叱られるからひく  
三ツサ 「……ありがとうございます……」  
三ツ 「……」  
三ツサ 「……嬉しうち」

田村 「う……」  
///シキ 「……君は言ったよね。記憶はなくても僕はかつての僕とおんなじなんだって。……なら……わかるよね……？」  
田村 「えっしてっ……えっしてっ！ 口様は私にはかりっ……、 口様はっ……するんですッ……」  
///シキ 「むん」  
田村 「するんですっ……するっむねえ……！ そっやって謝ればっ……えっして……私の頭を撫でれば……許してあげえるっ……あなた様はっもっ……」  
///シキ 「昔の僕も弱かったんだろね」  
田村 「く……？」  
///シキ 「呆れ張りで……だから君の前では立派であることしたんじやないかな」※苦笑  
田村 「でしたらっもっっ、 ちよっなことは……」  
///シキ 「っっん。だからこそなんだ」  
田村 「……？」  
///シキ 「仁はそのままでっして……黒辺さんは割細なっしてっ言ってくれて……。それでも僕は——……なのに深月……こんな僕を守ってくれた……今まで、 ずっと……なのにまだ……、 ……だから僕は……今度は僕が、 深月を助けたら」  
田村 「口様……」  
///シキ 「深月をなかつたことにならんんだ」  
田村 「う……」※昔の口様と同じ表情だった  
///シキ 「我が儘言って……むんね？」  
田村 「口様はっ……！ 全くもって口様は—— 変わってありません—— 少しはっ……皆々の少しでもうっからっ……あなた様を想ってる者の身にもなってくださいませっ……」※髪をまとめていたかんむりを引き抜く  
///シキ 「んん……？」※察して  
田村 「このかんむりに込められた口様の力も、 もっあまり残っれておられぬ……故に、 えっまでっまく行くかはわかりませぬが——っ……例え……例え、 これでまだお別れすることになることも……私はっ……///シキはっ……、 ずっっとお慕え申っしておりますっ……——。だからえっか……えっかっ……——、 ……私のことを……おっ……お忘れにならなくてくださるっもっ……」  
///シキ 「ありゃっ、 ……///シキちゃん？」  
田村 「——うえっ……」※呆顔で

#### 鈴の音

田村 「えっか、 む無事だ——ッ……、 」

むんね。水深。

「4」

田村 「……記憶が曖昧なのは元に戻した後遺症でしょっ……」  
深月 「……そっか……それで……（※そっとな腹に手を当てて）私か——……、 」  
仁 「——深月……？ ///シキは……？」  
深月 「……」  
仁 「そんな……」  
深月 「——仁……」  
仁 「——……私……、 らま——……」※男の深月がらなくなったことがショックだった  
深月 「しのぶ」※いらんだろ、 えっしてあげようとする、 が。  
仁 「っ……」※海に飛び込む  
深月 「仁——」  
七海 「仁ちゃん……？」  
深月 「ッ……——」※週うかけもっとして  
七海 「駄目—— 危険も——」  
深月 「だっど—— 仁—— 仁——」※海の中に呼びかける

ぞっぱーん、と出てくる枢

枢 「っ……はぁー疲れた……っしょ……アウー……」※酸素がへぐ船に載せる。重い。

深月 「枢！」※呆然と

枢 「なに。遅いと言われても、」

深月 「連れ戻してきてー！ー 仁ー」

枢 「……？」

深月 「早くー！ー」

枢 「分かったー！ー、」※仁のことになると回転早し

七海 「枢くんー！ー」

飛び込んで消える枢

七海 「っ……もっっ……勝手なんだからー！ー」

深月 「……すみません……」

七海 「いいわよ。とにかく一旦学校に戻るわよ。 仁ちゃんのことば枢くんは任せる。……いいわね」

深月 「……はい……」

三ウ 「……………（んっ……）」※じっと深月を見つめる

「5」

風の中、海の底

M仁 「私っ……私っ——……」※深月にどんな顔をして会えばいいのかわからず

黒辺 「やぁやぁやぁー、 なーにしてんのこんなところ、

仁 「黒辺……」

黒辺 「浸りすぎじゃない？ 早く戻んならとマシで僕のお仲間入りだよ」

仁 「放っとしてよっ……」

黒辺 「同じ文芸部員仲だろ？ 構っつよ」

仁 「構わないでよー！ー」

黒辺 「おやおや……」

仁 「っ……」※涙目

黒辺 「……仁ちゃんてさ、 まっすぐだよね」

仁 「なによ、 気持ち悪い……」

黒辺 「素直で一直線で、……そういうところは羨ましいと思ってる」

仁 「はぁ……？」

黒辺 「……深月くんと深月ちゃんが二人に分かれてた方がよかった？」

仁 「意味わかんない」

黒辺 「わかるだろ？ 君の初恋が、そして今なお想い続けているその想いが、成就するか否かって話だよ」

仁 「私は……、……私は別に……叶わなくてもよかった……。 もともとそんなのおかしいって分かってたし、 急に深月が男の子だって分かったからってそんな……」

黒辺 「けど嬉しかったんだろ？」

仁 「っ……」

黒辺 「相手が男の子なら、君のその恋はいたって正常なものだしね。 というか、 深月くん本人を好きになっていたって意味では素晴らしい純愛だよな。 姿形ではなくそのあり方に惹かれたってんだし」

仁 「……でも深月は……私のことなんて……。……それに私……深月の中にいるのが女の子の方だって気付いた時……私っ……、……最低だっ……」

黒辺 「あーらら……」

仁 「どっちの深月も……消えて欲しくなんてなかったのに……なのにっ……残ってくれたのが『本物の深月の方だったら良かったのに』ってどこかで思っちゃった……！ー！ー」

黒辺 「……それって仕方のないことなんじゃないのかなー？」

仁 「仕方なくなんてないー！ー」

黒辺 「……」  
仁 「もう……やだ……、どっしてこんな——……。……私はただ……深月と友達でいられたら……それだけでもかゝたのに……なんでっ……」※ぐする  
枢 「らしくねーな、お前」  
仁 「っ！？ 枢……！？」  
枢 「やっと思つけた……奥の方まで潜りすぎなんだよ」  
仁 「帰ってよ」  
枢 「帰れねーよ、お前置いてなんて」  
仁 「兄貴ツラしないで、双子なんだから」  
枢 「双子だからじゃねーって、アブねエから迎えに来た。それだけだろ」  
仁 「っ……」※言い返したところで譲ってくれないだろうと察している  
枢 「大体何があったにしろ逃げ出すなんて、どしたの。らしくねーじゃん」  
仁 「わっ、私だって独りになりたい時ぐらいあるのー 人をなんだと思ってるのさー」  
枢 「馬鹿一直線的な」  
仁 「はあっ！？」  
枢 「昔からうだうだ考えるより先に身体動くタイプだろ？ ……ああ、だからこんなことなってるのか」  
仁 「馬鹿にしてんの……？」  
枢 「いんや？」※馬鹿にしている  
仁 「はあああー！？」※ムッキー！  
枢 「いいから帰んぞ。深月も待ってる」  
仁 「……やだ」  
枢 「我が儘言っとなって」  
仁 「やだっ——！ ……私……、……深月にもう会わせる顔ない……」  
枢 「……なら、家に帰るか」※即決。それがいいな、うん。  
仁 「え……？」  
枢 「とりあえず家まで送るよ、んで学校へはそのあと行く。どーせ風が収まるまではあいつらも帰れないだろうっ、まあ、いいだろ」  
仁 「ちよ、ちよっと待ってよ……そんなの後回しにするだけで……、」  
枢 「なんの解決にもなんないけど、会いたくないんだろ？ なら、俺はそっすればいいと思つけど」  
仁 「あんたってほんと……」※辛いことからはずぐ逃げる  
枢 「なに」  
仁 「……いいわよ、私の負け。こーさん。……深月たちのところ、行く」  
枢 「ん……。だよな」※分かかってて言った  
仁 「……けど……やっぱ怖い……」※珍しく弱音  
枢 「大丈夫。お前は俺より勇気あるよ。馬鹿なだけかもしれないけど」  
仁 「なにそれ、励ましてるつもり？」  
枢 「そう聞こえんならそうなんじゃね」  
仁 「……………」  
枢 「……んだよ」  
仁 「別に」  
枢 「……なにがなんだか俺はよくわかんねーんだけどさ。……お前のそういう一直線なところ……俺は好きだから。……迷わず、突っ込んで見ればいいんじゃないのー」  
仁 「——枢……」  
枢 「……なんだよ」  
仁 「っ……なんでもないっ……」※先に行く  
枢 「はあ？」※追いかける  
仁 「あのさっ！ ……一度しか言わなからちゃんと聞いときなぞらよっ」  
枢 「なに」※あー？  
仁 「……ありがとね、……お兄ちゃん」  
枢 「……ん。……ああ……」※それはそれで思ったより悪くなかった  
仁 「……よしっ……」

ごぼぽ

「6」

ガタガタと震える窓

深月「……柩と仁……大丈夫でしょうか……」

七海「さあ」

深月「さあって——、」

七海「だってあそこですって待ってたって私達まで流されちゃってただらうし……。これだけ遅いってことは柩くんも流石にバテてるんじゃない？」

深月「心配じゃ……ないんですか……？」

七海「心配よ？　けど、柩くんはあの人じゃないもの。……大丈夫よ」※窓の外を見ている

深月「……そう……ですよ。……おまこと外の空気を吸ってます」

ガウ。廊下に出る深月

深月「……、……はーっ……」

窓ガラスに映る自分を見て。

仁、去り際の回想

△深月「……仁……酷い顔してたな……。……そつだよ、///シキ。やっぱ、《僕》は——、」

廊下を歩く

ポタポタと水滴

深月「——……仁……？」

仁「深月……」

柩「……はーっ……俺部屋行ってるかな……？」※ククク

仁「うん……」

柩「……」※すれ違いざまに深月をちらり

仁「あ……あのさ、深月？　私ね？」

深月「……もっっー！　心配したんだよ？　仁？」※男の深月

仁「く……？」

深月「心配したんだよ、仁？」

仁「///シ……キ……？」

深月「……うん？　なに？」

仁「///シキなの？」

深月「……まあね」

仁「——……、」※息を飲む

深月「驚かせちゃってごめんね？　目が覚めたのは《僕》の方だったんだ。……けどあっちの深月じゃなくて《僕》が目覚めた時、動揺した……。それで何でって、どうして深月じゃなくて僕がって思ってた……。……消えるハズだった僕が残って、深月がいなくなるなんておかしいって。……だったら僕が深月として生きようって思ったんだ。深月は元々僕が作り出したものだから。きっと出来るはずだって」

仁「深月……」

深月「けど、仁の酷い顔見て目が覚めた（※くすりと笑って）。……深月はもっっーないだよ？　……僕が深月として生きるしかないんだよ？　いままでは目を逸らしてたけどちゃんと向き合わなきゃいけないんだ。深月と……、

……仁とも。向き合わなきゃいけないんだよ？　」

仁「……そっか……」※苦い、深月の演技をしていることをこの時点で見抜いている

深月「僕、深月の代わりに精一杯生きるよ。深月に恥ずかしくないように、ちゃんと。……ごめんね、仁。僕が不甲斐ないばかりに」

仁「それで……ううの……？」

深月「く……？」

仁 「深月はわかってないっ……わかってないよー！ 深月のことも……！ー もっ！一人の深月のこともー！」  
深月 「仁……」  
仁 「深月だって……！ 深月だって……悲しいはずなのにっ……、そんなのっ……私っ……嬉しくないよっ……！」  
※気を遣わせていることを理解して  
深月 「ほくには……仁が……だからっ……、」※少しだけ動揺  
仁 「でこびんッ……！」※ぐちゃーん  
深月 「っ……？ー」  
仁 「フコッ！……そんな深月にはフコッ！ー」  
深月 「ったあ……」  
仁 「目が覚めた？ー」  
深月 「っ……？」  
仁 「目が覚めたー？ 深月ー」  
深月 「仁……？」  
仁 「深月は///ツキになれなりー ///ツキだってそっ、深月は深月でっ……！ー やっぱり違っも……！ー！」  
深月 「……」  
仁 「私が好きになっただのはもっ！一人の深月ー！ アンタは、私の親友の深月ー！ わかんないと思っただのー？ ほ  
かー！」  
深月 「仁……」  
仁 「……あんたまでいなくなったら……私……やだ。私……悲しいよ……」  
深月 「仁っ……」  
仁 「深月はどこかに残ってたわけじゃない。あんたを守るつもりだ。……その気持ち、なかつたこととしちゃ駄目だよ」  
深月 「だけど僕はっ……僕は深月を守るためにっ……！」  
仁 「だからあいつも、深月を守るつもりだんじょ……？ あんたがそうじょ……としたもつに。……わかるでしよ、深  
月……？ 深月は、そういう奴だって、よく知ってるでしよ……？」  
深月 「仁っ……仁っ……ああッ……！ー」※「あああ〜っ……」悲鳴に近い泣き声・慟哭。縋り付いて  
仁 「よしよし」※慰めて  
深月 「私っ……私っ……（再び号泣く）」  
仁 「……いーんだよ……深月は悪くない……、……バカ深月が勝手にしたことだもん。あんたは……、っ……悪くな  
らっ……」  
深月 「むめんねっ……むめんねっのなっ……」※自分のせいで深月は消えた  
仁 「っっん、っっん、っっん、いーんだよ、いーんだよ、深月……。……いーんだよ……？」

M深月 「深月は、……もっらない。……ほっかり空いた穴すら感じられず、そこは深月がいたことすら錯覚だっただも  
に思えるくらっ……。だけど、私は――、」

深月 「深月いー……！ー」※泣きながら

M深月 「深月のことを、求めてしまっ」

深月 「あああっ……」※泣き続ける

仁 「……深月……」※慰める

黒辺 「あーっ、こぼん、こぼんこぼん。あー。感動のワッシャーのところにっしわけないんですカーッ、……幽霊  
の僕には全ても見通しなわけで。語らせてもらってもよろしうでしよーっか」

仁 「くっ……黒辺ー？ あんたちもっ空気よんで――、」

黒辺 「……深月ちゃん、いるよね」

深月 「く……？」

黒辺 「今までは一つに二つって感じだったけど、今は二人で一つって感じ？ 裏と表みたいなの。わかるかな」

深月 「深月が……中に……？」

黒辺 「君の、心の中に。ってね」

仁 「深月が……？」

黒辺 「よかつたね。深月きゅん？」

深月 「っ……。……っ……」

仁 「あーっ、 もーっ……！ー！ そっぽろぽろ泣かないでよね深月……！ー！」  
深月 「だってエっ……」  
仁 「もーっ……！ー！」

「7」

七海 「……なんだかよくわからないことになっているようにだけ……聞こえていた？ 枢くん」  
枢 「すみません、 割と眠くて全然……つか思いです」  
七海 「使えないわねえ……全くもっ、 何が何だかつ……それに今黒辺ってー、 ひっー？」  
枢 「っ……？ どつかしました……？」  
七海 「い、 いま……誰かに頭をー、 ……、 ……？」  
黒辺 「（苦笑）」  
七海 「……まさか……そんな……」  
枢 「……？ 七海さん？」  
七海 「……（苦笑して） なんでもないわねー。行きますっ？」  
枢 「はい」※眠い

深月たちに近づく七海

七海 「話は済んだかしら？ そろそろ帰るわよ」  
深月 「七海さんっ……、 帰るってー外はまだー、 ……あ……、 」  
七海 「……帰れるわよ。だってもっ……朝だもの」※あらあら？  
深月 「……」  
七海 「ーおはよう、 深月ちゃん？」  
深月 「……おはよう……むむいます」※苦笑

「9」

七海・枢 「13 .5話 深月と仁が部屋から出て言った後の二人」

ガラリ

七海 「お帰りがさい……よく頑張ったわね」  
枢 「はあー……なんかもーいろいろ見えてますよ……、 なんなら天使とか見えそ……」  
七海 「あらあら、 私がそこ見えるのかしら」  
枢 「意地の悪い天使もいたもんですね……」  
七海 「……お疲れ様」※汗を拭いてやる  
枢 「ん……、 」※甘んじて受ける  
七海 「……私はあの子にはなれそうもないわ」※少し罪悪感  
枢 「七海さん……？」  
七海 「まぶしいなって……思っちゃったわ？ あんなに真っ直ぐには私なれない」  
枢 「……いいんですよ、 それで。七海さんは七海さんなんだし」  
七海 「……いいの？」※意外だった。枢にとって仁は絶対だと思っている  
枢 「……お互い、 それはそれってことで……いいんじゃないですかね」  
七海 「……何だか随分爽やかに失態したみたいね。……少し、 勘ねてもいいかしら」  
枢 「どーぞ」  
七海 「むー」  
枢 「ふはは、 ……似合いませんね」  
七海 「そりやどーも」※ぷーっ  
枢 「……っ……ほんと……似合わないですよ」

M 枢 「我ながら」※最後まで自分は仁への想いを引きずるものだと思っていたが、 ここに置いて行くことに対して。



#### 【14】ヒロローグ

##### 波の音

深月「んーっ……、……ッはー……。風が気持ち良いな……」

M深月「風のそった後の海はとても静かで、……南から運ばれてきた風はとても心地よかった。船着場で黄昏れ、夕日を眺めるには丁度いい。一晚中家を空けていたことでの説教から解放されたのはついさっきだった」

深月「……うん……」※静かに深呼吸

M深月「夢を、……見た。……夢を見たような気がする。……懐かしい、深月と二人で海に落ちた。……そんな過去、私にはないのだけさ」

深月「……だけさ、嘘じゃありません。……きこえ」

曰ウ「――深月さま」

深月「……曰ウちゃん。……なんていうか、その……、……ごめんね？」

曰ウ「良いのです……何も……気にしないで……良いのです……。『///ズキ』は『これで』……良いのですっ……」

M深月「……同じか……この子も。と口様を失ってからもうずっと――……その人の事だけを想って――……」

曰ウ「深月さん……」

深月「『///ズキ』は消えたわけじゃないと思っただ。多分……ここにいる」

曰ウ「じゃー……」

深月「いるんだも。……わかるの」

曰ウ「………」

深月「……///ズキは……ずるいから。……引きこもり癖直ってならから表に出てきてくれないうえ……、……私にはわかる。あの子はここにいる。……話せなくなっちゃったけど？」※苦笑

曰ウ「そうですか」

深月「だからさっ。///ズキが戻る場所だけはちゃんと守っておこうと思っただ」

曰ウ「……目を、覚ますとも限りません。それに黒辺さんもおっしやったように『表と裏』。仮にと口様がお目覚めになっただとしても深月様は――、」

深月「（苦笑）――、好きだから」

曰ウ「深月さま……」

深月「誰の意思でもない。これは私の我が儘。私が///ズキを好きだから。だから、私は、///ズキを守り続けたい。――深月深月として」

M深月「彼の側ですって。――例えば、目には見えなくとも……私には、『わかるから』」

M深月「彼のほ、」※彼の（存在・魂・心）は、

M深月「ここに、いると」

深月「だから、待ってるよ。///ズキ――」

M深月「貴方が、目を覚ますのを」

「ポポポ」と喉音が深き上がる

M深月「これで、待ってる」

M深月「大丈夫だよな、きこも。——だっこしてあげ、しめてる時は体が動かしちゃダメだよ。だからきこも——、いつか」※ふんわりとした雰囲気切り替えて

バシヤーン、と海面から顔を出す音を入れるかは悩み中

「カリートヤスト 終わり」

「——」

クワッッッ

深月「オー・ト・オ・ト・ト『カリートヤスト』 監修・演出者、トシ・バ・ヤ・ー・まこちゃん、ユ・ア・ノ・豊嶋のこころ、ヤ・ノ・タム。キャスト（以下、各演者を『〇〇役xx』で統一ホチキレ回して頂戴）、制作はスタジオ・カリートヤストでお送りいたしました」

「——」

深月「〇〇役xxです。最終話までお聴きいただきありがとうございました。オー・ト・オ・ト・ト『カリートヤスト』はYouTube、Podcastなどの配信の他にもおまけエピソードやシナリオなどを特設した有償版の配信も行なっております—最終話を含む第1話、第1話、そしてエピソードのおまけは『次回予告パート2』『13話 深月と13の部屋から出て行った後の二人』、そして作中で使用された豊嶋のこころさんの『楽曲』です。（週刊に1回コメント掲載して頂戴）。詳しくはスタジオ『カリートヤスト』公式サイトをご覧ください」

演者陣、何かコメント付け加えたい方からさっしやれば——聞いて。

最後は深月で締めてください。